表１－２　石見銀山遺跡石造物分布調査の概要（銀山柵内）

群	寺院との関係	上限	下限	総概数	一宝	一五	組五	組宝	角塔	石仏	
1	石銀墓地Ⅴ	元和７(1621)	安永９(1780)	79	8	2	12	10	45	2	要石２、不明１
2	石銀墓地Ⅲ	慶長２(1597)	万治２(1659)	122	37	8		62	4	2	無縫塔６、マウンド１、基壇２
3	石銀墓地Ⅳ	慶長８(1603)	天明６(1786)	56	12	13		2	9	15	無縫塔１、三界万霊塔１、要石３
4	石銀墓地Ⅰ・Ⅰ東上下	慶長７(1602)	延享５(1748)	30	5	2		4			マウンド10、要石２
5	石銀墓地Ⅱ	元和□	正徳４(1714)	4	1	1		2			不明１
6	石銀墓地Ⅱ東			19	4	1	3	2			マウンド８、要石２
7	妙正寺跡墓地	天正17(1589)		559	34	24	20	15	517	24	
8	大安寺跡墓地	慶長15(1610)		115	3		2	18	54	14	
9	西本寺墓地	延享３(1746)	昭和49(1974)	209				1	201	7	
10	極楽寺墓地	寛永９(1632)	昭和41(1966)	124	17	1	1	2	23	63	
11	極楽寺前	文化13(1816)	昭和58(1983)	9						7	無縫塔×２
12	龍昌寺跡墓地	元亀３(1572)		606	106	85	44	45	159	63	
13	安養寺北墓地	寛政６(1794)	昭和21(1946)	102					100	2	
14	安養寺南墓地	宝永３(1706)	大正９(1920)	273	11	1			184	35	
15	本法寺跡墓地	享保11(1726)	昭和20(1945)	141	3	8	3	3	118	1	
16	本法寺跡境内	明治13(1880)		2							
17				17	11	1		4			
18	清水寺第Ⅱ寺院墓地	寛永15(1638)	明治５(1872)	54	3	13		5	11	10	
19	吉迫口	明治20(1887)		1						1	
20	大龍寺跡墓地	天正10(1582)	安永８(1779)	73	1	10	1	40	2	7	
21		宝暦７(1757)	昭和18(1943)	57					55	1	
22	大満寺跡墓地	安永元(1772)	昭和２(1927)	72	7	1		5	52	3	基壇×４
23	清水寺墓地	万延元(1860)	昭和49(1974)	49				1	20	27	
24		文化11(1814)	安政５(1858)	15					15		
25		慶応元(1865)	昭和13(1938)	24					19	1	
26	武田谷城跡										山城跡
27		寛文８(1668)		1	1						
28		宝暦９(1759)		2				1			
29	元極楽寺跡墓地	寛永４(1627)		362					362		
30	元極楽寺跡墓地	文禄２(1593)	昭和13(1938)	283	101	51	34	56	4	10	無縫塔×22　石碑×１　燈篭×４
31	順勝寺跡墓地	寛文３(1663)	大正９(1920)	280					280		
32	字甚光院	文禄３(1594)	昭和13(1938)	493	140	110	3	25	200	3	無縫塔×12
33		元文２(1737)	元治１(1864)	62	2	11	5		43		無縫塔×１
34				11	6	3					
35											
36	西福寺跡墓地	安永３(1774)	大正14(1925)	280	1			2	252	17	石臼×１　方柱×１　無縫塔×６
37	長福寺跡墓地	寛保元(1741)	天保８(1837)	8		1			5		無縫塔×１　水受×１
38	虎岸寺跡墓地	宝暦３(1753)	大正１(1912)	44				1	33	10	
39	神宮寺第１寺跡	天明８(1788)	昭和40(1965)		39			1	22	12	石碑×１（土人形×３　有り）
40	本経寺跡墓地	宝暦２(1752)	昭和58(1983)	224	17	8	7	5	181	3	無縫塔×２　燈篭×２　石製花立×２
41		明和３(1766)	天保７(1836)	56	3				50	2	無縫塔×１（六角柱型　位牌型有り）
42	徳善寺跡墓地	天正10(1582)	寛永４(1627)	53	50	1		2			
43	上徳寺跡墓地			4	2	1			1		
44	龍源寺間歩上墓地	天正15(1587)	元禄15(1702)	193	89	33		56	5	1	無縫塔１、花立１、自然墓碑１、板碑状２
45	妙像寺跡墓地	天正４(1576)	元禄15(1702)	9	3	4		2			
46	西向寺跡墓地	元文元(1736)	大正９(1920)	65	9	4	7	5	20	10	無縫塔×10（位牌型有り）
47	妙本寺跡上墓地	天正４(1576)	昭和	488	128	81	2	190	55	2	無縫塔×15、板碑状石仏10、他16
48	妙本寺跡墓地	元禄４(1691)	天明４(1784)	14	3	5		3	10	3	無縫塔×３
49	長楽寺跡第１墓地	天正18(1590)	明治３(1870)	212	39	7	13	33	56	7	無縫塔×13
50	泉光寺跡墓地	元和６(1620)		19	12	4		3			
51	泉光寺跡墓地	享保元(1716)	享保13(1728)	12				1	10		無縫塔×１（六角柱型有り）
52				1		1					
53				1		1					
54	萩峠口			5				2		2	台座×１
55	於紅ケ谷１			2		2					
56	於紅ケ谷２	文禄３(1594)	慶長15(1610)	7	1			6			
57	於紅ケ谷３	延宝６(1678)	延宝７(1679)	3		3					
58	於紅ケ谷４(天正在銘)	天正４(1576)		1				1			
59	本谷（本間歩付近）	天正20(1592)	慶長□	4	2	2					
60	本谷（金生坑付近）		寛政２(1790)	1					1		
61	安原谷	寛文４(1664)	万延元(1860)	8	2	1		4	1		
62	浄国寺跡１	天保３(1832)	弘化元(1844)	2					2		
63	浄国寺跡２			1				1			
64	浄国寺跡３	享保６(1721)	文化11(1814)	56	2	2	2	4	30	5	
65	浄国寺跡４			3		2		1			
66	浄国寺跡５	寛永11(1634)	文化14(1817)	13		3		4	5		
67	水落口付近１			2							
68	水落口付近２			4	1			3			
69	水落口付近３	寛政12(1800)	大正２(1913)	33					33		
計				6134	916	512	159	633	3249	372	

※寺院名は推定を含み、今後の調査研究によって変わる可能性がある。

Ⅳ－1　銀山柵内の石造物－平成12・13年度を中心として－

はじめに

石見銀山遺跡における石造物分布調査は、平成９年度以来継続して実施してきたところである。広大な遺跡の面積の割りには調査期間が短く、詳細な調査は行えていないが、その成果と課題について、ここでは平成12年度の休谷・清水谷地区、平成13年度の昆布山谷・栃畑谷・大谷・大森地区北東部を事例として、簡単に報告してみたいと思う。

１．調査の方法

調査については調査員で事前に協議を行い、以下のような方法をとることとした。①大田市教育委員会が作成したS＝１／500地形図に墓地として記載されている場所での石造物の確認とその周辺の平坦面を中心に踏査する。②確認した石造物を地形図に記入する。③事前に作成しておいた調査カードに地点名、石造物の数量を記入し、デジタルカメラで状況を撮影する。④主な石造物の銘文や特記事項を記入する。これらを平行して行うため複数の調査員で踏査する。また、現地調査が終了後、現場事務所にてデータの整理及びパソコン入力（ファイルメーカー）を行う。

調査カードの内容は、墓群番号、図面上での位置（地図番号、グリッド番号で表現）、石造物の種類、石造物の概数、銘文、調査年月日、調査者とした。

石造物の種類は一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合せ宝篋印塔・組合せ五輪塔・角塔（その他の墓標）・石仏・その他とし、それぞれの概数を記入した。石造物の概数は９以下は実数、10～49、50～100、100以上の４段階とし、実際には数えず、見た目で判断した。

銘文の記入はすべての石造物で行っておらず、石造物の形態から古手の石塔を中心に判読したため、墓群の年代の上限や下限は目安である。

２．調査の概要

分布調査を行い、結果をまとめたものが図１－２（p11・12）と表１－２（p13）である。グルーピングは社寺の建物跡や境内と考えられる平坦面がある場合は、その周辺の斜面や尾根上も含めて広範囲に括っている。複数の寺院が隣接したり、社寺の存在が不明な場合はグルーピングは曖昧なことになり、この点は今後の課題となる。以下、主なグループの概要である。

①主なグループの概要

（９）西本寺後方に位置し、寛永９（1632）年や元禄６（1693）年銘の無縫塔、嘉永２（1849）年銘の当山／中興／渕誉上人の無縫塔、正徳５（1715）年銘の石仏などがあり、近世後半から明治期の石塔が多い。

(11)極楽寺の参道の南側に十王堂が所在し、その建物内に木像の他、石仏がある。参道北側には安永７（1778）年銘と寛政11（1799）年銘の無縫塔が２基ある。

(15) 本法寺跡後方に位置し、享保11（1726）年銘の石塔、享保18（1733）年銘の墓標、延享２（1745）年銘の五輪塔、昭和20（1945）年銘の石塔など近世後半から明治期の石塔が多い。

(16) 本法寺跡には明治13（1880）年銘の「南無月蓮大聖人」碑がある。

(18) 清水寺第Ⅱ寺院跡の参道沿いに石仏や灯籠が存在する。境内の後方の斜面に平坦面があり、寛永15（1638）年銘や天保３（1832）銘の墓標、権大僧都法印良存銘の無縫塔などの石塔がある。雛壇状に平坦面は造成されず、斜面の加工は小規模である。

(19) 要害山の北側の「牛ノ首」に所在し、龕入りの石仏で、明治廿？（1887）年七月□／セワ人　林□／齋藤タキ／の銘が刻まれている。

(21) 大龍寺跡南方の尾根上に位置し、天明７（1787）年、文化９（1812）年、昭和18（1943）年などがあり、江戸後半の墓標が多い。

(23)清水寺後方の斜面に位置し、万延元(1860)年銘の灯籠、八十八か所巡りと考えられる石造

物がある。

(24) 清水谷製錬所跡の北側尾根上にあり、寛政2 (1790) 年銘の墓標、昭和13 (1938) 年銘の墓標、無縫塔などが2つの平坦面にある。

(25)清水寺後方尾根上に位置し、天保6 (1835) や安政5 (1858) 銘の墓標が少量分布する。

(27・28) 清水谷から仙ノ山に通じる道沿いに少量の石塔が点在している。

(29) 元極楽寺の下方に位置し、文化11 (1814) 年銘などの墓標のみが雛壇状の平坦面に存在する。

(30) 元極楽寺の後方の斜面に密集して石塔が存在し、一石宝篋印塔や一石五輪塔が多く存在する。吉岡出雲の石塔や無縫塔が22基以上ある。

(31) 順勝寺跡の後方の斜面を雛壇状に平坦面を造り、墓標を中心に多数存在する。宗岡佐渡の石塔がある。

(32) 字甚光院で、建物があったと考えられる平坦面の後方斜面や尾根状及び周囲に分布する。墓標だけでなく、一石宝篋印塔や一石五輪塔も多い。無縫塔が12基以上ある。

(36) 西福寺跡に所在し、数段の平坦面に墓標が数多く存在する。

(40) 本経寺跡周辺の斜面を数段の平坦面に加工し、そこに墓標が多く存在する。

(41) 銀山川右岸に位牌型や六角柱型を含む墓標がまとまって存在する。

(42) 徳善寺跡後方の急斜面の上方に少量存在する。戦国時代から江戸時代前半のもので、墓標は今回は確認できなかった（文献1）。

(44) 龍源寺間歩上墓地は妙像寺跡の後方に位置する尾根状及び東側斜面に平坦面を造成し墓域としている（文献1、2）。

(46)西向寺跡の南側及び後方斜面にあるが、数量は少ない。

(47) 妙本寺跡の後方の尾根上や斜面に位置し、石造物は多く存在する（文献2）。

(49) 長楽寺跡の南側の尾根上及び寺跡の東側の谷を挟んだ南西向き斜面も含んでいる。谷の東側の斜面は長楽寺に属するかは不明で、平成14年度に実施された悉皆調査では含まれていない。よって、悉皆調査時と分布調査時の集計表は合致しない。なお、分布調査時は (50) を別にグルーピングしているが、長楽寺跡として悉皆調査している（文献3）。

(52・53) 栃畑谷の奥に一石五輪塔が1基づつ分布する。

(54) 萩峠口番所跡の可能性が考えられる平坦面に石仏があり、平坦面後方の斜面に組合せ宝篋印塔が存在する。

（4）のうち文献2で石銀地区墓Ⅰ東下とされている地区は、周辺を「竹田地区」として発掘調査を行っており、併せて石造物の実測調査も行った。慶長7 (1602) 年銘の組合せ宝篋印塔など、14基の墓塔の石材がある(注1)。

（注1） 詳細は文献4で紹介している。文献2の墓Ⅰ東上の一石五輪塔（カード№378）は文献4の第8図4、文献2の墓Ⅰ東下の組合せ宝篋印塔（カード№376）は文献4の第8図14である。

文献1　島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』1987年
文献2　島根県教育委員会他「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山第3冊』1999年
文献3　島根県教育委員会・大田市教育委員会「長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地」『石見銀山遺跡石造物調査報告書4』2004
文献4　島根県教育委員会・大田市教育委員会「於紅ヶ谷地区・竹田地区」『石見銀山遺跡発掘調査概要12』2002

②調査の概要

分布　今回調査では52ヵ所以上で中世から近世を中心に石造物を確認した。石造物の多くは寺院に隣接して分布している墓塔・墓標などの石塔であったが、街道沿いや番所近くに所在した石仏なども確認し、多様な分布の仕方をしていることが判明した。

調査精度を上げれば、より詳細で多様な分析ができると考えられるが、今回は石造物の数量と立地の仕方で分類を行った。しかし、分布調査の精度に課題があり、すべてのグループを対象とはしていない。

A) 数量の多いグループ

石造物の数量を200基以上のものを挙げると、妙正寺跡（７）、西本寺周辺（９）、龍昌寺跡(12)、安養寺南（14）、元極楽寺（29・30）、順勝寺跡(31)、宇甚光院周辺（32）、西福寺跡（36）、本経寺跡（40）となる。現在でも継続している寺院や詳細は不明であるが、寺院名称が判明する寺院周辺に石造物が数多く残る。

B）数量が少ないグループ

概数で20基以下とすると、極楽寺前（11）、本法寺跡(16)、(17)、吉迫口(19)、(24)、(27)、(28)、(34)、長福寺跡（37）、上徳寺跡（43）、妙本寺跡（48）、(50)、泉光寺跡（51）、(52)、(53)、萩峠口（54）、石銀墓地Ⅰ（４）、石銀墓地Ⅱ（５）、石銀墓地Ⅱ東（６）がある。この内、(19）と（54）は峠の石仏、(11）はほとんどが十王堂の石仏、(16）は記念碑である。その他、１家系の墓域といったものが該当する。

石造物の在り方として、a）斜面を雛壇状に平坦面に加工し、石塔を配置するものがある。

妙正寺跡（７）、西本寺周辺（９）、龍昌寺跡(12)、安養寺（13・14）、本法寺跡（15）、大龍寺跡南方(21)、大満寺跡(22)、元極楽寺(29・30)、順勝寺跡（31）、宇甚光院周辺（32）、西福寺跡（36）、本経寺跡（40）、妙本寺跡（47）などがある。

一方、b）斜面を段の少ない平坦面に加工し、石塔を配置する。

(24)、(25)、長福寺跡(37)、虎岸寺跡(38)、泉光寺跡（51）などがある。

以上のように、数量と石塔の分布の仕方の２項目で分類したが、数量が多いグループは斜面を雛壇状に加工して石塔を配置し、数量が少ないグループは平坦面の数も少ないと分類できる。

石造物の数量が多く、加工段が多い理由としては、一つに古手の一石宝篋印塔など墓塔が存在することから古い時期から周辺の開発が進められ、墓塔を配置し続けた。さらに、江戸時代後半以降の墓標が多いことから、寺院が江戸時代後半以降まで長期間存続しえたことにより、石造物が集中したことが考えられる。１つの加工段に１家系が墓域として継続して造墓し、それが複数集まっている形態である。

数量が少なく、加工段も少ないグループは寺院の存続時期が短い、あるいは、古くに移転・廃絶している可能性が考えられる。

３．今後の課題

本来なら、石塔の形態や形態別の数量を視野に入れた検討を行う必要があるが、今回行えておらず、今後の課題である。石造物の分布の仕方は、各寺院や各地点で様相が異なっており、銘文や形態の詳細な調査を実施することにより、宗派・時期・石塔の形態・造墓の階層差など関連し合う様相が判明すると考えられる。また、石造物調査は発掘調査と寺院史や造墓者の階層を調査できる文献調査と協同で行える調査である。この特長を生かせば、石造物調査は石見銀山遺跡の石造物の様相を解明するだけでなく、石見銀山の歴史を明らかにする資料を提供できると考えられる。なお、最後に石材について、基本的には福光石を使用しているが、福光石以外では熊谷家墓地や勝源寺で確認されている花崗岩の墓標が極楽寺（10）に所在する。文久元（1861）年銘の西本坊第十二世の無縫塔であり、石材についても今後の課題である。

（守岡正司）

参考文献

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書１～４』2001～2004年

国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館報告９』1986年

水藤真「荘園の現地調査と石造遺物調査」『国立歴史民俗博物館報告９』1986年

Ⅳ－2　大森地区の石造物（1）

平成15年度における石造物所在調査は、調査委員会の方針に従い、従前行ってきた特定寺院付属墓地の悉皆実測調査の方針を変更した。早急に石見銀山地区内における石造物の分布の概要を把握する必要があり、従来の継続調査で未調査となっている大森地区内における墓石の分布調査を実施した。以下は、平成15年９月に集中的に行った調査結果の報告である（p９・10の図表参照）。

調査を実施した地点は、大森の市街地の西側の丘陵に立地する銀山川の上流から、**１・蔵泉寺口墓地**、**２・栄泉寺墓地**、**３・正寿寺墓地**、**４・妙蓮寺墓地**、**５・西性寺墓地**、**６・熊谷家墓地**、**７・勝源寺墓地**、**８・Ｈ家墓地**、**９・Ｉ家墓地**、**10・願龍寺墓地**、の10箇所であり、東側の丘陵に立地する地点は**11・大音寺墓地**のみである。

１・蔵泉寺口墓地で確認された墓石の総数は214基であり、このうちの199基、93％を占めるのは近世に一般的な近世墓標である。一石宝篋印塔の元禄３（1690）年を最古として、昭和31（1956）年の近世墓標を最新とする。一石宝篋印塔６基が確認されており、零細ながら17世紀代から形成された墓地と確認される。

２・栄泉寺墓地は、曹洞宗栄泉寺の西側斜面に展開する墓地であり、確認総数は614基であり、このうち紀年銘の確認できた資料は317基を数える。一石宝篋印塔の寛永３（1626）年を最古として、昭和48年を最新とする。一石宝篋印塔13基、一石五輪塔35基が確認されており17世紀代から形成された墓地と確認される。

３・正寿寺墓地は、曹洞宗正寿寺の北西斜面に展開する墓地であり、確認総数は752基でありこのうち286基の紀年銘を確認できた。一石宝篋印塔の元和７（1621）年を最古として、昭和45年を最新とする。主体は近世墓標であるが、一石宝篋印塔117基、一石五輪塔35基が確認され、17世紀代から形成された墓地と確認される。

４・妙蓮寺墓地は、日蓮宗妙蓮寺の立地する東に開く小規模な谷戸に立地している。確認総数184基であり、このうちの55基の年代が確認でき、明和６（1769）年から現在まで継続している。一石宝篋印塔が６基確認されている。

５・西性寺墓地は、浄土真宗西性寺の背後の標高186mを測る山頂の西側部分に展開している大森地区最大の規模を誇る墓地である。確認総数は1,675基を数え、これに平成14年度に調査した地役人である河島家墓地の26基、宗岡家墓地33基を加えると、1,750基となる。全てが近世墓標であり、元禄６（1969）年から平成までの紀年銘を確認できるものは1,022基を数える。明和（1770）年間以降に造立数が増加の傾向を示し、文化（1810）年間以降に急増して大正期に至っている。17世紀を代表する一石宝篋印塔・一石五輪塔が存在しない点から判断すれば、18世紀代中葉以降に急増した市街地住民を対象として形成されたものと考えられよう。

６・熊谷家墓地は、西性寺墓地の北側の斜面裾部、平成13年度に調査した熊谷家墓地の上部に位置する分家の墓地であり、15基を確認できた。

７・浄土宗勝源寺では境内に位置する奉行・代官墓を平成13年度に調査しており、背後の墓地の所在数を確認した。232基を数え、このうち一石五輪塔は３基を数える。

８・城上神社の北側斜面に立地するＨ家墓地は、城上神社の神官の墓地であり、宝暦９（1759）年から昭和７年までの27基の墓石を確認できた。

９・Ｉ家墓地も城上神社の神官の墓地であり、城上神社とは谷を挟んだ尾根の中腹に立地している。隣接する墓地を含んで15基を確認できた。

10・浄土真宗願龍寺の墓地は、本堂背後の尾根の中腹に造営されている。大半は整理されていることもあり65基を数えたのみである。

11・浄土宗大音寺の墓地は、銀山川東側に位置している。江戸時代初期の慶長年間以降の墓石の分布を確認でき、確認総数954基、このう

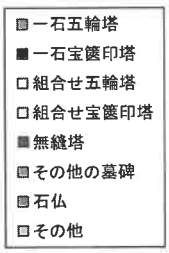
ち359基の紀年銘が判明している。墓石の造立数は元文(1740)年間以降に増加し、寛政(1790)年間以降に急増して大正年間に至っている。全体の趨勢は西性寺に類似したものである。

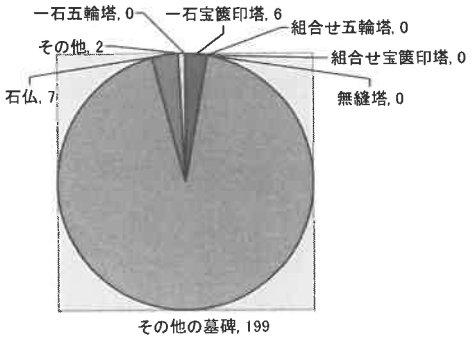
平成15年度に大森地区で確認できた墓石の総数は、4,826基を数える。このうち浄土真宗・西性寺墓地の1,750基、浄土宗・大音寺墓地の954基で全体の56%を占めている。西性寺墓地は近世墓標からなる新しい時期の形成にかかる墓地であり、殆どは西性寺に係わる墓標であるが、西側の一部には隣接する日蓮宗・妙蓮寺に関連する墓標、浄土宗の勝源寺関連の墓標も確認された。

西性寺よりも川上に所在する墓地には、17世紀代を代表する墓塔である一石宝篋印塔・一石五輪塔の若干の存在が確認され、本格的に墓地が形成される以前にも零細ながら墓地が造営されていた点が確認されるところである。

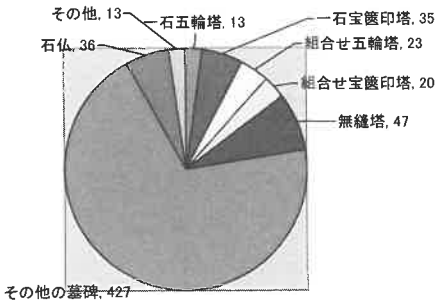
調査で確認できた墓石の分布状況から推定されるところは、18世紀代以降の墓石の造立数の急増であり、大森市街地の人口動態を反映した事象と考えられるところである。

今回の分布調査においては、調査を実施した西性寺墓地を含めて、地元に墓地を造営した地役人の墓地の存在も多数確認できた。資料が散逸する前に早急な相応の調査が望まれるところである。　　(池上　悟)

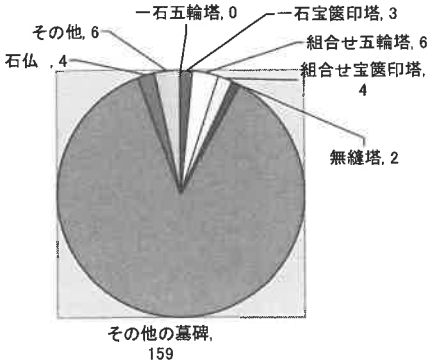




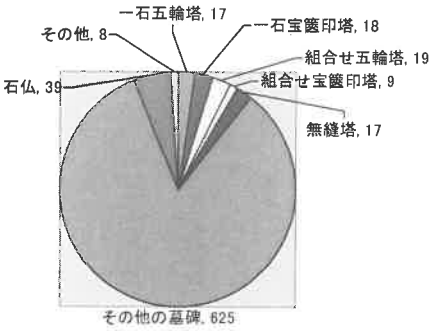
蔵泉寺口



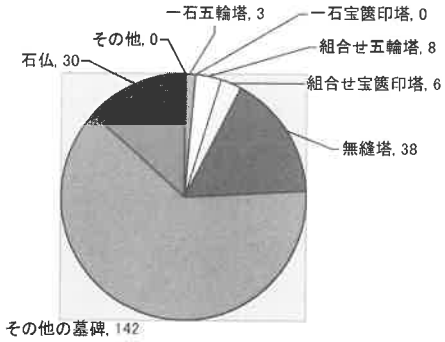
栄泉寺



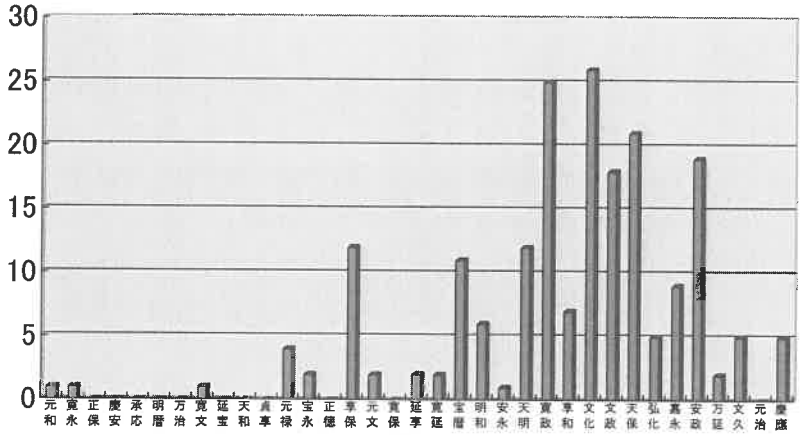
妙蓮寺



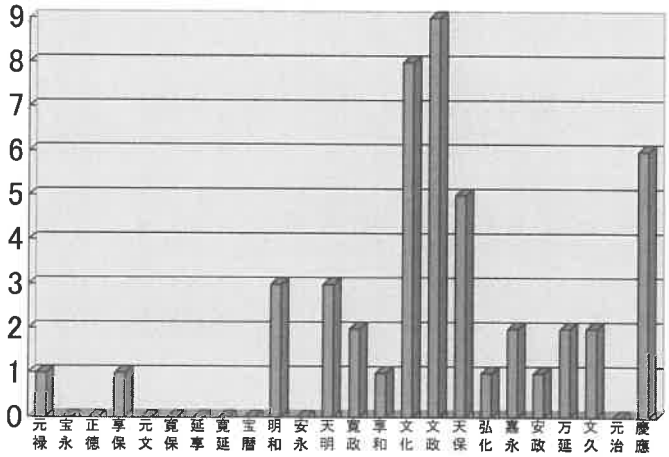
正寿寺



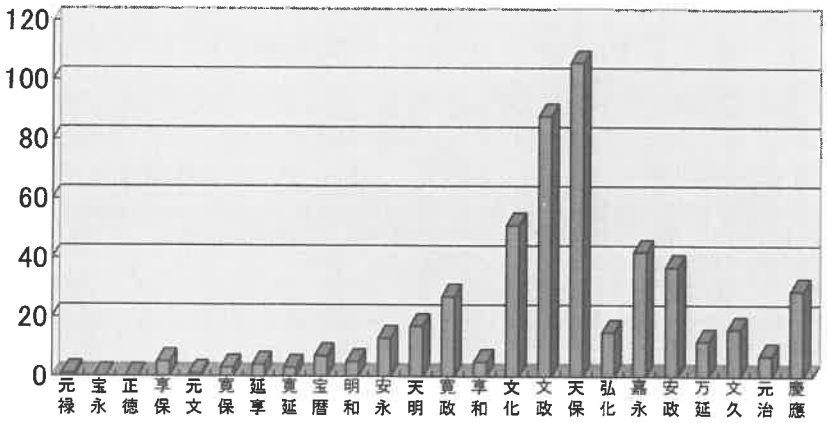
勝源寺



正寿寺



妙蓮寺



西性寺

Ⅳ－3　大森地区の石造物（2）

これは平成15年度に行った大森地区の石造物分布調査のうち、9月に集中的に実施した調査のあとを受けて行った追加調査の結果報告である。なお、調査箇所の頭に付した数字は、前記調査からの通し番号である。調査箇所は全部で9ヵ所で、平成13年度の分布調査結果を含むものである（p9・10の図表参照）。

12・羅漢寺墓地は、真言宗羅漢寺境内南東隅に寺関係のもの16（17）基、寺南東平担面と同北向き斜面に35基確認した。寺関係は、安永3（1774）年から昭和9（1934）までの無縫塔6基と天明4（1785）から昭和19（1944）年までの角塔、燈籠1対（無在名）である。他は、地蔵（明治年間か）1基、文化14（1817）年から平成11（1999）年までの角塔である。この中には、陶器製角塔型3基があり注目される。文久2（1862）年・明治3（1870）年・明治7（1874）年である。境内には、石祠付弘法大師像33基（近代）や10数基の石造物もある。

13・観世音寺墓地は、真言宗観世音寺裏の同一丘陵上に寺関係のもの11基、それ以外61基を確認した。寺関係は、享保19（1734）年から天保年間（1830～1844）の無縫塔10基、明治23（1890）年建立五輪塔1基である。五輪塔には、5人の供養として宝永7（1710）年から明和5（1768）年の年号が見える。他は4家のもので寛延2（1749）年から平成11（1999）年までの角塔、地蔵4基（近代）・一石宝筐印塔1基である。境内及び入口付近には、多種石造物66基がある。昭和5・6（1931）年在銘石祠付弘法大師像33基、文政6（1823）年在銘手水鉢がある。

14・狼谷入口は、地蔵が3基ずつ2基の石祠にあり、燈籠1基を確認した。地蔵は、明治24（1891）年在銘のものがある。台座には、安永5（1776）年在銘のものがある。石祠には、嘉永6年在銘と同7（1854）年在銘である。嘉永6（1853）年のものには、「石工波根東村六四郎三十五才」と刻まれている。

15・狼谷奥西墓地は、旧水田から少し登った北西向斜面から尾根途中の平坦面まで集っている。角塔275基・無縫塔2基・地蔵13基・五輪塔1基・花立1対を確認した。無縫塔は、元禄14（1701）年と文化9（1812）である。地蔵は、宝暦5（1755）年が最古である。角塔は、正徳2（1712）年から昭和63（1988）年までである。元祖供養の角塔は、延保4（1676）年として嘉永7（1854）年に建立されている。邑智郡日貫村と備中吉井村の人の角塔を確認した。1780年代から増加し、1890年代まで続く。ピークは、1850年代である。

16・中間奥東墓地は、小川を渡り旧水田から少し登った南西向斜面にある。黒川家に関係すると推定される。角塔8基と一石五輪塔1基を確認した。文化11（1814）年から明治35（1902）年までである。

17・城上神社元宮跡は、現城上神社の東の山頂上には、平面140cm×200cmの切石積基壇を確認し、少し西へ下った所に平面八角形・穴24cm角の鳥居亀腹1対を確認した。

18・県道脇墓地Ⅰは、代官所前と「責メ倉」入口との間の県道脇で一石五輪塔・一石宝篋印塔各1基（現在、調査事務所保管）を確認し、その上の西向き斜面で1石宝篋印塔を確認した。年号は、確認できなかった。

19・県道脇墓地Ⅱは、「責メ倉」入口県道脇で一石宝篋印塔5基を確認した。年号は、寛永期（1624～1644）とわずかに確認できた。

20・「責メ倉」屋敷跡は、谷奥にあり、敷地石垣・道石垣・井戸・石臼と旧水田石垣を確認した。

（宮本　徳昭）

Ⅳ－4　柑子谷地区の石造物

はじめに

石見銀山遺跡　銀山柵内の柑子谷地区は、元禄6（1693）年から御直山として元泉山の採掘が行われ、当初は水抜き坑として開発された永久坑は天明7（1787）年にかけて手掘で1,400m掘られるなど、また安永7（1778）年には「永久稼所」という名称が用いられるなど石見銀山における江戸幕府の中心的地位を担った地区でもある。

明治時代になると、明治20（1887）年に大阪の合名会社藤田組が全鉱区を買収し、「大森鉱山」として操業を開始する。明治32（1923）年に優良な銅鉱脈「内中瀬鉱」が発見され、大正初期にかけて最盛期を迎える。しかし、大正12（1923）年には採掘条件の悪化、戦後不況のため休山となり、昭和14（1939）年の国策による重要鉱物増産法により再開されてものの、同18（1943）年の台風水害により坑道が水没し、翌年には操業を休止し現在に至っている。

仁摩町教育委員会では、平成13～14年度に柑子谷地区を対象とした分布調査を実施したが石造物を主眼とした調査ではなく、藤田組操業時代の施設跡等平坦面、石垣、道を対象とした調査であったため、石造物の悉皆調査には至っていない。ここでは柑子谷地区の石造物について、その概略を記すこととする。

地蔵・祠について

銀山柵内の範囲内に地蔵は3箇所、範囲外で町道・林道沿いに2箇所存在する。このうち範囲外に所在する2箇所の地蔵については、昭和18年の水害の後に流されていたものを地元の人が拾い集めて現在の場所に安置したもので、元位置の確認には至っていない。町道沿いの**昭流地蔵**（a）と呼ばれる3体の地蔵はコンクリート製の祠に安置してあり、その前には下半部が欠損した名号石が1基立てかけられている。また、林道沿いには5体の地蔵が安置され、現在もお参りされている。

範囲内の3箇所については、大田市大森町との町境の峠になる「**牛ノ首**」（q）及び「**畑口**」（p）にそれぞれ1体が所在する。地元の結婚式等の行事の度に動かされるといった地蔵の性格から元位置を保っているとは思えないが、峠に所在することからその所在が大きく変化したとも考えにくい。**畑口の地蔵**（p）は、現在仁摩町の範囲に安置されているが、大森町側の巨岩に四角く穿った祠があることから、もともとはこの祠に安置されていたものと思われる。もう1体は、小丸山に所在する**小丸地蔵菩薩**（c）である。この地蔵の付近には民家跡が2箇所あるが、その地元の人の話によるとお寺の住職から「動かさない方がよい。」と言われてきたため元位置を保っているという。

銀山柵内の範囲内で、祠が3箇所確認されている。1箇所は牛ノ首谷の藤田組の製錬所施設跡の付近で、丘陵斜面の巨石に四角く穿った祠である。現在は何も安置されてはいないが、地元では「ふくべさん」と呼ばれる**稲荷神社跡**（b）で、以前には鳥居も建てられていたらしい。永久坑及び三宅坑よりさらに柑子谷川を上った右岸の平坦地にコンクリート・ブロック製の**祠**（i）が所在する。祠は2段の石垣の上に建てられており、中には陶製の恵比須像が安置されている。もう1箇所は、相談平と呼ばれる比較的平坦な場所の奥部の巨岩に四角く穿った穴に石製の**祠**（m）が安置され、中には小さな石像が祀られている。近年の島根県教育委員会が実施した間歩調査では、相談平に竪坑が1ヵ所確認されているため、この祠はそれに関連したものであろうか。

石碑について

銀山柵内の範囲内で、石碑を2基確認している。1基は永久坑跡の出口付近の柑子谷川右岸の斜面下の**殉職者之碑**（d）である。2段の基壇の上に自然石の碑があり、裏面には「大正二

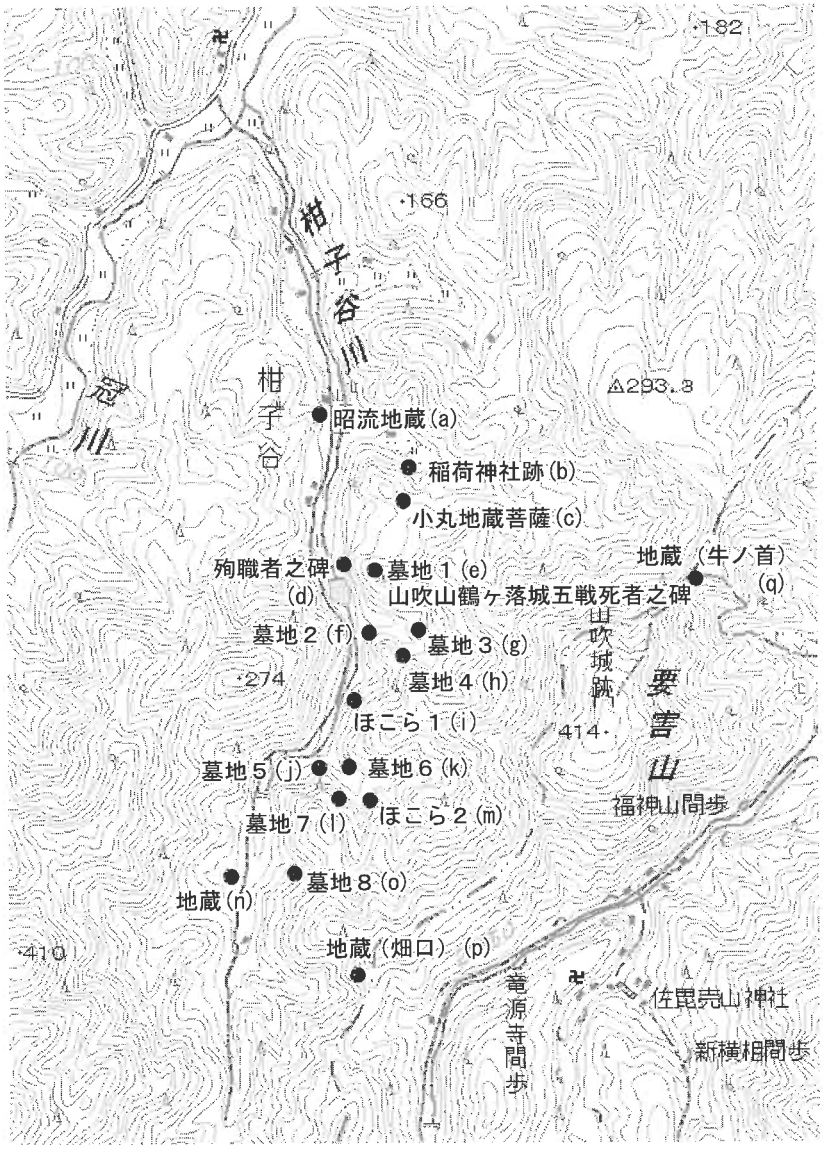
年十一月建立　大森鉱山青年会」と彫り込まれている。もう１基は、分布調査では「墓地１」としている旧大國村共同墓地にある「**山吹山鶴ケ落城五戦死者之碑**」(e) である。「永禄四年五月五日」の銘が刻まれており、地元では‘五人娘墓’とか‘鶴の墓’と呼ばれている。言い伝えでは、昔立て続けに５人の子供が死んだため、要害山から落ちてきたこの石碑をその場で供養したことから、そう呼ばれるようになったという。

墓地について

分布調査によって８ヵ所の墓地を確認している。前述したとおり悉皆調査を実施したわけではないので、それぞれの墓地において墓石の員数、個々の墓石の銘を調べてはいない。

墓地１ (e) は、三宅坑が所在する谷の北にあり、西に向かって伸びる丘陵の頂上付近の平坦地に所在する。先に述べた旧大國村共同墓地ではあるが、現在は無縁墓地となっている。墓石は比較的新しく明治～大正期の墓石しか確認していない。墓石の基壇に鍛煉瓦を使用したものが見られる。墓地全体では２グループに別けられる。

墓地２ (f) は、墓地１の南に位置する尾根の先端部に所在する。墓石の年代は天保、弘化、安政、明治のもので、備前屋などの屋号が読み



柑子谷地区の石造物（分布図）

取れるものもある。2グループに別けられる。

墓地3（g）は、墓地2から約70m谷に入った北側の小尾根の先端部に存在する。墓石の年代は文政期の円頂方柱型墓標のものが1基認められるが、その他は明治～大正期のものである。3グループに別けられる。

墓地4（h）は、墓地3の谷を隔てた緩斜面に所在する。個人の墓地とみられ、文化期の笠付方形型墓標、嘉永期の円頂方柱型墓標も見られるが、その他は明治、大正である。

墓地5（j）は、相談平へ入る谷の入り口で、南側の尾根の先端部に所在する。墓石の年代は寛政、文化、文政、天保、安政、文久で、他の墓地と比べやや量的に多い。墓石の基壇に地蔵を載せたものが1基確認されるほか、「誠譽制角法師」、「やくしあんの□か」と銘のある無縫塔が1基認められた。また、高嶋屋、藤野屋、森野屋などの屋号も見られる。

墓地6（k）は、墓地5から約45m谷に入った北側の小丘陵先端部の平坦地に所在する。今回確認した墓地では最も古い時期の墓石が集中しており、延亨、宝暦、安永、天明、寛政、享和、文化、文政、天保の銘が見られる。ほとんど個人の墓地と考えられるが、その多くは円頂方柱型墓標である。また、この墓地のみ五輪塔が1基、宝篋印塔が3基あるが、片付けられたように並べられている。

墓地7（l）は、墓地6の谷を隔てて南側の緩斜面、相談平の手前に位置する。量的にも少ないが、大正期の墓地である。

墓地8（o）は、相談平の谷からさらに柑子谷川上流域の右岸の丘陵斜面に所在する。墓地の下は立派な石垣が残る屋敷跡で、墓石も1基のみであることから屋敷の主である紙田屋の墓地と考えられる。墓石には文政12（1829）年の銘が残っている。

以上8ヵ所の墓地について記述したが、このほかにも昭和18年の水害で流されたと思われる墓石が4基地元の住民により柑子谷川の河原に集められ供養されている。今回の分布調査で確認された墓標のほとんどが無縁仏であり、またそのほとんどが地盤の陥没、猪の被害により倒壊するなど保存状態が良いとは言えない状況にあり、今後悉皆調査を実施するとともに保存整備する必要があると痛感するところである。

（長嶺　康典）

文献

仁摩町教育委員会『仁摩町内遺跡詳細分布調査報告書1』2002.3
仁摩町教育委員会『仁摩町内遺跡詳細分布調査報告書2』2003.3

Ⅳ－5　沖泊・温泉津地区の石造物

当該地域の石造物材料は、南東5kmに位置する福光の地から産出される「福光石」が占めている。しかし、江戸時代・明治時代には他地域産材料の石造物を少し見ることができる。花崗岩製数種・砂岩2種と、出雲部の「来待石」製である。石造物の種類は、最も多い墓石、鳥居・井戸・石仏等である。

沖泊地区には、寺院は正念寺（無住）のみである。墓石は集落南側の丘陵に集中し、鵜丸城跡への丘陵に小規模なまとまりがある（**地図番号15～17**）。約640基の角塔は、正徳2（1712）年から昭和にかけて建立されている。これらの一部は、正念寺跡へまとめられている。他には、一石宝篋印塔4基・一石五輪塔4基・宝篋印塔数基分・地蔵2種5基・無縫塔2基である。宝篋印塔には、寛文2（1662）年在銘がある。

福光石製墓石で特殊なものは、立方体型2基である。明和3（1766）年在銘と享和2（1802）年在銘である。明和3年のものは、「因州酒津浦／俗名□右衛門／年三十五才」とある。

無縫塔文化11（1826）年在銘は、「正念寺住／西念寺十三世弟子／施主坪内庄兵衛／妙善夏／父ハ飯原吉岡氏／母ハ福光坪内氏」とある。

花崗岩製墓石は10基あり、白色系・赤色系・淡灰白色系・灰白色系がある。正徳3（1713）年から天保9（1838）年のものである。「曽根の地蔵」の台石は赤色系で、享保8（1723）年在銘である。形態的には、大概4種に分けられる。

砂岩製墓石は明治中頃のもので、石質2種の数基である。

来待石製墓石は、明治13（1880）年から大正9（1919）年まで数基である。石祠1基もある。

鳥居は、恵比寿神社の白色系花崗岩製安永7（1778）年在銘、荒神社の白色系花崗岩明治20（1887）年がある。

井戸は4基全て福光石製枠で、丸型と四角形がある。

来待石製燈籠がある。集落南の丘陵集団墓地入口「曽根の地蔵」元地前（**18**）の1対である。

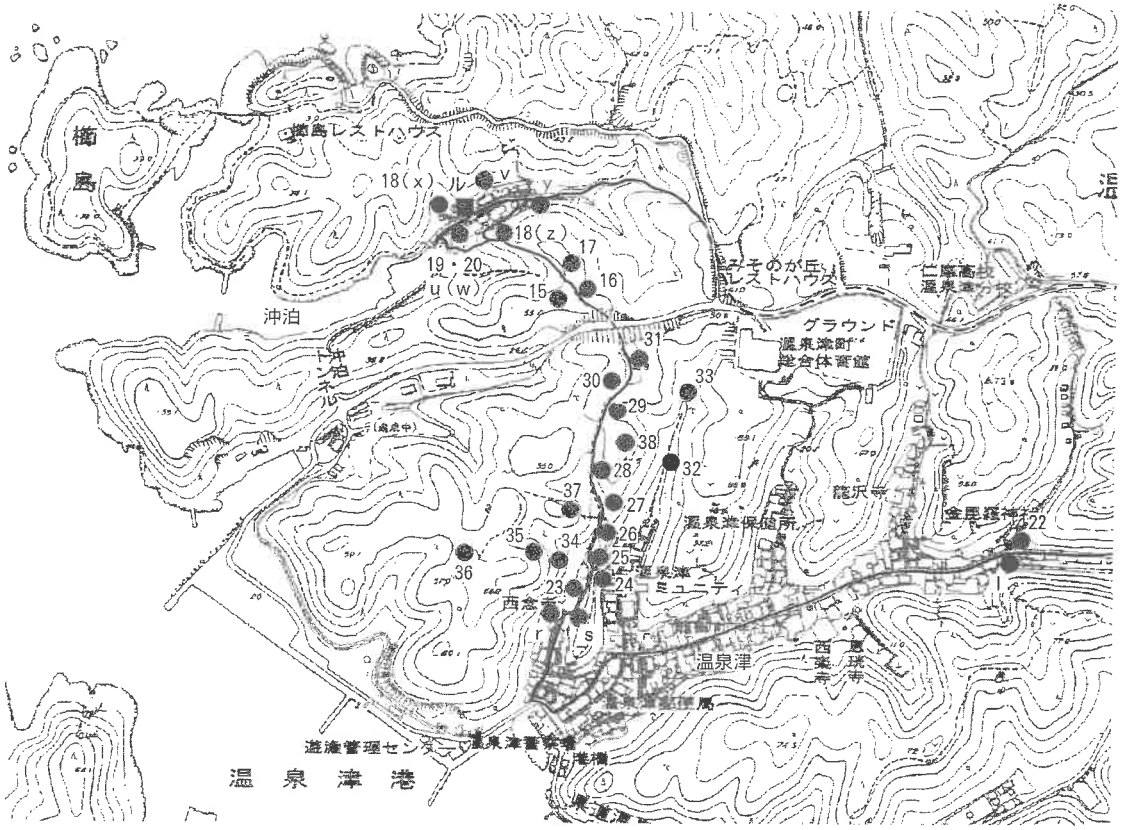
温泉津地区（温泉周辺）には、寺院は5箇寺があり、それぞれ寺域内に墓地がある。また、沖泊との街道脇等に墓石が集中ないし点在している。

街道脇等の墓石は全て福光石製である（**30・31・38**）。約230基の角塔は、宝暦8（1758）年から明治期にかけて建立されている。他には、一石五輪塔4基・宝篋印塔約40基分・地蔵20基・無縫塔1基・板碑様石仏1基・燈籠一基等である。一石五輪塔には、天正2（1574）年在銘がある。地蔵には、安永7（1778）年在銘がある。

沖浦浄土宗西念寺奥街道脇石窟があり（**24**）、伝松浦氏初代、2代のオオバタ石（細目）製巨大な宝篋印塔3基が安置されている。総高約175cm・隅飾幅52cmを測り、ほぼ同規模である。同窟には、碑面高144cmの板碑様のものが2種ある。

銀山柵内に数基あるが、街道脇にくり込み穴（仮称）が39基ある（**23・26・28・33～35・37**）。平面プランは丸形と方形、奥側は半分天井があり、穴の周囲には雨樋様の溝が巡っている。一部には、覆いを架けたと推定され穴もある。うがたれた時期が不明であり性格も不明である。地元では、し尿を溜めていたようであるが、場所的に当初からの用途としては不可解である。

寺域内にある墓碑については、詳細な調査は実施していないが、特徴的なものについて記述する。湯町浄土真宗西楽寺には灰色系花崗岩製2基あり、形態も異なる。文政10（1827）年在銘と天保9（1838）年在銘である。湯町日蓮宗恵珖寺には、初代銀山奉行大久保長安の逆修墓が角塔形式で文化9（1812）年に再建されている。50基前後集積された角塔以前の墓石群がある。巨大な宝篋印塔1基が含まれている。総高約235cm・隅飾幅約70cmを測り、現在銀山関係では最大である。「南無妙法蓮華経」・「慶長」と読める。また、通常タイプの一石五輪塔1基には、文禄4（1595）年と読める。銀山関係では唯一、海船問屋4軒の霊廟式墓地があ



温泉津・沖泊地区の石造物（『石見銀山街道　鞆ケ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』2004.3より）

る。福光石で長方形の板毎に戒名等を刻んでいる。

西念寺(r)には、総高約97cm・隅飾幅約33cmの宝篋印塔９基、総高約78cm・火輪幅約28cmの五輪塔２基、灰白色系花崗岩製角塔２基２種がある。五輪塔は、「享保」と読める。寺関係の墓地（窟）にも角塔以前の墓石が、数基紛れている。沖浦愛宕神社には、大久保長安の逆修塔で再々建の五輪塔がある。

鳥居は、中町瀧御前神社にある。享保16（1731）年在銘、「備前尾道藤原氏迫石工畑清三郎作」・「奉献温泉津氏子中」と読め、白色系花崗岩製である。境内には燈籠が２対と３基ある。文久２（1862）年在銘・明治10（1877）年在銘・年号不明の３基は、福光石製である。明治10年在銘のものは、「南部野口他」・「周防」と読め他地域の寄進である。大正２（1913）年在銘は来待石製であり、大正９年在銘は白色系花崗岩製である。

寺町真宗金剛院には、丸形と方形の井戸があり、方形は約150cm四方でかなり大きく、枠も３段以上ある。

金剛院の谷と温泉街との間の丘陵尾根に、20基前後の角塔墓地がある。この中に１基白色系花崗岩製のものがあり、文化２（1805）年在銘の沖泊にあるものとよく似ている。

その他内藤家には、種々の石造物がある。特異なものとして、「朝鮮燈籠」と「六角燈籠」が各１基ある。いずれも花崗岩製である。六角灯籠は、「太閤石」と呼ばれた。

上町の松山方面への分かれ道脇に「井戸正明君」碑があり、明治16（1883）年在銘、「石工坪内和七」と読める。　（宮本徳昭）

参考文献

「1999温泉津伝統的建造物群保存対策調査報告書」
1999.3　島根県邇摩郡温泉津町教育委員会

Ⅴ－1　石見銀山における墓石調査と成果

1

石見銀山周辺地区における石造物所在調査の一環として、過去に実施されてきた分布調査で集められた資料を基に、平成12年度以降に大森地区における特定寺院に付属した墓地の墓石実測を主体とした悉皆調査を実施してきた。

平成11年度に日蓮宗・妙正寺墓地、平成12年度に曹洞宗・龍昌寺墓地、平成13年度には浄土真宗・安養寺墓地、浄土宗・大安寺墓地、臨済宗・大龍寺墓地と大森地区の寺院境内に所在する歴代奉行・代官墓、さらには代表的商家の墓地として熊谷家墓地、平成14年度には真言宗・長楽寺墓地と浄土真宗・西性寺墓地内に位置する地役人家墓地として河嶋家墓地と宗岡家墓地を調査した。

特定寺院に付属する墓地の悉皆調査の目的の一つは宗派別の墓石の実態究明であったが、調査した墓地が規模の点で等質的ではなかったために必ずしも十全な成果をあげたものとは言い難いところもあるものの、安養寺墓地の調査からは浄土真宗に特有の墓標型式の存在と、時期的変遷を確認することができた。

この点は、従前調査の不十分な点に起因して近世墓標調査において問題と成り得なかった点であり、石見銀山地区の墓石調査の成果の一つとして強調できよう。

また16世紀の末葉以降に確認できる各宗派墓地では、墓塔表面に宗派特有の題目などの文字等を鐫刻しており、当然ながら墓地形成の当初より独特の宗派的特徴を明示している。石見銀山地区においては18世紀以降に盛行する近世墓標では、墓標表面上に鐫刻された頭書により区分がより明瞭になっている。

日蓮宗に特有の「妙法」、曹洞宗に認められる「帰元」・「帰真」、浄土宗の阿弥陀如来の種子である梵字の「キリーク」、真言宗の大日如来の梵字種子である梵字の「ア」などであり、浄土真宗の戒名に特徴的な「釋○○」とともに、墓地を形成する墓石の所属宗派を確認するのに有効であった。

調査した寺院墓地の殆どは先祖祭祀を断絶しており、妙正寺・龍昌寺・大安寺墓地の一部が各家の墓地として継続して維持されているに過ぎない状況であった。まさに墓地の形成は関連住民の動態を如実に反映するところであり、この意味において墓石調査が果す意義は大きい。総合調査の一環として墓石調査を位置づける重要な視点である。

江戸時代以来の大森地区の街区形成は鉱山の操業を基盤として果されてきた点は明白であり、寺院は幕府直轄領としての大森代官所および街区に集住した住民を基盤として維持されてきたところである。

戦後顕著になった人口の減少傾向は、墓地の様相にも甚大な影響を与えている。廃絶した寺院付属墓地からの有縁者の墓石の他寺院墓地への搬入であり、異なる宗派間でも行われている実態を確認できた。

更に大森地区に江戸時代以来形成されてきた墓地は、基本的に狭隘な谷部に形成された街区の背後の尾根上に占地しているが、近年では極端に檀家数が減少したために、境内周辺の平坦地に墓地が転移している。従って江戸時代に形成された尾根上を基本とする墓地の占地は、平地および傾斜地への人口の集住に起因したものといえよう。

2

悉皆調査を行った寺院付属墓地は、それぞれに特徴ある墓地形成状況を示している。日蓮宗・妙正寺墓地は北東流する銀山川に注ぐ小流により開析された、北に開く小規模な谷部に占地した境内地の背後の急斜面に墓地が占地しており、斜面を適宜に造成して小規模な平場を形成して墓地が形成されている。

16世紀末葉の墓地形成の開始以降に、必要に応じて平場を造成して拡張して墓地が造営されている。妙正寺本来の墓地は基本的に墓塔と墓

標が混在する状況を呈しており、谷部奥に並列する近世墓標のみで形成された一画は、墓石型式および確認できた戒名から後に他寺院から搬入されたものと判断された。

曹洞宗・龍昌寺墓地では、顕著に付属墓地の時期的変遷を確認できた好例である。谷部に占地した境内地の周囲の尾根および谷部最奥の高所に16世紀代に遡る墓塔を造立した墓地が形成され、18世紀代以降に顕著となる方柱状の石材を加工した近世墓標を造立した墓地は境内背後の谷部奥側に形成されていた。

また境内地に隣接しては、２基の代官墓が特別の区画として占地している。墓地中には代官関連墓、地役人家の墓地も位置しており、階層別の様相把握が墓石調査の重要な課題となる点が確認されたところである。

浄土真宗・安養寺墓地は、幅約40mの谷の出口に占地した境内地の背後に現在の小規模な墓地が形成されており、江戸時代に形成された墓地は谷の両側の尾根上に占地している。

墓標を主体とする18世紀代以降に主体的に形成された墓地であり、宗派特有の頂部を円く造作した高さの低い方柱状の墓標を特徴的に多用している。

浄土宗・大安寺墓地は、江戸時代銀山開発の始祖と仰がれる初代奉行・大久保長安の墓塔が所在する墓地である。北東流する銀山川に注ぐ小流により形成された谷部斜面を造成した平場に立地する現在の墓塔は寛政６（1794）年の花崗岩製の再建塔であり、当初の墓塔は明確ではないものの周辺に集積された大型宝篋印塔の部材のうちに求めることが可能であった。

大久保長安墓塔の立地する平場の周囲と、もとの境内地周辺に現在も続く小規模な墓地を確認することができる。

臨済宗・大龍寺墓地は、銀山川の北側の南に開く谷の奥部に占地している。早く廃絶したために、歴代住持の無縫塔が４基並列する平場の上の尾根に占地した小規模な墓地が確認できたに過ぎない。大龍寺が管理したであろう本来の付属墓地は、不明とせざるを得なかった。

真言宗・長楽寺跡は、銀山川の南側尾根上の先端部に立地している。境内地の周囲には歴代住持の無縫塔を中心とした墓地が形成されており、尾根の中央部には特定の宗派に限定されない墓地が隣接して形成されていた。この特定の宗派にとらわれない墓地形成の実態確認は、悉皆調査による成果の一つであり、現状で確認されたところではこの長楽寺墓地一箇所に留まる。

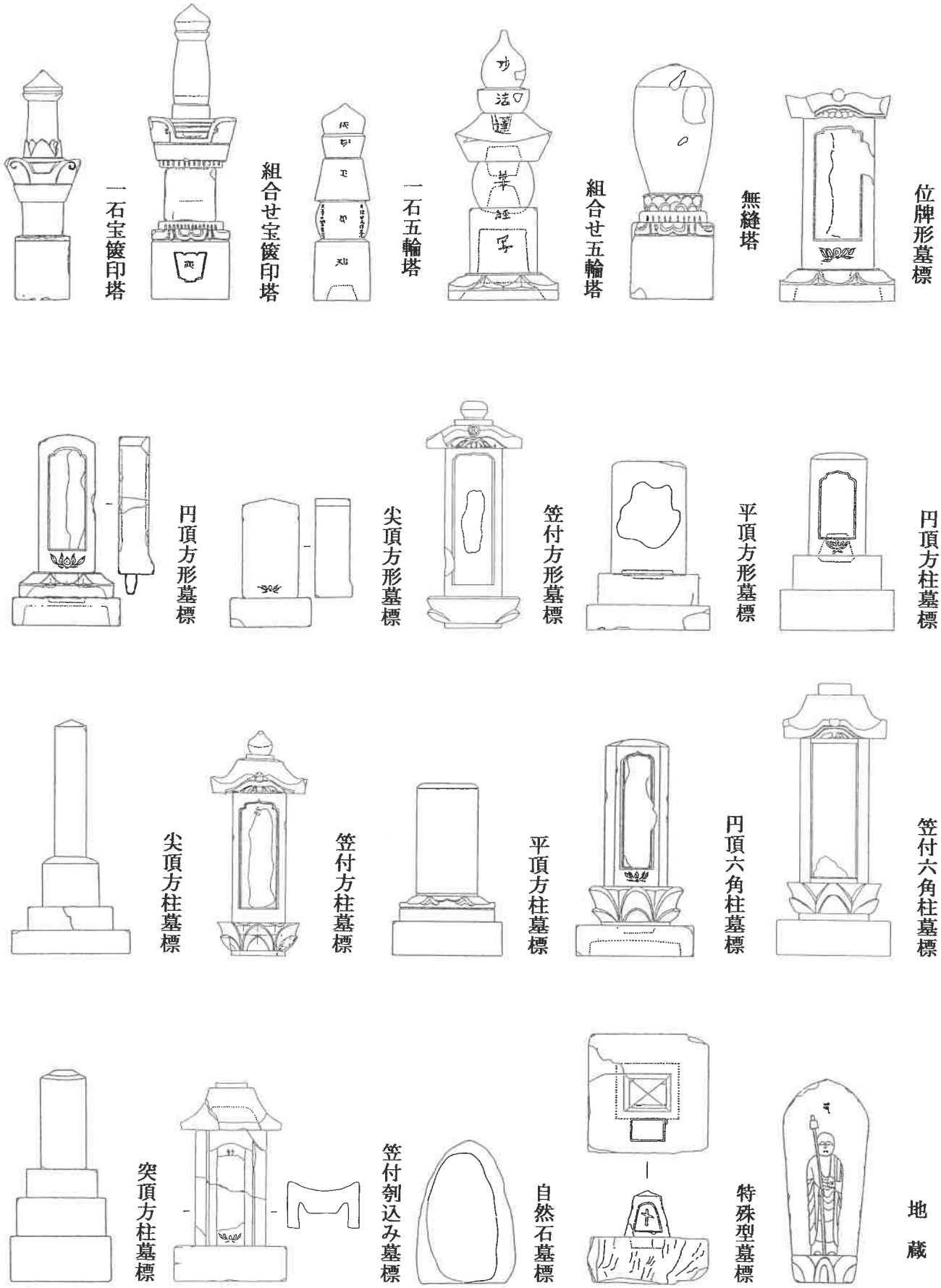
大森地区に形成された街区の周囲に濃密に形成された墓地のうちには、特定宗派寺院に付属する墓地とともに共同墓地とも呼べる宗派混交の墓地もまたかなりの割合で造営されていたものと考えられる。

墓石型式	日蓮宗 妙正寺	曹洞宗 龍昌寺	浄土真宗 安養寺	浄土宗 大安寺	臨済宗 大龍寺	真言宗 長楽寺	合計
一石宝篋印塔	34	106	10	3	5	39	197
一石五輪塔	24	85	3		6	9	127
組合せ宝篋印塔	15	45		5	15	11	91
組合せ五輪塔	20	12		3		4	39
無縫塔	2	17		5	4	19	47
位牌形墓標	16	6				2	24
円頂方形墓標	201	85	58	25		29	398
尖頂方形墓標	2	2					4
笠付方形墓標	12	5					17
平頂方形墓標	4						4
円頂方柱墓標	143	51	254	26	2	27	503
尖頂方柱墓標	1	4		1		1	7
笠付方柱墓標	3	3					6
平頂方柱墓標	4		2				6
円頂六角柱墓標	34	5		2			41
笠付六角柱墓標	8						8
突頂方柱墓標		4	1				5
笠付刳込み墓標	2						2
自然石墓標	1	2	1				4
特殊型墓標						1	1
地　蔵	23	58	17	14		7	119
合　計	549	490	346	84	32	149	1650

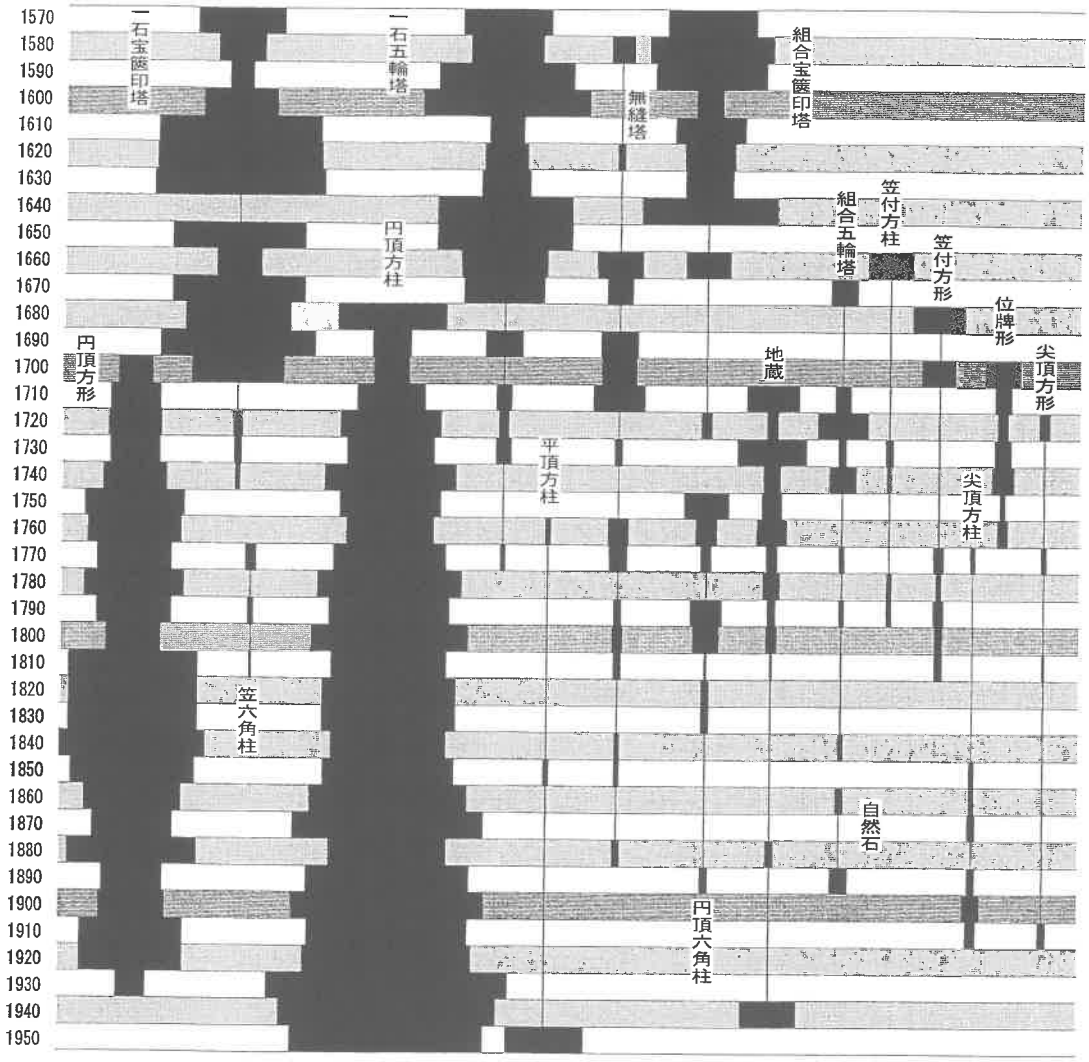
石見銀山地区・墓石型式別集成表

3

４年間で６ヵ所の異なる宗派の寺院付属墓地


一石宝篋印塔
組合せ宝篋印塔
一石五輪塔
組合せ五輪塔
無縫塔
位牌形墓標
円頂方形墓標
尖頂方形墓標
笠付方形墓標
平頂方形墓標
円頂方柱墓標
尖頂方柱墓標
笠付方柱墓標
平頂方柱墓標
円頂六角柱墓標
笠付六角柱墓標
突頂方柱墓標
笠付刳込み墓標
自然石墓標
特殊型墓標
地蔵

石見銀山地区・墓石型式



石見銀山地区・墓石型式別変遷表

において、実測を基本とする悉皆調査を実施してきた成果として、総数1,650基の墓石を確認することができた。

妙正寺墓地で549基、龍昌寺墓地で490基、安養寺墓地で346基、大安寺墓地で84基、大龍寺墓地で32基、長楽寺墓地で149基である。これら墓石は、塔形を呈する墓塔と江戸時代以降に定型化した方柱状の石材を造作した近世墓標と、子供の墓として特徴的な地蔵の像容を現したものに区分される。

また銀山地区における墓石の石材は、ほぼ全てが近在の温泉津に産出する凝灰岩である福光石を用いたものであり、僅かに他地方から搬入された花崗岩・安山岩が特定の墓石に限って使用されている。

これらの墓石は、鐫刻された紀年銘により造立年代が判明する資料が過半を占めるところであり、墓石様相の変遷を確認することができる。石見銀山地区における墓地は大きく古期と新期で様相を異にしている。

古期は、現在確認できるところでは、龍昌寺墓地で確認された元亀３（1572）年の紀年銘を有する組合せ宝篋印塔を最古とする16世紀末葉に遡って確認できる墓塔の造立による墓地の形成であり、組合せ宝篋印塔・組合せ五輪塔・一石宝篋印塔・一石五輪塔と、僧侶階層に限定して用いられた無縫塔の存在を確認できる。

これら５種類の墓塔のうち部材を組合せて造られた組合せ宝篋印塔と組合せ五輪塔は、方柱状の石材を彫成して造作された一石類よりも大きい。さらに確認数では組合せ宝篋印塔が91基、組合せ五輪塔が39基であり、一石宝篋印塔

の197基、一石五輪塔の127基に比較して造立数が少ない。

確認数では古期に主体をなしたのは一石宝篋印塔と一石五輪塔であり、このうちでも一石宝篋印塔は一石五輪塔の1.5倍が造立されている。大型の組合せ墓塔は、限定された上位階層の墓石として造立されたものと思われる。

また古期墓地の景観を構成する重要な要因として留意すべき点は、散在する部材から想定される墓塔と同じ石材を用いて構成された石殿の存在である。

現在石見銀山地区において全容を確認できる石殿は、浄土宗・勝源寺境内に所在する２代奉行・竹村丹後守の墓塔を納めた大型の石殿のみである。規模は間口130cm、奥行き110cm、高さ176cmの、切妻平入り形式の屋根構造である。

４本の石材を組合わせて基礎として、この四隅に４寸角の柱材を立ち上げ、梁材を横架した上に桁材を渡し、梁材の中央に立てた束柱の上に棟材を載せ板材で天井部を構成している。四隅に立ち上げた柱の間に左右・奥２枚ずつの壁板を嵌め込み、正面は柱に接して幅18cmの壁材を左右に嵌め、扉は木製であったようである。

石殿内部には底石を配し、この上に３基の墓塔を安置している。中央が寛永12（1635）年の紀年銘を有する竹村丹後守の総高125cmの組合せ宝篋印塔であり、この両側に２基の無縫塔を配している。

散在する部材から判断する限り、古期の墓地中には柱材を用いた大型の石殿は存在しなかったようである。組合わせ用の溝を彫り込んだ底石・直接天井板を支える壁板・凹状の刳り込みを有する棟材から復元されるところは、間口40～100cm程度の規模であり、高さは最大で130cmほどであったものと想定される。

古期墓地中に造立された石殿中に安置された墓塔を確認することはできなかったものの、小型の一石宝篋印塔ないしは一石五輪塔には、長方形平面で片端に抉った水受けを配する台石が伴う点を勘案すると、組合せ宝篋印塔を主としたものと推測できる。墓塔の造立に想定される供養対象者の階層の違いは、墓塔の規模の差異のみならず付属施設においても顕著な違いが確認できる。

我が国における中世末期に遡及する墓塔の造立は、近畿地方を中心として一石五輪塔が盛行しており、その影響は広く西は中国地方から東は関東地方までの本州各地に及んでいる。江戸時代になって近世墓標が定型化するまでに、主体を占めて造立された地域も多い。

石見銀山地区における一石五輪塔も、この様相の一貫として現出したものと理解されるところであるが、古期に主体をなして造立された一石宝篋印塔は関東地方南部に若干の所在が認められるとはいえ極めて特徴的な存在である。

現在までのところ、中世末期に遡って一石宝篋印塔が主体をなして造立された地域は、石見銀山地区以外には知られていない。

現在確認されている各種墓塔の造立最古の年代は、いずれも龍昌寺墓地で確認された組合せ宝篋印塔の元亀３（1572）年、一石五輪塔の天正５（1577）年、一石宝篋印塔は天正６（1578）年であり、宝篋印塔は組合せ式として石見銀山地区に導入されている。

また無縫塔は大龍寺開山塔の天正10（1582）年であるが、組合せ五輪塔は大きく遅れて妙正寺の正徳２（1712）年を確認最古年代としている。宝篋印塔は一石彫成と組合せ式の違いがあるものの各部の様相は共通しており、普遍化していた一石五輪塔の影響下に一石宝篋印塔が創出されたものと推測される。

これら墓塔を造立して形成された様相は、ほぼ17世紀代いっぱい維持されており、各墓地に共通している。

すなわち石見銀山地区においては、各種の墓塔の存在を基準として墓地形成の相対的な時期把握をすることが可能であり、この点が寺院付属墓地の悉皆調査の最大の成果と認識される点である。

新期の墓地は、各種の墓塔ではなく方柱状の石材を造作した墓標を主体として造立されている。合わせて古期以来の無縫塔が僧侶階層、組合せ五輪塔が限定された上位階層に採用されている。さらに像容をもってする地蔵は、とくに

子供の墓石として各宗寺院墓地内に確認されるところであった。

基本的に各地に普遍化する段階における近世墓標は、幅に対して厚さの薄い板状から、厚さが幅に近くなる方柱状への変遷が確認されるところであり、横断面形を基本として前者を**方形類**、後者を**方柱類**として区分できる。

従って厚さのない方形類は、そのままでは自立することが困難であり、墓標本体の下端に枘を造作して台石に設けた枘穴に挿入して安定を図っている。方形類・方柱類ともにそれぞれが頂部の造作の違いによる細別されるところであり、方形類では本体頂部に屋根を一体として造作した位牌形墓標、別石の笠部と組合わさる笠付方形墓標、頂部を円く仕上た円頂方形墓標、平に仕上た平頂方形墓標、中央を尖らせた尖頂方形墓標が確認されている。

方柱類では、別石の笠部と組合わさる笠付方柱墓標、頂部を円く仕上た円頂方柱墓標、平に仕上た平頂方柱墓標、中央を尖らせた尖頂方柱墓標、頂部中央を本体より一回り小さくして上部を低く突出させた突頂方柱墓標が確認されている。また本体が六角柱状を呈する墓標も存在しており、この種類には別石の笠部を伴う笠付六角柱墓標、頂部を円く仕上た円頂六角柱墓標が認められる。

さらには特殊な型式としては、笠付方柱墓標の本体前面を大きく刳り込んだ笠付刳り込み墓標も存在しており、山陰海岸部に顕著に認められる扁平な自然石を用いた墓標も数基確認された。また台石とともに一石彫成された特殊型墓標としたものは、尖頂方柱の小型の墓標表面に「＋」の表現が認められ、隠れキリシタン関連の遺物と想定されるところである。

これら近世墓標の型式別の確認数は、位牌形墓標～24基、笠付方形墓標～17基、円頂方形墓標～398基、平頂方形墓標～４基、尖頂方形墓標～４基、笠付方柱墓標～６基、円頂方柱墓標～503基、平頂方柱墓標～６基、尖頂方柱墓標～７基、突頂方柱墓標～５基、笠付六角柱墓標～８基、円頂六角柱墓標～41基、笠付刳込み墓標～２基、自然石墓標～４基、特殊型墓標～１基である。

すなわち石見銀山地区の各宗派墓地においては、確認できた近世墓標総数1,030基のうち円頂方形墓標が39％、円頂方柱墓標が49％を占めており、この両型式墓標で実に全体の88％が占められており、最も普遍化した墓標型式であったことが確認される。

其の他の13型式の墓標は限定された使用を想定することができるところであり、使用墓標の種類は日蓮宗・妙正寺墓地が13型式に及んでおり、曹洞宗・龍昌寺墓地では９型式、浄土真宗・安養寺墓地では５型式、浄土宗・大安寺墓地では４型式、真言宗・長楽寺墓地では４型式が確認できた。

特に日蓮宗・妙正寺墓地においては他地域にあまり類例の知られない円頂六角柱墓標34基が造立されているが、規模において他に優越しており確認された戒名などを勘案すると、笠付六角柱墓標・笠付方柱墓標・笠付方形墓標・組合せ五輪塔などとともに、限定された上位階層を対象として採用されたものであったと考えられるところである。

これらの少数の墓標型式は、特定の家により造営された墓地区画内に同型式の墓標が集中する傾向が窺われるところであり、戒名と同じく個人ではなく家の格式に従って採用されたものと考えられる。これらの少数の墓標型式は笠付六角柱墓標を除いて曹洞宗・龍昌寺墓地でも確認されており、一般的ではないこの種の墓標は妙正寺墓地と同様に限定された上位の階層を想定させるところである。

確認できた型式別墓標の造立年代は、**位牌形墓標**では６基が確認できた龍昌寺墓地の元禄16（1703）年を最古として、16基が確認できた妙正寺墓地の明和６（1769）年が最新であり、造立期間は66年間である。

妙正寺墓地・龍昌寺墓地・大安寺墓地で総計41基確認できた**円頂六角柱墓標**は、34基が確認された妙正寺墓地の1754（宝暦４）年から1830（天保元）年までの76年間の造立期間である。類似する**笠付六角柱墓標**は妙正寺墓地で８基確認されたのみであり、円頂六角柱墓標造立期間内

の1776（安永５）年から1815（文化12）年までの39年間の造立期間を確認できる。

笠付墓標としての**笠付方柱墓標**は、妙正寺墓地と龍昌寺墓地で３基づつの合計６基が確認されており、1662（寛文２）年から1799（寛政11）年までの137年間の造立期間を確認できるものの、断続的である。この墓標型式を補完する状況で造立されているのが、妙正寺墓地で12基・龍昌寺墓地で５基の合計17基が確認された**笠付方形墓標**である。1684（貞享元）年から1814（文化11）年までの130年間造立されている。また妙正寺墓地で２基のみが確認された**笠付刳込み墓標**は、墓標表面剥落のために造立年代を確認できなかったが、笠付方形・方柱墓標の造立期間のうちに想定できる。

妙正寺墓地で４基、安養寺墓地で２基確認できた**平頂方柱墓標**は、妙正寺墓地例が江戸時代、安養寺墓地例は戦後の造立例であり相互に型式的関連は見出し難い。

妙正寺墓地で２基・龍昌寺墓地で２基確認できた**尖頂方形墓標**は、1721（享保６）年から1911（明治44）年の造立期間であり、類似する**尖頂方柱墓標**は妙正寺墓地で１基・龍昌寺墓地で４基・大安寺墓地で１基・長楽墓地で１基確認されている。1773（安永２）年から1905（明治38）年の長期にわたり断続的に造立されており、ともに僅少な造立数である。

妙正寺墓地で１基、龍昌寺墓地で２基、安養寺墓地で１基の合計４基確認された**自然石墓標**は、幕末の1860（万延元）年から1897（明治30）年の37年間に造立されている。石見銀山地区の伝統が払拭された段階での別型式墓標の導入と理解できる。

子供の墓石として多用された**地蔵**は、妙正寺墓地で23基・龍昌寺墓地で58基・安養寺墓地で17基・大安寺墓地で14基・長楽寺墓地で７基の合計119基確認できた。これらは２基の明治以降例を除くと、1713（正徳３）年から1810（文化７）年までの97年間にわたり造立されている。その後の江戸時代の19世紀代においては、地蔵の像容ではなく地蔵の梵字種子「カ」を墓標表面に鐫刻して継続している。

円頂方形墓標は占有率２位の優勢墓標であり、妙正寺墓地の宝永４（1707）年を最古として明治以降に昭和まで造立され続けた墓標である。造立当初では本体下端に枘を造作しているが、次期には本体の厚さをやや増加させ下半部を上部より厚く造作することにより安定を図り、最終的には安定・自立できる厚さに帰結している。

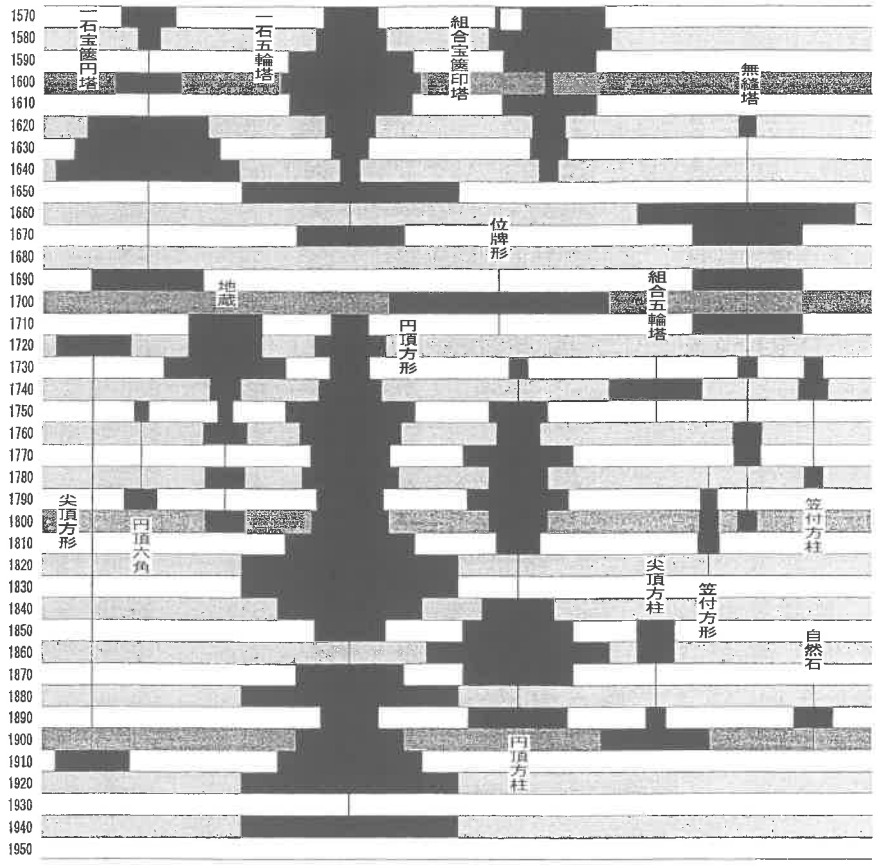
円頂方柱墓標は石見銀山地区墓標の首座を占める墓標型式であり、妙正寺墓地の貞享５（1688）年を最古としている。しかしながらこの資料を含め妙正寺墓地で３基確認された17世紀末葉に遡る資料はいずれも浄土真宗墓地からの搬入墓標と判断されるところであり、日蓮宗墓標としての採用は享保４（1719）年を最古としている。曹洞宗・龍昌寺墓地では享保15（1730）年を最古としており、現状では他の墓標型式と異なり他宗派に先んじて浄土真宗墓標として採用されたものと判断される。

この型式の墓標の変遷は、254基が確認された浄土真宗・安養寺墓地所在資料を対象として確認したところである。墓標本体は１辺20cmほどの方柱状で高さは18世紀初頭に30cmほどであったものが、昭和に入ると50cmを越える大きさとなっている。頂部を円く仕上げており、仕上方法では両側から円くする墓標と四方から円くする墓標の比率は11：89と、四方から円く仕上る資料が圧倒している。

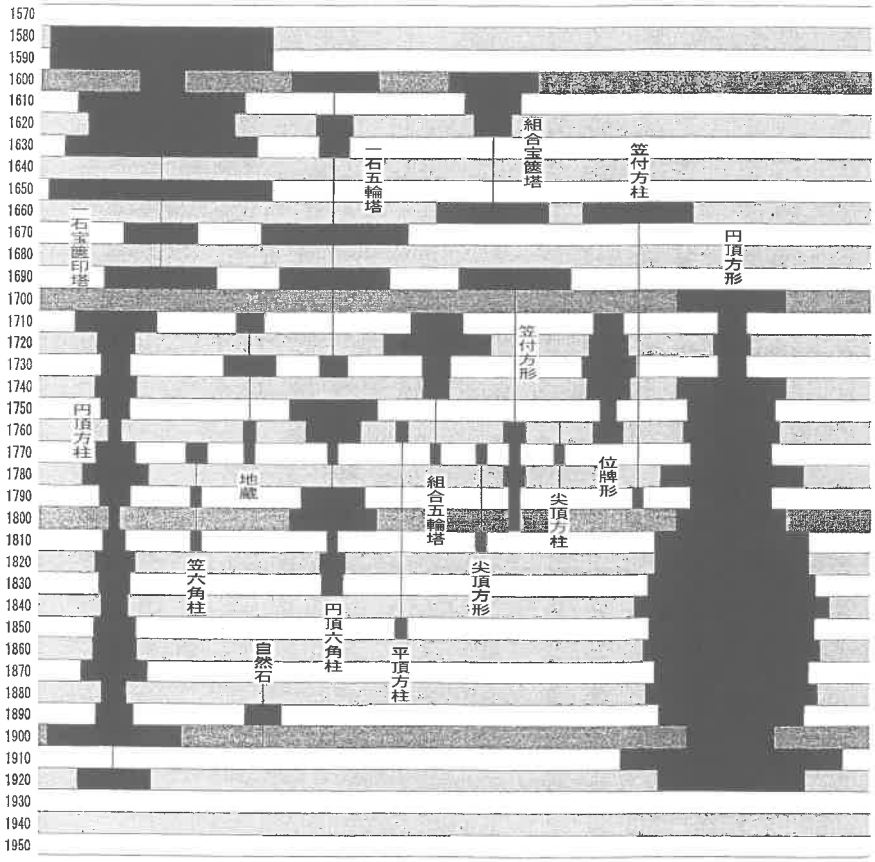
この型式の墓標では、正面を一段低く輪郭を刳り込み下端に蓮座を表さない資料で本体下端に枘を有する資料→→輪郭刳り込みあり・蓮座なし→→輪郭刳り込みあり・蓮座あり→→輪郭刳り込みなし・蓮座あり、という変遷を確認することができる。

円頂方柱墓標は、その出現段階においても高さ30cm、幅・厚さともに20cmほどの規模を有しており十分に墓標本体が倒立することなく自立することが可能であるにもかかわらず本体下端に枘を有する点は、時期的に併行する位牌形墓標・円頂方形墓標下端に枘を有する様相に合致したものとして理解できる。

日本各地における近世墓標の型式変遷は、17



龍昌寺墓地・墓石変遷表



妙正寺墓地・墓石変遷表

世紀半葉に定型化した墓標の幅に対して厚さが劣る方形類に遅れて墓標本体の幅と厚さの等しい方柱類が出現し、頂部の特徴的な突頂方柱墓標は明治以降現在に至る系譜を有している。この変遷概要に比較しても円頂方形類と円頂方柱類が併行して明治に至る石見銀山地区の様相は特異である。

銀山地区で悉皆調査した6ヵ所の寺院墓地の墓標の総計では、円頂方柱墓標が首座を占め、これに次ぐ円頂方形墓標の2型式の墓標が他の12種類に及ぶ墓標を従属させて18世紀初頭以降の新期墓地を形成している。

しかしながら宗派別に見ると同一の変遷を辿ってはいない。日蓮宗・妙正寺墓地で確認された526基の墓標では、1710年代から1730年代までは優位の2型式墓標に位牌形墓標と組合せ五輪塔が混在して造立されていたものが、1740年代以降は円頂方形墓標が圧倒的に主体をなして展開している。

円頂方柱墓標は総体としては第2位を占めているものの、1750・60年代と1790・1800年代では円頂六角柱墓標に第2位を譲っている。円頂方柱墓標が第2位として安定的に造立されるようなるのは19世紀以降と確認される。

曹洞宗・龍昌寺墓地で確認された432基の墓標では、18世紀以降に円頂方形墓標が圧倒的に主体をなして展開しており、1820・30年代に確認資料を欠くものの円頂方柱墓標が常に第2位を占めて展開している。その他の型式の墓標は安定的には造立されてはいない。

浄土真宗・安養寺墓地では、墓地形成が本格化した1720年代以降1950年代に至るまでに円頂方柱墓標が圧倒的に主体を占め、これを補完する状況で円頂方形墓標が造立されている。第2位の円頂方形墓標の占める割合は5～43%の差異を示しており、総体としては1810～60年代に占有率が上昇している点を確認できる。

4

古期に各種の墓塔類、新期に円頂方柱墓標と円頂方形墓標を主体として展開した石見銀山地区の墓標造立状況は、16世紀末葉以降均一に変遷したものではない。10年毎の造立数を集計して変遷過程を確認してみると、各種墓塔よりなる古期の墓地形成は1570（元亀・天正）年代に一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合せ宝篋印塔それぞれ1基づつの造立で開始され、1620（元和・寛永）年代の31基を最大とし以後1640（寛永・正保・慶安）年代の2基にまで急落し、1670（寛文・延宝）年代には10基まで回復し、次期の1680（延宝・天和・貞享・元禄）年代には再び5基と造立数を減らしている。

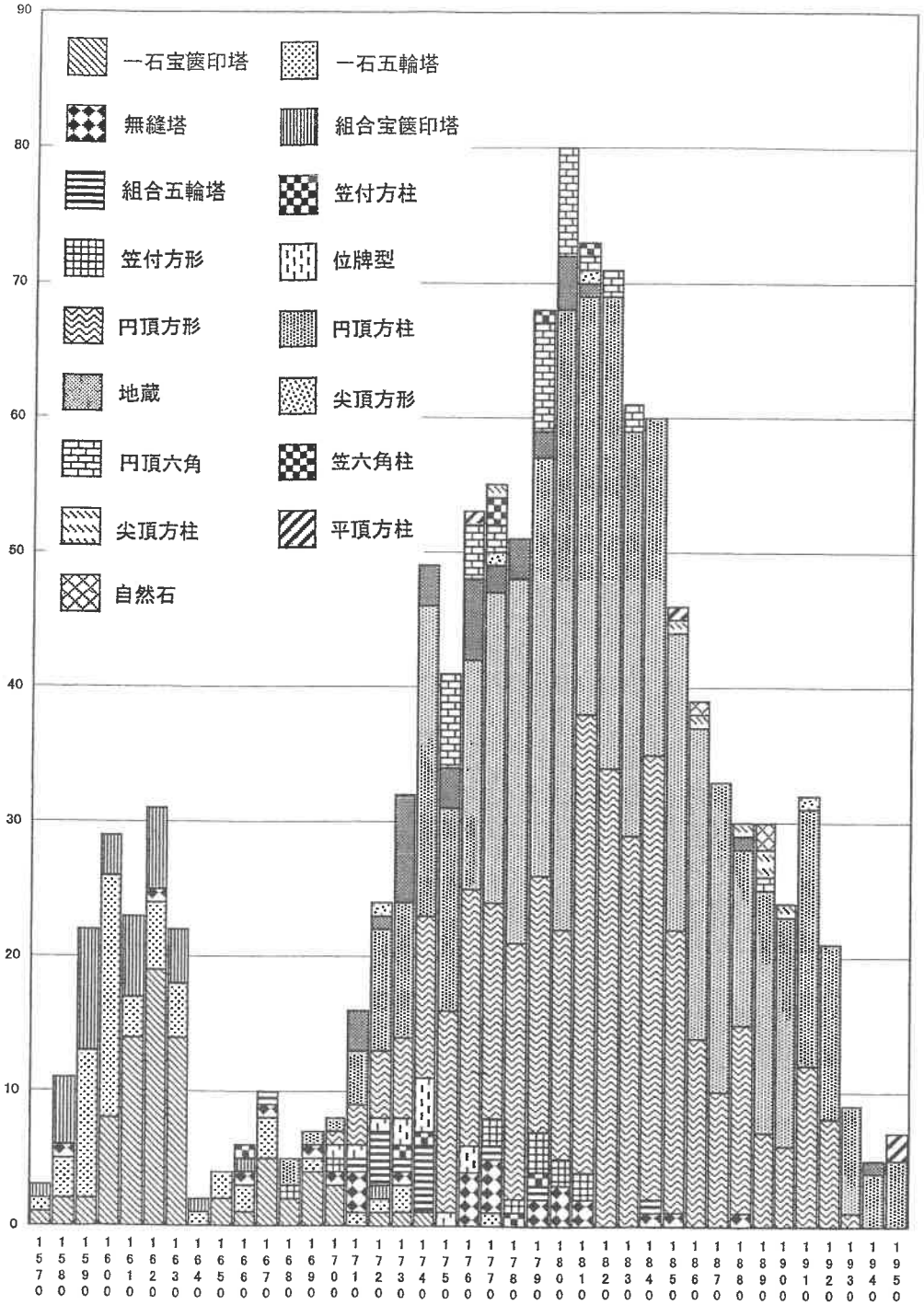
新期墓地形成の主体となる近世墓標の造立は、1662（寛文2）年の笠付方柱墓標により開始され、1688（貞享5）年の円頂方柱墓標がこれに次ぎ、位牌形墓標は1703（元禄16）年、円頂方形墓標は1707（宝永4）年に出現している。墓塔と墓標の造立数の比率は、1680年代に墓塔2基に対して墓標3基と近世墓標が上回るものの、次期の1690年代では墓塔6基に対して墓標は1基と逆転し、1700年代には墓塔4基に対して墓標4基と拮抗しており、以降は近世墓標主体に転化している。

古期の墓地を形成した墓塔の終焉状況は、型式別に異なっている。組合せ宝篋印塔の終焉が最も早く1720年代であり、これに次いで一石宝篋印塔が1740年代、一石五輪塔では1770年代に造立が終了している。

無縫塔は各宗僧侶階層に独占的に用いられた特殊な墓塔であるが、歴代住持墓としての多くは寺院廃絶・移転に伴い地区外に転出しており、残存した資料からの判断であるが、大龍寺開山塔の天正10（1582）年以降、1880年代までの造立を確認できる。

組合せ五輪塔は龍昌寺墓地で明瞭に確認できたところでは、確実に古期墓塔の一端を担う存在ではあるものの、確認できた紀年銘資料からは1670年代から1840年代までの造立であり、完全に近世墓標と併行する点を明示している。

1710年代以降、近世墓標を主体とする墓石の造立数は増加の一途を辿り、1800年代では造立数は80基と最高数を示している。以後顕著な凋落傾向を示して、1940年代には5基にまで落ち



石見銀山地区・墓石変遷表

込む。この凋落の過程で1910年代には32基と一時的に増加しているものの、継続してはいない。

この墓石造立数の変遷は、現在までに悉皆調査した範囲に限定されるものとはいえ、石見銀山地区で死亡・供養された人数を直接的に明示しており、墓地造営の基盤となる地区の人口動態を間接的に物語るところと理解される。

墓石造立数の盛行期は調査資料の総計では1800年代であるが、現状で確認できた資料によると個別墓地ごとに異なっている。古期に盛行期が認められるのは龍昌寺墓地の1620年代のみであるが、これは古期と新期の墓地が立地により明確に区別され、さらに近世墓標の多くが損壊していたことに起因するところである。

安養寺墓地・長楽寺墓地では盛行期は1800年代に認められ、妙正寺では1810年代となる。こ

れらの集計として総体としても1800年代に最高造立数が確認されるところである。確認数が僅少であった大安寺墓地では1920年代に最も多くの墓石の造立を確認できるものの、これも近世墓標の多くが損壊していたことによる。

石見銀山地区の墓石の殆どは、近隣の温泉津に産出する凝灰岩の福光石を用いている。花崗岩・安山岩に比較して軟質であり加工し易い特徴を有しているものの、反面耐久性に欠けている。さらに銀山地区の近世墓標は台石のみならず墓標本体内部を大きく抉り込む特徴を有している。この点も他地域にはあまり認められない特徴であるが、専ら石材産出・加工地である温泉津からの搬入の便を勘案した造作と考えられる。しかしながらこの結果として、損壊の度合いが大きいものとなっている。

5

石見銀山地区における寺院付属墓地の墓石悉皆調査においては、階層別墓石の実態把握も検討課題となった。6ヵ所の各宗派寺院付属墓地においては、江戸時代の最高位を占める奉行・代官墓、支配者階層としての地役人墓、多数を占める銀山関係者・商家などの庶民階層墓、無縫塔に明示される僧侶墓などを調査してきた。

さらに異なる階層として銀山・城上神社社家であるH家とI両家墓地の調査を、平成15年度に実施した大森地区墓地分布調査時に調査したので合わせて報告して階層間の墓石様相を明確としたい。

H家墓地は、代官所北側の南に派生した尾根の先端を占める城上神社の、北側に位置する谷の東側斜面に占地している。斜面下方に3段にわたり総数28基の所在を確認できるものの、墓標の全容と紀年銘を確認できた墓標は25基に留まる。

確認できた墓標型式は、円頂方形墓標15基、円頂方柱墓標8基、円頂六角柱墓標2基、尖頂方柱墓標1基である。

この墓標型式は、所在したうちの初代に尖頂方柱墓標と円頂方柱墓標が採用されて以降の江

番号	型式	幅・高さ	銘文	西暦
1	円頂六角柱	22・44cm	(右) 文政二己卯十月十九日 ○○○○○○妻○○ (正) 信□□□秋信女 木□□□法尼 (左) 天保五年甲午二月十一日 ○○□□妻○○	1834
2	円頂方形	22・52cm	(右) 文政三年辰七月二十一日 (正) □□□□ (左) ○○六女 ○○ 九歳	1820
3	円頂方形	22・54cm	(右) 文化二乙丑年七月二十一日 (正) □□□□ (左) ○○氏娘 ○○	1805
4	円頂方形	21・50cm	(右) ○○□門 (正) □□□□ (左) 明和九壬辰年十月十六日	1772
5	円頂方形	25・40cm	(右) □□□□ (正) □□□□ (左) 法名釈□□	
6	円頂方柱	21・33cm	(右) 寛延元辰天 (正) 妙寿□□ (左) 十月十日 俗名□□□□	1748
7	円頂方形	16・36cm	(右) 明治廿五年十月十日 (正) ○○□□命 (左) 行年四才	1892
8	尖頂方柱	21・55cm	(右) 宝暦九卯年九月廿五日 (正) □□□□ (左) 官名○○○○○○○ 六十五歳	1759
9	円頂方形	22・43cm	(右) □□□□ (正) □□妙□ (左) 俗名□□	
10	円頂方形	21・45cm	(右) 文政九丙戌年六月初二日 (正) 涼□□□信女 (左) ○○娘○○○	1826
11	円頂方形	22・53cm	(右) 文化二乙丑□□月十九日 (正) □□□□信女 (左) 俗名 ○○	1805
12	円頂六角柱	22・54cm	(右) 文政三年四月十有五日 (正) □□○□妻墳墓 (左) □□□□	1820
13	円頂方柱	25・59cm	(右) 大正十一年十月十日亡 行年四十三才 (正) ○○○○妻墳墓 ○○○○ 之墳 (左) 昭和二年二月十二日 妻 行年四十二才	1927
14	円頂方柱	22・49cm	(右) 明治十九丙戌歳八月二十日没 (正) ○○□□之墓 (左) ○○伊豫守○○妻 享年八拾三歳	1886
15	円頂方形	27・67cm	(右) 明治五壬申年九月十日没 七十二歳 (正) □□□□信士 (左) 辞世	1872
16	円頂方形	22・67cm	(右) 文政十三歳次庚寅五月十有四日 六十一歳 (正) ○○要人藤原○○□廟 (左) 辞世	1830
17	円頂方形	15・33cm	(右) 明治十五年六月廿四日 (正) ○ 命 (左) 行年 一才	1882
18	円頂方柱	16・34cm	(右) 明治四十二年七月七日 (正) ○○○○神霊 (左) ○○○○長女 行年一才	1909
19	円頂方柱	24・56cm	(右) 文化十四年九月廿二日 (正) □□□□ (左) ○○次男○○ 十二歳	1815
20	円頂方柱	27・55cm	(右) 昭和七年十一月廿七日 (正) ○○○○之墓 (左) 故○○○○妻 行年七十六才	1932
21	円頂方柱	22・53cm	(右) 大正六年九月廿九日 (正) ○○○之墓 (左) ○○四男 ○○○○○建立	1917
22	円頂方柱	25・55cm	(右) 明治三十二年二月十一日 (正) ○○○○命 (左) 行年四十七歳	1899
23	円頂方形	18・39cm	(右) 大正四年二月十五日 ○○子 年三才 (正) ○○○○／○○墓 (左) 大正十四年七月二十日 同人子 年五才	1925
24	円頂方形	23・59cm	(右) 享和三癸年五月晦日 (正) □□□□□女 (左) ○○氏娘 俗名○○ 行年十才	1803
25	円頂方形	23・55cm	(右) 寛政十戌三月二十五日 (正) □□□□ (左) ○○左京藤原○○妻年□十三	1798
26	円頂方形	21・50cm	(右) 安永二癸巳九月八日 (正) □□□□ (左) 俗名□□ 行年三十歳	1773

城上神社社家・H家墓地

戸時代には円頂方形墓標が主体的に用いられ、確認できた３代の配偶者に円頂六角柱墓標、明治時代以降に円頂方柱墓標が主体となっている。

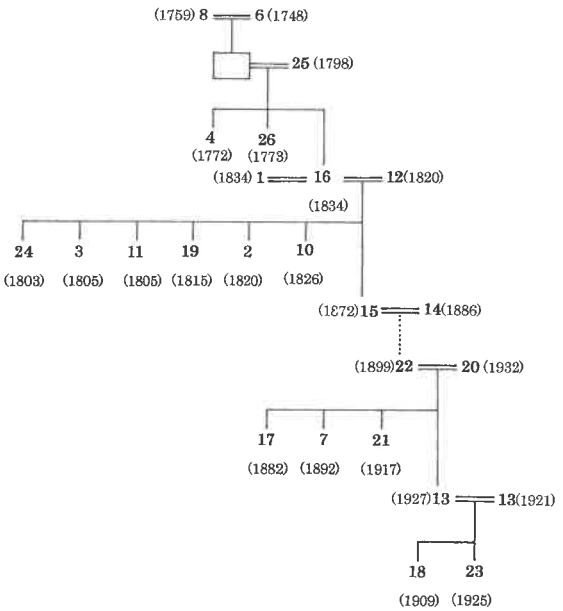
墓標本体の高さは、33～67cmであるが、想定される歴代当主墓がやや大きい点を確認できる以外に特に際立った差異を窺うことができない。確認できた銘文から俗名と造立年を勘案すると、寛延元（1748）年から昭和２（1927）年に至る179年間の７代に及ぶ家系を想定することができる。

墓標に何らかの銘文の確認できた26基のうち、社家独特の様相の確認できるのは数基に留まる。社家墓地と雖も大半の墓標には仏式の戒名が鐫刻されており、「○○命」・「○○命廟」・「○○神霊」などの神式の様相を確認できた墓標は５基のみである。

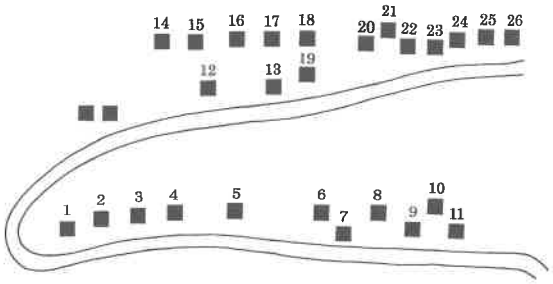
社家墓地の調査はそれほど行われているわけではないが、多くは総体として神式の様相が主体をなすようであり、Ｈ家墓地に確認できるところは銀山の特質として認識できよう。

別の社家であるＩ家の墓地は、Ｈ家墓地とは谷を挟んで対峙する尾根の先端部に立地している。Ｉ家墓地の調査は、墓地内の墓標配置と銘文を確認したに留まる。

尾根先端部を平坦に造成された墓地には総数



Ｈ家・想定系図



城上神社社家・Ｈ家墓地配置図

15基の墓標が「コ」の字形に配置されており、中央部には小型の石殿が配置されている。墓標表面の風化が激しく、窺知できるところは少ないものであった。

享保７（1722）年から明治24（1891）年の179年間に及ぶ墓標の造立を確認できるものの、この墓地に期間内のすべての物故者を埋葬したとするには数が少ない。

歴代当主と想定できる墓標は正面に位置する８と10の２基の夫婦併記の世代墓のみであり、多くは個人墓であり両側を中心とした多くは女性と子供の墓標である。

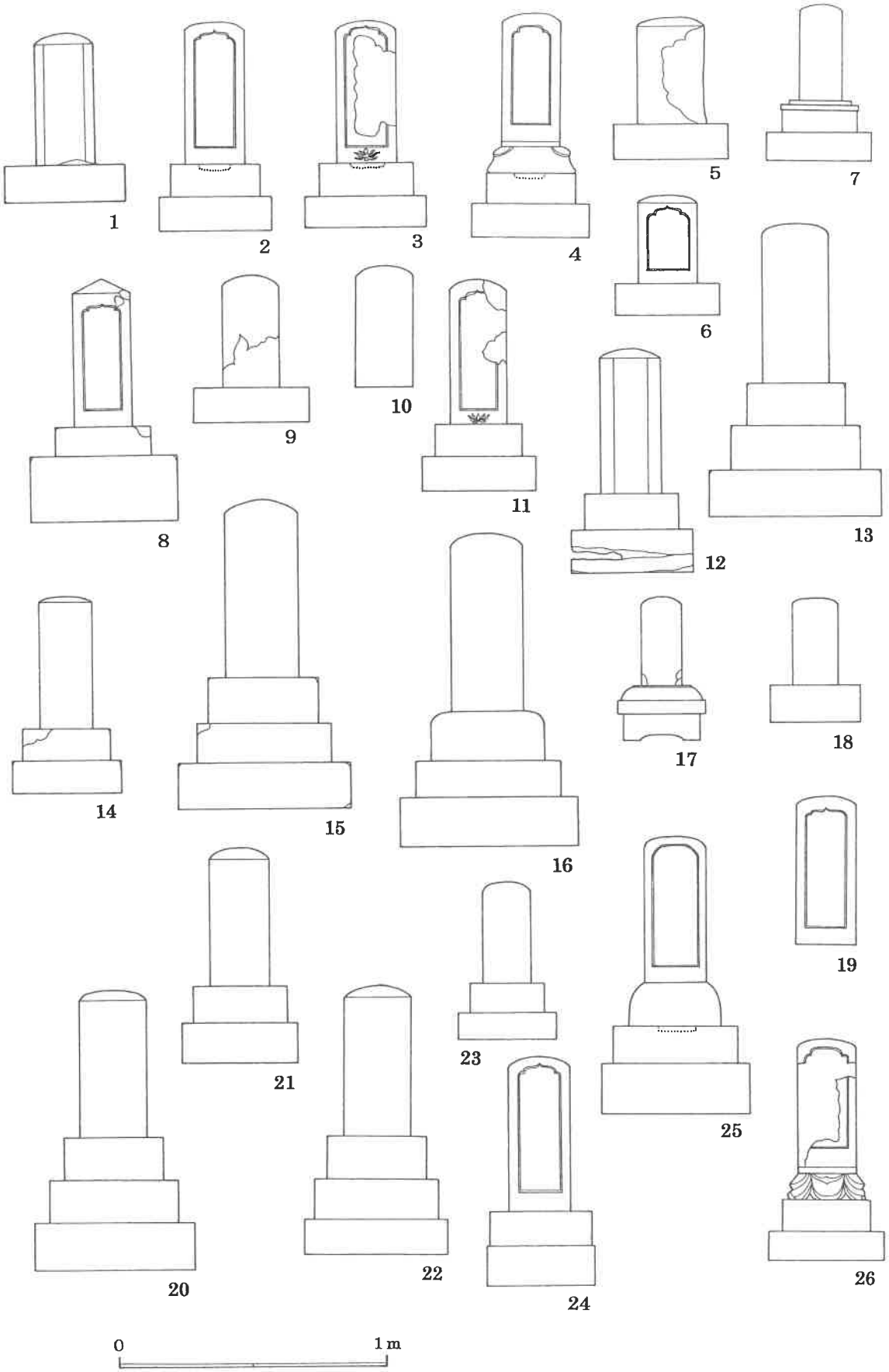
確認できた墓標型式は、円頂方形墓標３基、平頂方形墓標４基、尖頂方形墓標３基、尖頂方柱墓標３基、平頂方柱墓標２基と多様である。

墓標表面風化のために、神式の様相を確認できる墓標は「○○霊神」・「○○神霊」の２基のみである。墓標側面に鐫刻された銘文により武家から婚入した配偶者が目立つところであり、社家の特徴として認識できるところである。

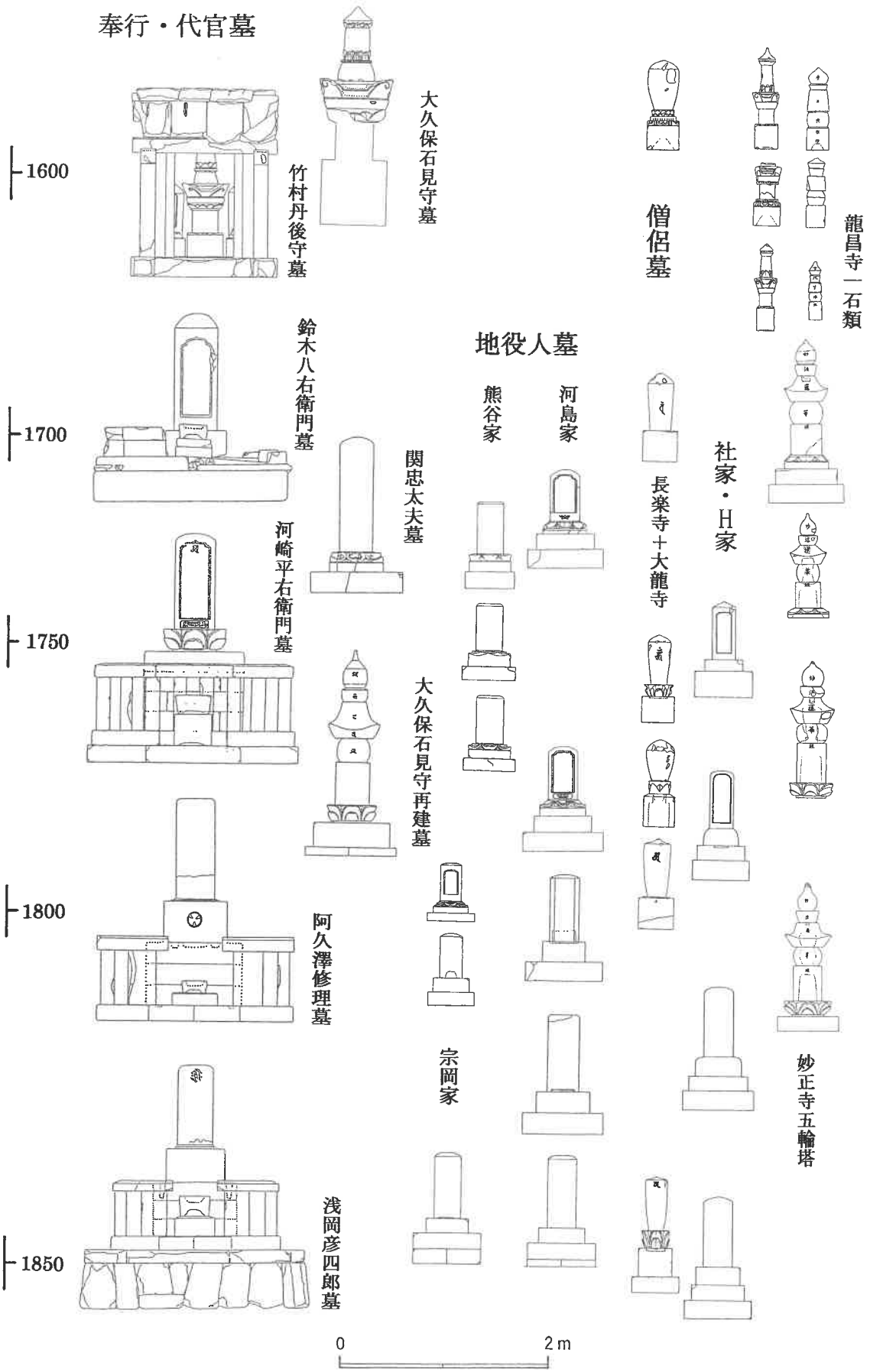
以上新たに調査の対象として調査した城上神社社家であるＨ家墓地とＩ家墓地における墓標の様相の概略を記したところであるが、表面に鐫刻された銘文に社家特有の様相を若干認められた以外には、各寺院墓地に多数造立された庶民墓と大きく異なる様相を示すものではない。

石見銀山地区における階層別の墓の様相を見ると、地区最高支配者層としての奉行・代官墓が他の階層の墓を圧倒しているほかは、墓標に特に顕著な差異を確認することはできない。

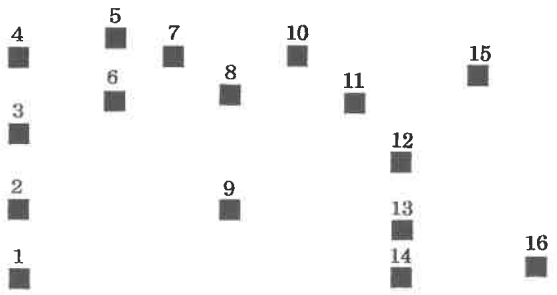
16世紀代における組合せ宝篋印塔は、奉行墓に限定されることなく各寺院墓地内に造立され



城上神社社家・H 家墓地・墓標



石見銀山地区・階層別墓石様相



城上神社社家・Ⅰ家墓地配置図

ている。近世墓標出現以前における地区特有の様相として総体を律する存在と認識される。もちろん規模における一石宝篋印塔・一石五輪塔との墓塔との違いは明確であり、限定された上位階層の墓塔としての採用と思われる。

地役人家の墓地調査では、17世紀前半以前の様相を明確にはできていない。調査を果たした熊谷家・河島家・宗岡家墓地の様相からは、個別墓標形態に著しい差異を表してはいないものの、占有する墓地面積に顕著な違いを有している。この点に起因して、個別墓標を数段に及ぶ高い台石上に安置する特徴を有している。また熊谷家歴代当主墓は在地産ではない花崗岩を石材として用いており、他との違いは明確である。

更に墓前に造立された燈籠は、近年の墓地の様相とは異なり一般墓地では殆ど認められないところであり、江戸時代においては支配者層としての武士階層にある程度限定された傾向を考慮することができる。

地役人家墓地の調査は、各家墓地の所在がすべて確認されてはいない。今後に望まれる継続調査の重要な点である。

僧侶の墓塔としての無縫塔は墓石総体として見ても、決して小規模なものではない。各寺院墓地内に確認される資料の多くは意識的に残されたものであり、歴代住持墓はより大きなものを想定できる。少なくとも墓石規模の点では武士階層に劣るものではない。比較対象として図示した妙正寺組合せ五輪塔は戒名に「院日」号を有する最上位階層であり、規模においては地役人墓を凌駕している。しかし一般的な庶民墓は、明確に小形である点を確認できる。また銀山を特徴づける鉱山関係者の墓石は、現状では明確には確認されていない。　（池上　悟）

番号	型式	幅・高さ	銘文	西暦
1	平頂方形	25・63cm	（右）天保三壬辰歳十一月七日 （正）○○□□□□ （左）銀山附同心 ○○○娘○○○　行年二十六歳	1832
2	円頂方形	19・40cm	（右）天保九戊歳 （正）○○□□□娘○○ （左）安□□□□□九日	1838
3	尖頂方柱	23・55cm	（右）明治廿一年八月廿日 （正）□□□□ （左）行年八十七歳	1888
4	平頂方形	23・60cm	（右）嘉永七寅年四月二十四日 （正）○○○○妻□□□ （左）三俣○○○○○○娘　年四十八歳	1854
5	尖頂方形	24・56cm	（右）○○織部娘○○○ 文化十一甲戌天□月九日 行年八十四才 （正）□□□□ （左）□□□□	1814
6	平頂方形	21・48cm	（右）天保六丙午二月十四日 （正）□□□□ （左）○○□□□○○七十四才	1835
7	平頂方形	18・43cm	（右）○○○○二女　行年五才六ケ月 （正）□□□□霊位 （左）明治□□年　第八時卒ス	
8	平頂方柱	25・56cm	（右）文政十二年六月十五日 行年□十二歳 （正）前称□□□□□ 同人妻□□□□ （左）文化八□年	1800
9	小型石殿	30・55cm		
10	平頂方柱	24・60cm	（右）天明九□□□□正月 廿八日三□□卒 （正）○○左馬介□□ 同人妻□□□□霊神 （左）文政九戊年九月二日六十六才卒 ○○○○建立	1826
11	円頂方形	20・48cm	（右）□□□□八□□ （正）□□□□ （左）□□□□	
12	尖頂方形	23・51cm	（右）○○嫡子十三才 （正）□□□□ （左）嘉永□□□	
13	尖頂方形	28・51cm	享保七年 （正）正浦意趣者妙常 □九月九日	1722
14	尖頂方柱	23・53cm	（右）明治廿四年四月九日没 行年七十二歳 （正）□□□□命神霊 （左）○○後妻 邑智郡三原村○○○○長女	1891
15	尖頂方形	26・46cm	享保八年 （正）正常寒童子 卯十一月八日	1723
16	円頂方形	26・46cm	安政二年 （正）正□□□□位 卯五月九日	1855

城上神社社家・Ⅰ家墓地

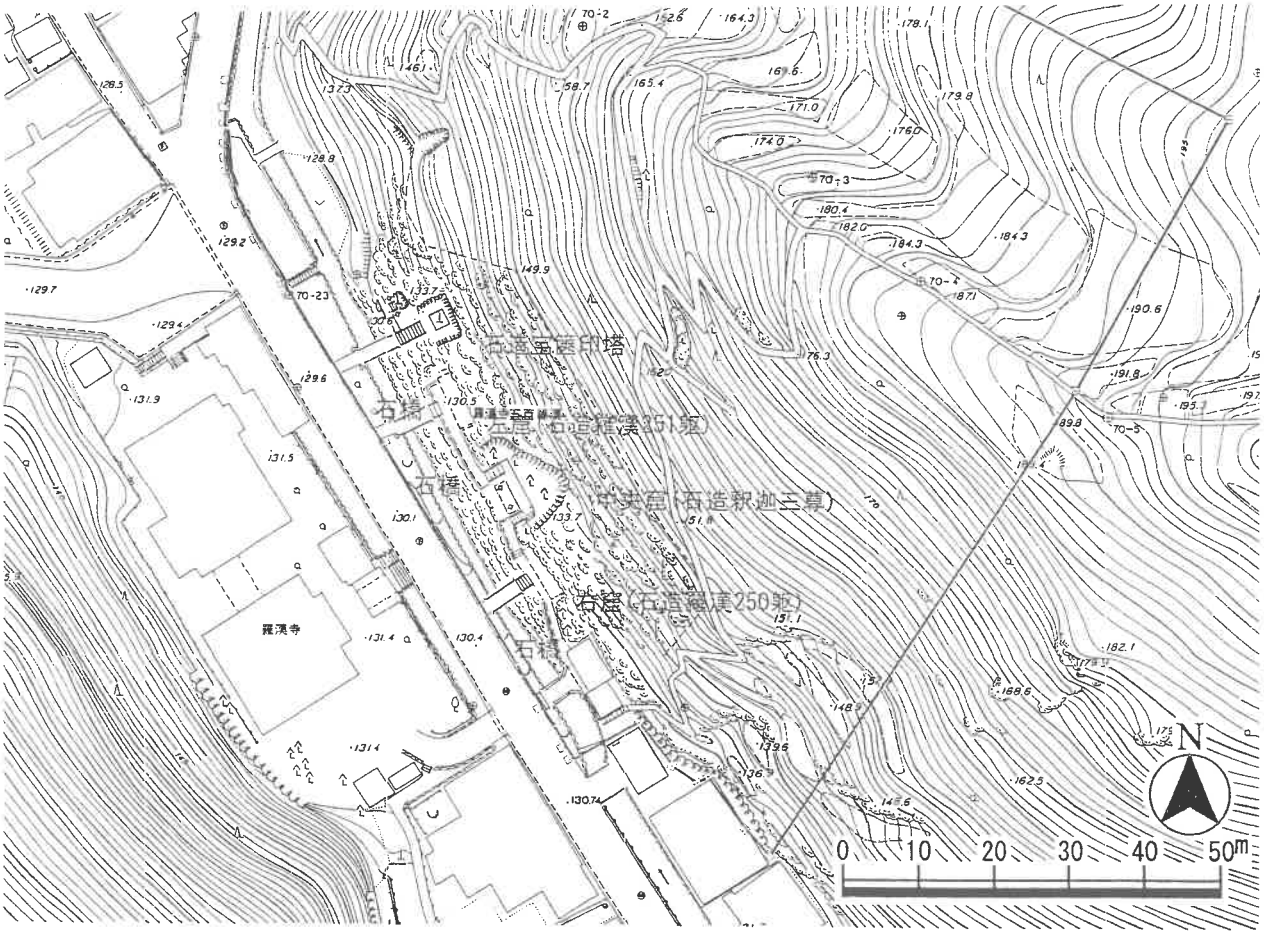
Ⅴ－2　羅漢寺五百羅漢坐像群

石見銀山を代表する文化財としては、高野山真言宗石室山（いしむろざん）羅漢寺前の石室に安置されている五百羅漢坐像群がある。３つの石室があり、中央室は明治５（1872）年の浜田地震において天井部分が落下している以外ほぼ原形を保っている。中央室にも羅漢坐像が安置されているが、通常「五百羅漢」といえば左右室に安置されている501躯をさす。これについては、昭和42（1967）年当時大田市教育委員会三谷晃嘱託員によりかなり詳細な調査検討がなされている[1]。以下、右室（寺から見て）・左室（同）・中央室と記述していく。

右室

冂字状に７段の階段がある。最下段は、香炉等と共に羅漢坐像が14躯安置され、２段目以上は透き間もなく羅漢坐像外が安置されている。羅漢坐像251躯・迦葉尊者（寺での呼称）立像１躯・阿難尊者（同）坐像１躯が安置されている。尊者２躯は良好に残っているが、羅漢坐像の一部には雨水等の影響を受けかなり損傷が著しいものもある。全高は、390mmから450mmが主体となるが、最高490mm・最低330mmである。全幅は全高より小ぶりである。全厚は、270mm前後が多いが、最厚320mm・最薄210mmである。

銘の有無は、無銘44躯・背にあるもの138躯・座裏にあるもの18躯・背と座裏にあるもの35躯・その外16躯である。ほとんどは陰刻銘であるが、墨書銘併用が５躯ある。墨書銘のみが２躯ある。



羅漢寺五百羅漢位置図

紀年銘最古は、寛永２（1627）年であるが、命日となっており正確とはいえないが、宝暦７（1757）年としたい。最新は、明和２（1765）年である。明和２年在銘像が最も多く、39躯が田安氏（後述）関係、１躯は地元、もう１躯は不明である。

石工名がわかる像は37躯、特定できない像は９躯ある。甚七17躯、平七７躯、庄７躯が多く、甚七郎・理兵衛・守・傳六・一八・八が各１躯である。墨書は、10躯である。迦葉尊者立像には、「石工福光／坪内平七朋定」と刻まれている。甚七銘の１躯には、「五百體内／三十五體」と刻まれている。特定できない像は、座裏に墨書のものである。

施主の出身地は、地元大森15躯・その他石見国64躯・江戸85躯・出雲国２躯・安芸国２躯・大坂御陣屋２躯・濃州２躯・武州３躯・不明35躯・無２躯である。迦葉尊者立像には、「百三體施主／田安御殿御内」と刻まれている。江戸の内訳は、田安氏38躯・寺院10躯・個人27躯・「無名」10躯である。田安氏のものは、干支生れの男・女子となっている。百三體には、銘文から田安氏に関係する個人のものも含まれている。

「石城」・「石室」五百内の別は、石城16躯・石室178躯・無７躯・不明（欠失）９躯である。石城は、石見国13躯・出雲国２躯・田安氏１躯である。田安氏のものは、銘が重複（別銘）しており、これだけ紀年銘がある。全体を検討する時、銘の重複があるものが多々あるが、特に田安氏関係の石室の中に明らかに紀年銘と合致していないものが１躯ある。石室は、絶対数から江戸のものが多い。

持物は、種々ある中最も多いのは、未開（２系統？、あるいは仏具か）・開蓮である。特殊なものは、楊枝とつる草花が各１例ある。持物ではないが、顔が黒い仏像（？）を腹前で枕にのせているもの１例、獅子と推定されるものがはべっているもの１例がある。両例は、田安氏のものである。

在銘状況は、基本的に施主毎であるが、「石室五百内」としながらも施主名等がないもの、銘と年号と合致しないもの、文字の書体の異なるもの、文字の大きさの異なるもの、前に刻んだものを全部または一部を削って新しいものを刻んだもの等がある。

左室

室の状況は、右室と同じである。最下段は、香炉等と共に羅漢坐像が15躯安置され、２段目以上は透き間もなく羅漢坐像外が安置されている。羅漢坐像250躯・木蓮尊者（寺での呼称）坐像１躯・羅漢坐像の頭と推定される１躯が安置されている。尊者は良好に残っているが、羅漢坐像の一部には雨水等の影響を受けかなり損傷が著しいものもある。大概右室と同じである。全高は、400mmから450mmが主体となるが、最高475mm・最低370mmである。全幅は全高より小ぶりである。全厚は、280mm前後を中心に薄・厚がある。最厚380mm・最薄215mmである。

銘の有無は、無銘13躯・背にあるもの140躯・座裏にあるもの50躯・背と座裏にあるもの38躯・その外７躯である。ほとんどは陰刻銘であるが、墨書銘併用が10躯ある。

紀年銘最古は、元禄15（1702）年であるが、命日となっており正確とはいえないが、延享５（1748）年としたい。最新は、天保15（1844）年であるが、墨による追書きとなっており、明和２（1765）年である。明和２年在銘が最も多く、40躯が田安氏関係、１躯は地元、もう１躯は不明である。

石工銘がわかる像は32躯、特定できない像は９躯ある。甚七14躯、理兵衛５躯、八４躯、庄３躯が多く、坪内吉次郎・三八が各１躯である。追書きから「四代目利兵衛」の名がみえる。墨書は、６躯である。木蓮尊者坐像には、「石工福光住／坪内平七／利□」と刻まれている。特定できない像は、座裏に墨書のもの７躯と風化損失２躯である。

施主の出身地は、地元大森15躯・銀山５躯（寺分含）・その他石見国54躯・江戸103躯・出雲国２躯・備後国１躯・豫州１躯・武州３躯・不

明２躯・無６躯である。銘文では、「十八體東都霊雲寺」・「三體施主東都茲眼寺」・「施主無名江戸本丸三十體為御祈祷」等がみえる。江戸の内訳は、田安氏31躯・寺院20躯・個人36躯・「無名」16躯である。田安氏のものは、右室同様干子生れの男・女子となっている。

「石城」・「石室」五百内の別は、石城26躯・石室192躯・無３躯・不明（欠失）10躯である。石城は、石見国16躯・武州（ママ）１躯・不明（無）９躯である。武州のものは、総合的に検討する時、かなり無理がある。いずれも紀年銘はない。

持物は、右室同様種々ある中最も多いのは、未開（２系統？、あるいは仏具か）・開蓮である。特殊なものは、牡丹が１例ある。香炉は、数例あるが、煙を表現したもの１例がある。持物ではないが、龍が膝前にあり腰に巻きついたもの１例、龍頭のみ膝前にあるもの１例、尻尾の長い猫のような動物がはべっているもの１例、腹前で仏頭が衣を被っているもの１例である。仏頭の螺髪は、８重（段）になり下から３重目中央が一つ空いている。龍頭は、田安氏のものである。仏頭は、田安氏の女中と推定されるものである。

在銘状況は、右室同様基本的に施主毎であるが、「石室五百内」としながら施主名等がないもの、文字の書体の異なるもの、文字の大きさの異なるもの、前に刻んだものを全部または一部を削って新しいものを刻んだもの等がある。「五百之内」とするものが２躯ある。

この室には、この寺でも特徴的なものがある。１つは、表情表現が写実的である。歯や舌・耳穴を表現したものが数躯、顔や手のしわが極めて写実的なもの２躯、顔のみ１躯等である。写実的な２躯は、銘もなく表現方法もよく似ている。２つめは、頭髪表現である。３躯あり、パーマネント様としている。他は、剃髪である。３つめは、賽銭の寛永通宝を３種類程度に分けられることである。

中央室

これについては、既に調査され公表されたものがあるので[2]、これを参考にしたい。

中央の１つの室には、釈迦三尊像が石祠に安置されている。右脇室は、３段の雛壇を鍵の手状に配し、入り口側にも細長い小室がある。左脇室は、奥に向かって３段の雛壇がＳの字状に広がり、入り口側にもこれと向きあうように壇状の空間がある。左右室には、弘法大師坐像41躯・羅漢坐像34躯・像種不明３躯・一石宝篋印塔１基が安置されている。一石宝篋印塔は、元和六□（1620）年在銘の銀山遺跡にみられるものと同じである。天井があったと推定される各室の前には、弘法大師坐像７躯・羅漢坐像７躯・像種不明１躯が安置されている。

釈迦三尊像は、極めて良好な残存状況で彩色も当初をうかがえるが、他の像と同様な調査が物理的に困難だったため銘文等を確認できなかった。左右室の尊像と様相が似ておりほぼ同時期と推定される。

弘法大師坐像は、全て在銘であるが、紀年銘はなかった。銘文から明治年間に製作されたとみられる。

羅漢坐像は、かなり損傷が著しい状態である。銘文等の確認は、なかり困難な状態である。

銘の有無は、無銘11躯・背にあるもの25躯・座裏にあるもの２躯・背と座裏にあるもの１躯・不明２躯である。全て陰刻である。

紀年銘は、２躯にあり、明和２（1765）年である。

石工名がわかるものは、１躯で甚七である。

施主の出身地は、地元銀山（銀山柵内）１躯・石見国３躯・出雲国１躯・江戸４躯・肥前長崎１躯・不明１躯である。江戸の内訳は、田安氏３躯・光雲院１躯である。田安氏のものは、干支生れの男・女子である。

「石城」・「石室」の五百内の別は、石城２躯・石室６躯・無１躯・不明（欠失）16躯である。石城は、地元銀山と出雲国知井宮が各１躯である。

持物は、風化欠失が著しく判別できるものが少ないが、特徴的なものは確認できなかった。

在銘状況は、風化欠失が著しく判別できるものが少ない。１施主による躯数と推定される「十

五」と確定できるものが１躯ある。

その他

寺境内にも３室の羅漢坐像と一連のものが数躯ある。薬師堂跡には、多種の石造物の中に３躯ある。頭は欠失しており残存状況は良くない。１躯には、「石室五百内」とかすかに確認できた。山門東脇に１躯２種類の台にのっている。本堂前西庭にも１躯ある。「石城五百内／大森講中／取次□□屋」と確認できた。

まとめ（その他を除く）

銘の有無は、無銘68躯・背にある像303躯・座裏にある像70躯・両方にある像74躯・その外23躯・不明２躯である。墨書銘のみの像２躯・両方ある像15躯がある。

紀年銘最古は、左室の延享５（1748）年、最新は明和２（1765）年である。最も多い紀年銘は、明和２（1765）年の83躯である。79躯が田安氏関係、２躯が地元、２躯が不明（特定できない）であるが、江戸からの像もほぼ同時期と推定され113躯ある。

石工名がわかる像は71躯、特定できない像は18躯である。甚七22躯、平七７躯、庄10躯、理兵衛６躯、八５躯、甚七郎・守・傳六・一八・坪内吉治郎が各１躯ある。特定できない銘は、□□兵衛・八□・理□□・平□・理□・□七と墨書で判読できないものである。甚七は、「五百體内／三十五體」と刻んでいる。

施主の出身地は、地元大森30躯・銀山５躯・その他石見国118躯・江戸192躯・出雲国４躯・安芸国１躯・備後国１躯・豫州（ママ）１躯・大坂御陣屋２躯・濃州（ママ）２躯・武州（ママ）６躯・不明（特定できない）37躯・無８躯である。銘文からは、「十八體東都霊雲寺」・「三體施主東都茲眼寺」・「施主無名江戸本丸三十體為御祈祷」・「百三體施主田安御殿御内」・「田安御殿御内施主とや女明和二酉（背）三體之内（座裏）」等が確認できる。しかし、銘と実際の数と符合しない。江戸の内訳は、田安氏72躯・寺院31躯・個人63躯・「無名」26躯である。

「石城」・「石室」五百内の別は、石城33躯・石室371躯・無11躯・不明（欠失）18躯である。石城は、石見国29躯・出雲国２躯・武州（ママ）１躯・田安氏１躯である。武州と田安氏は、在銘状況等から銘の重複と推定される。田安氏の像以外の石城の像は、紀年銘はない。

持物は、未開（２系統？、あるいは仏具か）・開蓮が最も多い。特異なものは、楊枝とつる草花・牡丹が各１例、香炉の煙を表現したもの１例等がある。持物ではないが、仏像・獅子（？）各１例で田安氏の像である。龍が巻きついた像・龍頭のみ膝前にある像・尻尾の長い猫のような像、腹前に仏頭のみある像が各１例ある。龍頭のみと仏頭の像は、田安氏関係の像である。

在銘状況は、施主毎であるが、「石室五百内」としながら施主名等がないもの、文字の書体の異なるもの、文字の大きさの異なるもの、前銘と後銘が一緒のもの、前銘の一部ないし全部を削り新しい銘を刻んだもの等がある。

左室には、造形的に特殊なものが10躯前後ある。

検討

造像縁起は、「五百羅漢寺記」等よれば、羅漢寺第一世浄印和尚が、大森の石城山観世音寺の住職の時、坪内平七に十六羅漢像を造らせ安置したのが発端のようである。具体的には、代官関忠大夫〔任期延享元（1744）年〕の４躯が、羅漢寺のはじまりのようである。宝暦３（1753）年頃までに６・70躯になり、宝暦12（1762）年に川崎平右衛門が代官となり力を入れた。江戸羅漢寺本山霊雲寺第五世光海和尚の協力を求め、そこから田安家（第九代将軍家重の弟宗武）をはじめ有縁の援助があり明和３（1776）年落慶大法会がなされた。

明和３年の羅漢寺棟札には、「尊像棟梁石工平七利忠」・「石室棟梁和田宗四郎、同石工新七、同石工太兵衛」を確認できる[3]。造像縁起も記され、江戸城120躯・田安氏100躯等もみえる。192躯確認できた。

縁起に関する事柄として、「石城」と「石室」のことがある。「石城」の方が古く、「石室」の方が新しいという事になる。「石城」には紀年銘がないため正確な事は不明であるが、施主出身地が石見国天領域で占められている事、観世音寺の山号という事から古い造像と考える。

石工名は、10名特定でき、6名が特定できず、判読できないものも10像前後あった。明和元(1764)年の「覚」[4]によれば、「多七・佐吉・吉兵衛・伝六・徳兵衛・湯治郎・伝八・庄兵衛・甚七」が、代金受領書を観世音寺に差し出している。伝六・甚七以外の石工名は、像からは確認できなかった。甚七は、「五百體内三十五體」と刻んでいるが、22躯しか確認できなかった。

施主の出身地は、石見国天領域153躯・江戸192躯が大きく占めている。特に江戸の場合、銘の数と符合しない。特異なものは、豫州(ママ)・濃州(ママ)がありどんな関係か不明である。

紀年銘は、延享5(1748)年銘を最古とし、明和2(1765)年銘が最新である。最も多いのは、明和2年在銘83躯である。

在銘状況は、「分業」を推測させるような痕跡がみられる。「石室五百内」としながら施主名等一切ないものがあったり、「石室五百内」を大きくないし中央に刻んで他の銘は小さく刻んだり、書体の異なるもの等がみられた。また、銘が混在していたり、前銘を削ったりしているものも多々あった。

造形をみる時、未開蓮に2系統以上の差があったり、特異な持物や持物以外に龍や動物と仏頭等がある。意図等は、不明である、表情が豊かなものとあまりにも写真的なものがある。

最後にそれぞれの安置場所である。中央室については、完全に当初の安置とは異なっている。弘法大師坐像は、明治期と考えられるからである。また、室の形態が左右室と異なる点も考える必要がある。左右室は、数度配置変えをしているのではなかろうか。同じ像様のものがかたまっていたり、頭が欠失したものがあったり、頭だけあるのにどれにも接合できない。寺境内にも同時期の像としてよいものが、数躯あることからも推測できる。

石材の産地(採取地)は、現在唯一福光石を採取加工しておられる堂面(屋号)の坪内敬夫氏のご教示がある。「細目」と呼ばれる石質を使用、温泉津福光国道9号へ邑智郡川本町からの県道が接続し、温泉津町小浜方面へ国道を約1km進んだ国道両脇である。しかし当時の痕跡はないという。

以上、概略の報告であるが、左右室について宮本の力量不足があり誤った一覧表になっていると思われるので予めお許しを願うものである。

(宮本徳昭)

注1　三谷晃「大森五百羅漢像の銘文について」「季刊文化財」8号　島根県文化財愛護協会　1969年
三谷晃「大森五百羅漢」『石見銀山叢話』山根俊久編島根県文化財愛護協会　1972年

2　鳥谷芳雄「大田市羅漢寺の中央脇窟の石造物」『季刊文化財』164号　島根県文化財愛護協会　2003年

3　鳥谷芳雄「羅漢寺五百羅漢の造立棟札」『石見銀山遺跡調査ノート3』島根県教育委員会外　2004年

4　『温泉津町史』中　近世編385頁　1995年

羅漢寺五百羅漢・中央窟内釈迦三尊像一覧

番号	像　種	法量(全高×全幅×全厚)mm	銘文	持ち物	備　考
1	釈迦如来像	650×530×290(前衣含) 蓮座300×530×530　磐座240×630×600	無？	無	螺髪8重下から3重目中央一つ空く・前衣蓮座付き
2	文殊菩薩	616×550(衣含)×270 獅子座340×560×310	無？	未開蓮(宝珠付)	
3	普賢菩薩	550×580(衣含)×260 象座390×600×370	無？	経巻(開く)	首一周不明物の痕

羅漢寺五百羅漢・左窟内石造物一覧表

番号	像　種	法量（全高×全幅×全厚）mm	銘　文	持ち物	備　考
1		440×380×280	背面：石室五百内／御施主江戸田安御殿御□（内）／未年御男子明和二夏 座裏：甚七作	無	
2		440×370×270	背面最上部：為 背面上部：百緑無縁／諸霊魂万霊／等願證／菩提 背面：東都霊雲寺／五世光海大和尚／石室五百内 座裏：□（石）□（工）□□（墨書）	無	
3		410×370×260	座裏：施主都賀畑田村栃木／伊藤興右衛門／石城五百内／為鷹息女阿曽女／菩提也	無	
4		450×485×280	座裏：石城五百内／大森講中／取次田村屋	無	
5		410×430×300	背面：石室五百内／東都霊雲寺／為性月近住	無	
6		350×530×260	背面：石室五百内／施主津茂／永田徳左衛門／為先祖菩提	無	
7		435×400×260	座裏：施主／石城五百内／喜多山猶之進	茶たく付茶碗	
8		405×410×300	座裏：五百内造此一體以擬／先考喜相重歓禅定／門追福者也延享戊辰／施主荒井清平衛	無	
9		405×420×240	座裏：石城五百内／施主／大住氏	数珠（長）	
10		430×445×275	背面：大森下市／石室五百内講中	経本	
11		430×400×250	背面：石室五百内／寄進東都霊雲寺／為謙明近住	数珠	
12		430×390×270	背面：御施主石室五百内／江戸田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏 座裏：甚七作	未開蓮？	
13		410×375×290	背面上部：〈傾心院・杏井院〉為菩提／御施主 背面下部：永井／織部／片□／長□ 座裏：石室五百内／大森町／羅漢構中	無	
14		460×400×270	背面：石室五百内施主大國村／明和二酉箱石六左衛門	無	右肩露出
15		400×420×300	背面：石室五百内／施主市山村湯淺道右衛門／皆合氏諸精霊	無	
16		470×415×380	背面：石室五百内／施主邑智郡／石原村／善四郎	数珠	
17		450×430×200	背面：石室五百内／凉雲院栄誉信女／元禄二巳九月六日／施主大國村山形八十郎／寛保二〈戊・三月九日〉／誠春院覚誉尼	未開蓮・葉計２本	
18		450×405×300	背面：石室五百内／施主大國村／専念寺		
19		415×450×290	座裏：薦暁夢童女之冥福／石城五百内／施主小原米屋宋兵衛	数珠	
20		415×420×260	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／未年御男子／明和二酉夏 座裏：墨書（不読）	払子	
21		420×395×325	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷施主無名	無	
22		445（頭欠失・後衿端まで）×385×300	背面：三體／施主〈東都・慈眼院〉／石室五百内 座裏：石工理兵□（衛）□／四代目利兵□（衛）／天保十五三月□（廿）□（墨書）	無	
23		425×390×255	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏	無	
24		420×385×315	背面：江戸　本丸／□□□	経本？	前刻字削字（持物も）
25		445×400×285	背面：田安御殿／御内施主とや女／明和二酉夏	香炉　煙表彫	
26		400×410×270	背面：武州多摩郡／府中領上給村／榎本武左衛門 座裏：石城五百之内	数珠	
27		400×445×325		無	
28		420×420×280	座裏：化他以造焉／五百内凡二十二人也延享〈戊・辰〉／願主大森町於琳女	無	
29		440×400×310	座裏：施主小原大田屋／七郎兵衛／石城五百内／角屋／庄十郎	無	
30		450×400×275	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏	無	
31		390×380×290	背面上部：江戸／御本丸 背面下部：石室五百内／施主かめ	額　梵字「ア」入り	
32		460×360×290	背面：石室五百内／施主／武□（栖）矢島藤八郎	竹内状	
33		425×450×370		無	龍頭右膝・体羅漢両足にからむ
34		430×410×300	背面：江戸御本丸／為御祈祷／施主無名／石室五百内	無	
35		420×420×250	背面：田安御殿／御内／施主／とや女／明和二酉 座裏：三體之内	うちわ様　軸は竹様　右手に持つ	
36		430×420×310	背面：石室五百内／究暁院一誉信士／正徳五未五月廿九日／施主大國山形八十郎／寛延四未八月廿七□（日）／松林院貞誉□（石）□（皮） 座裏：八	経箱？	

37		440×395×340	座裏：石城五百之内／施主／新井縫右衛門	無	猫？（尾長）膝前に座る
38		430×405×220	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主／む津	無	
39		465×405×355	背面：石室五百内／施主波積村／石田小兵衛	払子	
40		455×400×365	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主松嶋様	無	
41		310（頭欠失 後衿上端まで）×430×255	背面：石室五百内／施主久利村／森山利野右門 座裏：甚七作	花蓮（柄付台にのる）	
42		450×360×300	背面上部：田安／御殿／内 背面：石室五百内／施主光雲院／為慧学院／明和二酉夏	払子	
43		415×405×280	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿〈御・内〉／未年御男子／明和二酉夏	数珠	
44		405×355×250	背面右肩斜め：石室五百内 背面中央：宝暦十三未／二月廿三日／釈　安信士／施主石劔青原／三好清兵衛	無	
45		440×340×270	背面：石室[　　]江戸御[　　] 座裏：墨書（不読）	無	字体　大きさ　異なる
46		425×380×280	背面：石室五百内／為法類聖霊速脱／若因頓成楽東／東都霊雲寺	未開蓮	
47		460×370×310	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主三沢	無	右上がり
48		425×485×330	背面頭巾：十體ノ内世名 背面：川崎氏定孝／永鴫／関口惣七／小川伴七／市川安右門／西村多四郎	経巻	
49		460×380×215	背面：江戸／御本丸石室五百内／施主〈里き・さち〉	位牌？	「江戸」は墨色入り
50		440×430×270	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷〈施主・無□〉	無	
51		435×380×280	背面：石室五百内／施主畑田村源十郎／鈩内／五十七人組	宝珠　数珠	
52		420×380×275	背面：石室五百内／施主／江津沖田屋／五左衛門□	未開蓮	
53		430×360×305	背面：石室五百内／施主吾江村湊／宋七	数珠	
54		440×440×300	背面上部：御本丸 背面：石室五百内／施主無名 持物：江戸御本丸／三十體／為御祈祷	額（在銘）	
55		430×380×255	背面：石室五百□／施主銀山□□／釈〈妙蓮・妙□・教念・□□〉 座裏：石工理兵衛	無	右足裏見える
56		430×410×235	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏	宝珠	
57		405×380×250	持物：寂圓了照信士〈宝暦九卯・七月二日〉 座裏：石室五百内	位牌？	
58		450×370×270	背面：石室五百内／江戸御本丸／施主砂野 座裏：(墨書)竹内／□	無	
59		425×430×285	背面：田安御殿／御内施主とや女／明和二酉夏	無	佛頭衣から出る螺髪８重　下から３重目中央１つ空く
60		420×430×285	座裏：施主神原村／三體内品川平右衛門	経本？	
61		450×405×260		未開蓮	
62		440×435×270	背面：石室五百内／江戸御本丸／為御祈祷／施主無名	開蓮（花のみ両手で受ける）	頭髪「パーマネント」
63		490×425×385	座裏：施主吉浦／石室五百内／松林寺／為母菩提	右手　数珠 左手　経巻	
64		440×400×275	座裏：石室五百内／施主大森町／羅漢構中	無	
65		435×420×300	背面右肩：田安御殿／御内 背面中央：施主とや女／明和二酉夏	？右手にぎり穴	
66		430×420×300		？両手にぎり穴	
67		415×420×250		無	
68		450×430×375	背面：石室五百内／施主都茂村／藤井五郎蔵／為梅室清薫〈大・姉〉	？右手にぎり穴	
69		415×410×330	背面：石室五百内／為覺如近菩提 持物：十八體〈東都・霊雲寺〉	位牌？最上部穴	
70		410×410×250	背面：石室五百内／施主高津／儀雲浄天信士／安野平蔵 座裏：(墨書)石工平□	経巻	
71		375×430×350	座裏：大森中市／石城五百内／田村屋取次	無	
72		425×420×330	座裏：石城五百内／施主／本木辰右衛門	杖　自然木様(曲)	
73		410×430×270	座裏：来俊院殿順譽諦隋居士／俗名關忠太夫／施主／お里で	無	

74		445×450×340	背面上部：江戸／御本丸 背面下部：石室五百内／為御祈祷／施主無名	経本	
75		410×435×285	座裏：施主左摩村七人之／石室五百内講中	無	
76		430×470×270	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿□□（御内）／寅年御□（女）子／明和二酉夏 座裏：八	皿（やや深い）	
77		450×415×260	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏 座裏：八	払子（柄短い）	「石室～施主」顔料入り（朱・緑）
78		430×420×305	背面：石室五百内／香大姉／為光明院貞音信女／施主東都／伊勢屋／多郎兵衛 座裏：左	無	
79		375×390×260	座裏／石城五百内／施主銀山／水田久治郎／榮澄	無	
80		390×440×330		無	顔・左手　写実的表現
81		410×360×295	背面／石室五百内／施主川本村／吉永屋／傳之□（進）／誓光童女	無	
82		440×400×280	背面／□（百）室五百内／江戸施主□□／御本丸内	無	
83		450×370×250	背面／石室五百内／東都霊雲寺／施主居圓堂	無	銘　朱入り
84		420×390×290	背面／□（石）□（室）□（五）百内／江戸御本□（丸）／御祈□（祷）／施主□□	無	
85		430×350×290	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷〈施主・無□（名）〉	鉢	
86		430×390×260	座裏：〈施主・幾久屋〉／茂右衛門	右手　数珠 左手　経本	
87		450×430×270	座裏：歡山了喜居士／蓮池妙基信女／俗名邑智郡／内田村／石城五百之内／宝暦九〈巳・卯二月日〉／岡平右衛門	無	
88		435×370×260	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御男子／明和二酉夏	未開蓮	衣紋対称 銘肌色入り
89		405×430×280	座裏：石城五百内／大森講中〈取次・田村屋〉	払子（柄短い）	座裏朱垂れる
90		430×410×280	背面：瑩雪寿誓／石室五百内為／清雲道廓／豫劦宇摩郡津根邑／守屋又左□□（衛門）	水瓶（注口付）	
91		435×425×235	背面：石室□（五）□（百）□（内）／御施主／田安御殿〈御・内〉未年御男子／明和二酉夏	無	龍頭膝前左向き 「石室～施主」と以下別字体
92		450×380×275	背面：石室五□（百）□（内）／江戸御□（本）丸内／施主花川	無	
93		420×430×290	背面：石室五百□（内）／江戸御本丸□（内）／御祈祷／施主無□（名） 座裏：甚七作	左手薬壷 （蓋付）右手宝珠？	背面銘朱入り　座裏朱垂れる
94		390×370×265	座裏：施主和田祐左衛門／石室五百内／為一子也	無	
95		425×415×265	背面：石室五百内／施主新屋村／元右衛門／勝七／金次郎 座裏：庄	払子（柄短い）	
96		445×405×280	持物：駒足女十人組	経本？	
97		430×450×290	座裏：石室五百内	無	
98		440×400×280	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主さを	無	
99		450×440×270	背面上部左斜め：施主東都 背面：梅田御用屋敷／善成院	無	
100		430×420×330		数珠	
101		450×430×360	背面：石室五百内〈江戸・施主〉／御本丸内／松嶋様	無	
102		400×435×350		無	木株様を前に両手をのせる
103		420×410×310	背面上部左斜め：石室五百内 背面：川合村世話／講中／三界万霊菩提	無	
104		435×430×260	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏 座裏：庄	和とじ本 （閉・正方形）	
105		405×410×280	座裏：五百内／延享戊辰／施主／藤井常八喜文	数珠	
106		420×370×275	背面：石室五百内／施主中木屋村／弘中氏□（桜）教／為先祖代々菩提	宝珠	
107		440×400×245	背面：喜誉観柳／一誉暫休／心誉貞休 前衣：施主宅野村向西寺	数珠	銘線細い
108		400×480×320	背面：濱田村／石室五百内／大麻山尊勝寺	無	座裏顔料垂れ
109		445×450×270	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏	数珠	
110		435×425×300	座裏：三體内神原村	無	衣をかぶる
111		405×430×290	座裏：石城五百内／施主〈志學・中屋室〉	無	
112		410×405×290	背面：石室五百内／施主／江津沖田屋／五左衛門	無	
113		430×415×235	背面：石室五百内／施主／十王堂村嘉□	無	

114		390×425×270	座裏：五百内造此一體以擬／先妣安叟貞心大姉／追福者也延享戊辰／施主荒井清兵衛	無	盤座？を左に左肘を乗せる
115		410×380×280	座裏：石室五百内 持物：施主大森上市／女十八人組	額（在銘）	
116		470×395×300	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主□□	無	
117		420×415×280	背面：石室五百内／川合村世話□□／三界万霊菩提	和本（開）	
118		460×370×215	背面：石室五百内／為禪説丹英上座□／施主母〔　〕	牡丹（開　上・未開　下・葉付　2本）	
119		450×430×295	背面：石室五百内荻村講中	数珠	
120		395×410×275	座裏：石室五百内	無	
121		430×445×235	〈前銘〉背面下部：□本□／□□／大□村山□□□ 〈後銘〉背面：石室五百内／久喜原村／施主無□	鐘(ドラ)片面ひも房表現	前銘　朱入り
122		435×440×285	背面：石室／五百内／施主御本丸／浦尾	無？両手にぎり穴	
123		420×470×310	座裏：石城五百之内／施主新井縫右衛門／妻	開蓮（花のみ両手で受ける）	雲に乗る
124		470×400×260	背面：銀山／施主喜宝院／石室五百内	数珠	銘朱入り
125		445×390×230	背面：石室五百内／施主市山村湯淺／道右衛門／安清養流信士	無	
126		430×430×265	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏	無？両手にぎり穴（現未通）	
127		420×385×255	背面：石室五百内／施主／宅野村茂七	無	
128		430×380×255	背面：石室五百内／御施主江戸田安御殿〈御・内〉／未年御男子／明和二酉夏	無	
129		430×405×270	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／未年御男子／明和二酉夏	無	「地蔵」様やや左へ傾く
130		475×445×220	背面：石室五百内／御施主江戸田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏 座裏：甚七作	無	「地蔵」様
131		420×410×250	背面：石室五百内／御施主江戸／保枢意忍大姉／屋□□(字)□(衛)□(門)／為柏峰□月居士	未開蓮	「石室～江戸」朱入り
132		440×410×305	背面：石室五百内／江戸／御本丸為／御祈祷施主無名	無	
133		420×415×290	座裏：石室五百内	？(薄い)	
134		425×380×280	背面：石室五百内／施主江津沖田屋／五左衛門／妻　座裏：墨書（不読）	無	
135		430×420×305	背面：石室五百内／大森下市／念佛講中	無	左足「くつ」
136		405×450×325	座裏：為宗順菩提／石城五百内／施主〈都賀本郷・失谷屋権右衛門〉	無	左足「くつ」
137		475×415×250	持物：釈蓮露信士〈施主三久須村・太平〉石室五百内	塔婆	「〈施～内」小文字白色入り
138		460×405×305	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主〈卯□・角右□□〉	数珠	銘朱入り
139		430×440×280	背面：薦妙音童女之冥福〈石城五百内・施主濱原〉吾郷屋妻／阿津也	無	
140		430×410×270	背面：石室五百内／武劔／施主／井口清助	数珠	
141	木蓮尊者倚像	760（付台座含）×405×395 別台座150×465×420	背面：川崎市之進藤定盈母／養壽院殿義山智孝大姉／宝暦十三癸未七月十六日 付台座背面：石工福光住／坪内平七／利□／□	宝珠	右手にぎり穴約7mm
142		430×390×310	座裏：石室五百内	無	
143		420×410×290	背面：石室五百内／施主／武州廣瀬弥平太	数珠	銘朱入り
144		430×445×300	背面：石室五百内／為覺如近菩提 持物：十八體東都霊雲寺	塔婆	頭髪「パーマネント」
145		420×400×310	座裏：石城五百内／釋尼〈妙誓・妙專〉之追福／施主宅野／麹屋文七	無	
146		450×460×300		宝珠	
147		425×425×280	背面：石室五百内／備後國／甲奴郡上下村／井口五郎市	無	
148		435×415×285	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主ちせ	払子	「石室」右上がり
149		465×455×320	背面：江戸御本丸内施主／志野／石室五百内	経巻	
150		420×395×295	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主文尾 座裏：甚七作	無	銘朱入り
151		410×410×260	背面：石室五百□／御施主江戸／田安御殿寅年御〈女・子〉／明和二酉夏	蓋付柄香炉	柄両端直角(下へ)折れ
152		430×415×320	背面：石室五百内／施主／江津沖田屋／五左衛門	未開蓮	
153		420×385×255	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿御□／未年御男子／明和二酉夏	数珠	「石室～施主」中「御」除く・「明和」朱入り

154		440×430×275	背面：石室五百内／施主市山村湯□（伐）／道□（左）衛門／禅理寂□居士	無	両足「くつ」銘朱入り
155		385×405×315	背面右上：田安／御殿内 背面：石室□□□（五百内）／施主光□□（雲）／堀内氏一家□□（普）提／明和二酉□（夏）	払子	柄細工あり
156		445×410×290	背面：石室五百内／東都小林／施主又四郎安延	高台付碗　蓋付つまみあり	銘部分的朱入り（衣とともに？）
157		450×385×290	背面：石室五百内／施主馬路村／六兵衛	無	銘全体に斜め
158		390×450×220	背面上部：施主東都 背面：いせや／多良兵衛／為光明院／貞音〈信・女〉	無	
159		430×430×265	背面上部左斜め：石室五百内 背面：施主／江津沖田屋／要藏	無	銘朱入り
160		420×385×285	座裏：石城五百内／大森講中〈取次・安田屋〉	無	
161		420×445×285	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷〈施主・無名〉	無	
162		420×405×290	背面：石室五百内／為釈順故信士／施主／井田／喜右門	数珠編みひも	銘朱入り　背面白色垂れ
163		395×485×335	背面：田安御殿／御内施主とや女／明和二酉夏	？両手にぎり穴（方形1.9mm）	両手一線
164		440×430×275	背面：石室五百内／大森下市／念佛講中	数珠（長）	
165		435×415×240	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／子年御女子／明和二酉夏	無	
166		425×430×255	座裏：石城五百内／施主澤井条衛門勝如	薬壷？つまみ大	
167		410×400×270	座裏：大森上市／石城五百内／藤八取次	右手数珠 左手宝珠	
168		445×385×300		払子（柄短く　毛長い）	
169		435×370×255	背面：明和二／正月廿□（五）／嶋田□（氏） 座裏：甚七作 持物：為椿花幻請	塔姿？	背面銘下端欠失
170		420×400×285	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷施主／無名	無	銘大小あり
171		420×410×280	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主〈いせき・きち〉	未開蓮	銘朱入り
172		420×390×345	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御□□□（殿 例 内）／未年□□□（例 男 子）／明□□□□（祖 二 酉 夏）	無	銘下部風化顕著欠失
173		420×425×220	座裏：為梅室智香童女／石城五百内／施主／大住氏	数珠（玉　やや太い）	左指先床につく
174		430×425×260	背面：石室五百内／寄進〈東・都〉霊雲寺／為了阿近住	無	銘　一部朱入り・一部浅い
175		415×435×280		経本？（片面正方形開く）	
176		430×375×255	座裏：施主〈濱原西田屋・幾六〉／石室五百内／為母佛杲菩提也	経巻（開）	
177		430×385×260	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／丑年御男子／明和二夏	無	
178		485×360×295	背面：石室五百内／江戸御本丸□／施主□（蓮）河 座裏：甚□（七）	無	左足「くつ」
179		420×420×275	背面：石室五百内／為性月近住／速證覚位／霊雲寺	無	
180		420×425×245	背面右肩：川崎氏定孝 背面中央上部：十體ノ内世名 背面中央下部：馬渕善治／高橋半七／高橋左衛門／高橋米七／佐久間□蔵	宝珠	
181		440×395×320	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主里衛 座裏：（墨書）庄	無	
182		450×390×250	背面：石室五百内／三體〈施主・東都慈眼院〉	未開蓮・葉２本	
183		440×420×255	背面：石室五百内／大森下市／念佛講中	無	背面一部墨書痕
184		420×405×295	座裏：五百内造此一體以擬／亡妹釋尼清林妙光／追福者也延享戊辰／施主荒井清兵衛	宝珠（蓮座のる）	
185		420×370×250	背面：石室五百内／俗名水田金三郎／釈覚榮霊／施主銀山水田氏／釈覚慈 座裏：（墨書）石工理兵衛	払子（蓮弁付）	
186		410×410×235	座裏：石室五百内	未開蓮・葉２本	
187		430×405×260	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏 座裏：墨書（不読）	無	
188		420×435×265	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主／栄□	無	

189		420×425×270	背面：□□□□□／□□／八色石／抜屋／□□五郎 座裏：庄	無	「石室～施主」ほとんど欠失 両足「くつ」
190		450×370×270	背面：石城五百内／為雪窓妙雲信尼〈菩・提〉／延享元甲子十二月五日／巳七月施主花田七之助／石工坪内吉□□／作　（墨入り）	無	左足たてひざ・ひざまくり
191		445×405×255	背面：石室五百内／施主〈銀山・喜宝院〉	未開蓮	
192		440×400×230	背面：石室五百内／施主都茂村／波田直左衛門／寺戸早助	柄付鑰・鑰棒	
193		420×425×300	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏	無	「石室～施主」朱入り「田安」朱垂れ
194		435×410×280	背面：石室五百内／霊雲寺／為夏□童子 座裏：甚七作	無	
195		430×380×300	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主川□□	無	
196		475×390×230		未開蓮・葉２本 茎交叉	瞳肌色周囲白
197		435×390×315	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷／施主無名	無	左たてひざ外側垂線　１本 両足「くつ」
198		420×410×300	座裏：正智菩提／石城五百内／施主小原増茂兵衛	香炉（大皿状にうがつ）	
199		440×410×255	背面：石室五百内／為遍誉全□□□〈信・□〉／施主中村三宅新七	無	「石室五百内」除き朱入り
200		445×430×250	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿子年御〈女・子〉／明和二酉夏 座裏：甚七作	無	
201		430×370×375	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿未年御□□／明和二酉夏	無	
202		440×400×265	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷〈施主・無名〉	無	
203		425×395×255	座裏：石城五百内／講中	香炉（大皿状にうがつ）	
204		455×430×280	背面：石室五百内／施主／亀谷／藤田六衛□	無	
205		430×400×260	背面：石室五百内／施主小豆原〈清九良・貞四良〉	無	背大部分彩色なし
206		455×300×270	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷〈施主・無名〉 座裏：（墨書）□七	無	銘朱入り　背在銘部彩色なし　衣彩色よく残る 左足「くつ」
207		445×440×270	背面：石室五百／霊雲寺／為救性童子 座裏：甚七作	無	銘朱入り　座裏顔料垂れ・平面
208		430×395×295	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主志乃 座裏／三八	無	
209		445×430×255	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主〈見く・こせ〉	無	「石室五百内」小文字
210		445×340×300	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／酉年御男子／明和二酉夏	無	両足「くつ」
211		430×405×260	背面：石室五百内／施主／柴岡丹蔵	未開蓮	
212		465×405×260	背面：石室五百内／東都／小林又四良／安延／施主	無	智拳印の逆印相 右手親指と薬指むすぶ？
213		430×410×245	背面：□□□百□／江□御□□□／□□〔　　〕	？左手にぎり穴	銘　消している
214		430×430×245	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／未年御男子／明和二酉夏	未開蓮	
215		400×455×265	背面：石室五百内／施主都茂村／寺戸□左□門／為二親□□	無	
216		400×365×270		無	
217		430×430×290	背面：石室五百内／施主江□／沖田屋□三郎 座裏：八	宝珠	
218		430×420×300	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷／施主無名	無	
219		410×375×250		巻紙　右手にぎり穴（木・竹筆？）	前に布がけ机様
220		425×430×275	背面：石室五百内／施主／東都櫻田／芳蓮院	巻紙（開）	
221		450×425×265	背面：石室五百内御〈施主〉江戸／田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏	払子	
222		450×420×275	背面：江戸御本〈丸・内〉／石室五百内／施主いわ瀬	塔婆	一行目と以下字体異なる
223		420×405×250	背面右上：御施主／江戸 背面：田安御殿御内／石室五百□／未年御男□／明和二酉夏 座裏：墨書（不読）	経箱？　蓋　右側	

224		415×395×285	座裏：淨専菩提／石城五百内／施主／小原佐渡屋／孫左衛門	無	両手指間接を表す左足「くつ」
225		400×390×255	座裏：施主銀山博屋／弥兵衛／石室五百内／為一子也	払子	目　白色
226		405×415×265	座裏：石室五百内施主福光本領／薦先祖冥福／市原傅右衛門	払子	
227		450×385×320	背面：石室五百内施主／江戸御本丸内砂野	未開蓮	
228		465×385×270	背面：石室五百内／〈御・施主〉江戸田安御殿御内／未年御男子／明和二酉夏 座裏：(墨書)石工／□□□□	宝珠(大)	「石室五百内」大文字
229		395×415×285	背面：石室五百内／施主畑田村／源十郎／妻	無	全体に小文字　両足「くつ」
230		410×265×290 (300欠失)	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿未年□女子／明和二酉夏	無	「石室～施主」(「御」除く) 太文字　右足「くつ」
231		245×425×210	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏 座裏：(墨書) □□	払子	「石室～施主」大文字銘朱入りの上に衣の白入る
232		455×405×295		無	両手と顔しわ写実的
233		420×410×265	背面上部：施主川下村／為 背面下部：耳□／増□／直□／妙[　　]／三軆内[　　] 座裏：石室五百内	巻子	銘下半分欠失
234		385×410×300	背面：石室五百内／霊雲寺／為覚證信士 座裏：甚七作	開蓮(大)花のみ両手で受ける	背銘朱入り
235		430×465×290		無	
236		400×415×280	座裏：施主和田祐左衛門／石室五百内／為一子之也	無	
237		425×380×280	背面：石室五百内／施主／東都永□院	無	
238		445×375×285	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主／あすか□	無	
239		370×410×310	背面：施主／石室五百内武□／書間[　　]門	巻子（緒表現）	
240		430×395×275	背面：石室五百内／江戸御本□□／施主／□□□	無	左足「くつ」
241		445×370×250	背面：石室五百内／施主大國村十□	左手数珠　下側右袖と胸の間へ	
242		440×430×280	背面：石室五百内／江戸御本丸為／御祈祷〈施主・無□〉	無	背銘部彩色なし
243		440×420×260	背面：石室五百内／施主都茂村／品川甚之助／為二親菩提	無	銘　類例の少ない字体
244		410×410×290	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主〈瀧やま・□那〉 座裏：甚七作	数珠	
245		460×385×255	背面：石室五百内／宋意信士／為妙秀信女／霊照信女〈畑廻・國助〉	無	右足「くつ」
246		400×385×280	座裏：大森中市／石城五百内／田村屋取次	無	写実的表情
247		370×400×305	座裏：石室五百内／施主〈大森町・羅漢構中〉	無	「石室～大森町」特に細線
248		440×375×280	背面：石室□百内／江戸御本□内／施主〈□□・□□〉	無	
249		445×415×270	背面：石室五百之内／大森下市／念佛講中	払子	
250		465×370×255	背面：石室五百内／御施主江戸田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏 座裏：甚七作	無	頭髪「パーマネント」
251		430×420×275	背面：石□□百内／寄進〈東都・霊雲寺〉為幻□童女	鉄鉢？浅い碗状に穴	
252		125×　×		無	頭部のみ No.42脇

羅漢寺五百羅漢・右窟内石造物一覧表

番号	像　種	法量（全高×全幅×全厚）m/m	銘　文	持ち物	備　考
1		450×440×280	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主志ん	無	銘朱入り　左人差指・中指伸ばす
2		430×420×245	背面：御施主江戸石室五百内／□□御殿御内／□□□男□／明和二酉□	無	佛（腹前･左枕で右斜め前を見る）
3		440×410×255	背面：御施主／江戸石室五百内／□□御殿御□／［　］男子／明和二酉□	獅子？	
4		400×360×260	背面：石室五百内／爲光月信士／施主〈役者・蓮光□〉	数珠	
5		420×430×290	背面：石室五百内十八□／東都霊□□／為覺如近菩提	無	
6		430×370×250	背面：石室五百内／江戸□□丸□／□□／□□	無	
7		425×475×275	背面：石室五百□／御施主江戸／田安御殿／未年御女子／明和二酉夏	無	
8		430×380×280	背面：石室五百内／施主／蒼嶽院玄壽／武州吉野弥市 座裏：平七作	無	「蒼～壽」以外 朱入り
9		440×395×240		無	
10		470×400×300	背面：石室五百内／東都／役者宝光院 持物（題箋）：霊雲寺	経本	
11		330×430×280	背面：石室五百内／施主上野村／源十郎 座裏：甚七作	無	
12		445×410×265	背面：施主／石室五百内／大坂御陣屋	経本？	
13		480×425×265	背面：石室五百内／施主御本丸□／高□	無	
14		370×450×240	背面：東都／寄進　霊□寺／為智範近住／石□□百内	無	
15		470×380×280	背面：石室五百内施主川本村／丸屋〔　〕／一來院了達□〔　〕／法浄院浄蓮〔　〕	無	〔　〕欠失
16		450×450×240		無	脇息を前に置き両肘をつく
17		425×410×280	背面：石室五百内／江戸御本丸爲／御祈祷／施主／無名	無	銘朱入り
18		450×420×265	背面：石室五百内／施主九日市村／原田屋／理兵□	経本？	
19		440×360×260		宝鉢	
20		440×380×230	背面：石室五百内／施主〈奥山村孫六・同九良左衛門〉	無	
21		450×400×245	背面：石室五百内／施主／米屋清兵□	数珠	最終文字欠失
22		400×430×270	左袖：爲玉容童女菩提／施主母 座裏：石室五百内	数珠	
23		425×375×300	背面：石室五百内／施主日原村／喜三右衛門	無	
24		425×410×255	背面：石室五百内／施主／湯里村／源四□	振り鐘	
25		430×410×295	背面：石室五□□／□□□〈□・□〉／宗意□□／為妙秀信女／霊照信□	文（経）箱	「□～□〉」前銘？
26		440×410×255	背面：石室五百内／川本阿川三郎□／妙信童女／老申英智童子 持物：施主	和本	
27		400×415×270	背面：石□五百内／□□梅□信士／□□智白信女／施□□□〈福富三右門・福富茂平太〉 座裏：甚七郎作	無	
28		435×435×320	背面：石室五百内／大森町講中	無	
29		410×415×285	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉□	無	
30		400×385×280	背面：石室□□□／江戸御［　］／施□ 座裏：甚七作	無	銘風化欠失
31		410×390×260	座裏：石城五百内／施主〈大貫・西田屋彦六後室〉	払子	
32		400×355×270	背面：石室五百内／施主／宅野／茂□	無	□欠失
33		470×410×270	背面：□□□□／施主［　］郎／俗名□三右門 座裏：甚七作	未開蓮・葉計２本	銘風化欠失
34		465×410×260	背面：石室五百内／施主江津／鹽屋嘉平太 座裏：甚七作	無	
35		440×400×290	背面：石室五百内／施主都賀本江／昌蓮／心海全貞信士／廓道信士／梅林恵香信女／妙善信女	未開蓮	
36		410×420×280	背面：石室五百内／宝暦十四申／圓明浄智信士／二月十七日施主〈高津・安野平治〉	未開蓮	
37		435×410×260	背面：御施主（上部横書き）　石室五百内／江戸 座裏：甚七作	宝珠	
38		355×410×255	背面：石室□□□／施主小松地／木工平 座裏：甚七作	無	

39		410×405×260	背面：□□（百内）／[　　]／[　　]□□（中）／竹内□幡	無	銘風化欠失顕著
40		425×450×280	背面：石室五百□（内）／田安／□□（御殿）	無	銘風化欠失顕著
41		435×390×265	背面：石室五百□（内）／施主畑□／あち□	経本？	銘下端欠失
42		450×420×300	背面：江戸／御本丸／石室五百内 持物：施主／梅村	経本	「江戸御本丸」朱未入
43		360×360×270	背面：石室□□□（五百内）／施主十□ [　　]／□（為）〈[　　]・[　　]〉	無	銘風化欠失
44		390×415×240	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／子年御女子／明和二酉夏	無	
45		510×470×265		数珠、如意	
46		465×370×275		無	
47		415×400×295	背面：東都／寄進霊雲□（寺）／為□（良）月童子 座裏：（墨書）□□□兵□（右京亮衛）	無	
48		460×415×295		無	
49		410×430×280	背面：石室五百内／江戸御□□□（本丸内）／施主松□（嶋）	無	□（嶋）の下欠失
50		445×390×270	背面：□□（石室）五百内／[　　]□院	無	銘欠失
51		415×385×280	背面：石室五百内／寛永四未／松林院貞□（堂）／明和二酉八月十七日／大國村山形八五良／大悟院□然同人	蓮花	
52		425×380×260	座裏：石室五百内／大森羅漢構中	無	
53		420×425×280	背面：石室五百内／施主三俣村／岡／六郎右衛門	無	
54		430×380×280	無	無	
55		440×380×295	背面：石室五百内／江戸／御本丸内／施主梅田	無	
56		430×395×270		無	
57		450×395×285	背面：石室五百内施主／中木屋村弘中氏康教／良巌院見誉義光居士／為梅誉妙秀大姉菩提	数珠	
58		420×425×280	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主福松□（殿） 座裏：（墨書）□□兵衛	巻子	
59		400×429×280	背面：石室五百内／施主江津／沖田屋啓三良	無	
60		435×460×320	背面：施主石室五百内／都賀小兵衛／釈浄信／釈妙順　　座裏：甚七作	錫杖様	
61		415×400×280	背面：石室五百内／為先祖菩提／施主井田村□□（常八）	宝珠（大）	
62		425×420×250	背面：石室五百内／施主八色石／□屋忠五郎	巻子	
63		440×400×285	背面：石室五百内／施主津和野／領都川平七	数珠	
64		420×375×245	背面：石室五百内／施主仁□（市）□／為有縁無縁菩提／宗兵□（衛）	無	
65		475×425×260	背面：石室五百内／大森下市講中	数珠	
66		440×375×270	背面：石□□（室五）百内／御施□（主）江□（戸）／田安御殿／未年御男子／明和二酉夏	無	
67		425×375×280	背面：石室五百内／江戸／□（御）本丸□（為）／御祈祷施主□□ 座裏：守	無	
68		450×390×210		塔婆	
69		445×420×290	背面：川﨑氏定孝／木村□治／十軆ノ内□□（名）原□助／□（淳）平市□□／田中久 [　　] ／百村□ [　　]	巻子	銘欠失
70		415×390×270	背面：石室五百内／施主吾江村／加賀屋理七	軍配？	
71		420×400×250	座裏：石城五百内／大森／念佛講中	数珠	
72		430×400×260	背面：□□／[　　] ／□□（為男）[　　] ／□（嶋）[　　]	無	銘削除？
73		420×410×275	背面：石室五百内／施主湯里村／和平／能谷□（文）□	無	
74		400×425×260	座裏：廣嶋野上屋／石室五百内／先祖代々爲菩提	無	
75		420×420×285	背面：石室五百□（内）／施主	無	
76		410×365×260	背面：石室／施主	無	銘風化顕著欠失
77		400×375×235	背面：石□□□□（室五百内）／江戸／施主 座裏：墨書（不読）	無	銘風化顕著欠失
78		370×460×250	背面：市川／為父母施主玄□／快盤宗□（梁）／二躰内為父母／施主佐摩村／佐津 持物：石室五百内	板状の物	
79		460×415×260	背面：石室五百内／施主都賀井行小兵衛／妻／釈忠恵／妙喜妙春妙□ 座裏：甚七作	未開蓮	薄い台に座る
80		440×435×320	座裏：薦濱神宮寺代々先師／石城五百内／施主雲州古志興法寺	数珠	
81		410×405×310	背面：[　　]	無	上半身（肩から上除く）風化顕著
82		430×420×440	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御□（殿）／寅年御□（女）子／明和二酉夏	無	
83		450×385×290	背面：御施主江戸／田安御殿御内／石室五百内／未年御男／明和二酉夏	無	
84		405×400×260	座裏：大森中市／石城五百内／田村屋取次	無	

85		440×390×245	座裏：石城五百内／大森／念佛講中	蓮花（花のみ両手で受ける）	
86		425×390×280	背面：石室五百内／江戸御本丸／為御祈祷／施主無名	無	
87		440×390×240		宝珠	
88		430×440×285	背面：石室五百内／施主／東都櫻田／芳蓮院	払子	
89		430×390×305	背面：石室五百内／御施主江□（戸）／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏	玉	
90		410×410×290	背面：石室五百内／施主／東都櫻田／芳蓮院	未開蓮？	
91		450×390×255		数珠	
92		450×365×225		無	
93		420×405×240	背面：石室五百内／光照仙蒙童子／観月妙正信女／施主粕淵村／米屋清兵衛	無	
94		430×410×270	背面：石室五百内／施主津茂村／澄川澤右□□（衛門）／為二親菩提 座裏：庄	開蓮（花のみ両手で受ける）	
95		450×410×265	背面：石室五百内／施主野井村／浅五郎祖母 座裏：甚七作	日輪？	
96		450×420×300	背面：大森下市／石室五百内／念佛講中	蓮花の器（枘付）	
97		440×400×290	背面：石室五百内／江戸御本丸／御祈禱／施主無名 座裏：甚七作	宝珠	
98		420×390×290	座裏：施主大森町／石室五百内／羅漢構中	数珠	
99		440×390×250	背面：□□（百）五百内／□□信士／為□□（妙秀）信女／霊照信女	無	
100	迦葉尊者立像	800×300×210 台座120×330×240	背面：石室五百内／御施主未御歳御□（男）子／明和二乙酉□□ 台座：□□（華英）／□（作）者／石工福光／坪内平七□（朋）忠 持物：百三體御施主／田安御殿御内	経本（在銘）	一石造 磐座
101		430×360×270	背面：石□（室）[　　]／覚誉[　　]／施主□□肥後□（屋） 座裏：墨書か？	無	銘風化欠失
102		400×465×305		？右手にぎり穴	
103		470×400×280	背面：石室五百内／施主／武劔高木三郎兵衛	箱（包みあり）	
104		400×370×260	背面：石□（室）□□□（内）／御□（殿）／[　　]／明和二	無	銘風化欠失
105		400×415×280	背面：石室五百内／江戸御本丸／御祈禱／施主無名	無	
106	阿難尊者	460×400×290 蓮座130×460×385 台座260×485×385		一石五輪塔（空風欠失）	蓮座真裏弁…無彩色
107		395×470×270	座裏：闇室智證信女／石城五百内／施主宅野藤聞理兵衛	無	
108		445×415×230	背面：石室□□□（五百内）／施主／大坂屋〔　　〕 座裏：墨書（不読）	払子	
109		450×370×260	背面：石室五百□／御施主江□／田安御殿□□（男）／未年御男子／明和二年酉夏	無	
110		425×410×220	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御男子／明和二酉夏	経巻	
111		410×395×275		水瓶？	
112		440×370×255	背面：石室五□□（百内）／御施主江戸／田安御殿内百三□／□□（男子）／明和二酉 座裏：三十五體（左縁）／甚七作（前縁）／五百體内（右縁）	払子	
113		405×410×240	背面：石室五□□（百内）／施主川上り□（村）／市□□／先祖□□（各位）	無	
114		435×415×240	背面：石室五百□（内）／施主大□□／□□□／[　　] 座裏：庄	鉢	銘風化欠失
115		440×405×295	座裏：石城五百内／大森講中／取次安田屋	無	
116		450×410×340	背面：石□（室）五百内／御施主[　　]／寅年御[　　]	無	銘[　]風化欠失・正座
117		415×415×260	背面：石室五百内／施主伏谷村／川角喜三郎／宝永（ママ）十四申□（母）／釈尼妙好／三月□□（七日） 座裏：庄	無	宝永十四→宝暦十四
118		400×410×350	座裏：薦古志興法寺来海岩屋寺／石城五百内／代々先師施主／雲州古志興法寺	無	
119		425×375×260	背面：石室□□□（百内）／慈雲□□□（幸）／施主□□□（大田南）／□□ 座裏：墨書（不読）	開蓮（花のみ両手で受ける）	
120		395×430×250		つま楊枝？	
121		460×410×300	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／未年御男子／明和二酉夏 座裏：甚七作	未蓮花	座裏銘周囲とともに朱入る
122		400×375×275	座裏：濱原西田屋／施主幾六／石室五百内／爲父佛果菩提	数珠	

123		415×425×285	座裏：薦了智之冥福／石城五百内／施主小原松屋傅右衛門	無	
124		435×365×265	背面：石室五百内／田安御殿御内／施主と□□（や女）／明和二酉夏 座裏：甚七作	払子	座裏銘周囲とともに朱入る
125		460×375×260		無	背面中央部彩色なし
126		380×455×280	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏	無	
127		415×385×240	背面：石室五百内／施主／吾郷村恵薫／為大浦新屋先祖代々／諸霊魂	無	
128		430×390×265	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏	無	
129		440×420×280	背面：石室五百内／施主／濃州／内藤為助	数珠（赤色）	
130		455×380×265		無	
131		420×365×250	背面：□□□（石五）百内／□□川下村／吉十郎／□右□	無	銘風化欠失
132		425×420×255	背面：石室五□□（百内）／江戸御本丸為／御祈祷／施主無名	無	字鋭く細い
133		465×390×230		無	
134		435×390×280	背面：石室五百内／江戸御本丸□（為）／御祈禱／施主□□（無名）	無	
135		450×440×270	背面：石室五百内／荻村講中	？両手にぎり穴貫通	
136		450×400×295		無	
137		415×415×290	背面：石室五百内／施主都茂梅津弥左衛門／同権之助／為両親菩提 座裏：甚七作（一部赤色顔料入る）	無	
138		465×405×250	背面：御施主江戸／田安御殿／未年御男□（子）／明和二夏 持物：石室五百内 座裏：甚七作	塔婆（在銘）	
139		455×380×220	持物：？	額	持ち物風化欠失顕著
140		425×410×290	背面：石室五百内／施主／江津／沖田屋三左衛門	無	
141		400×410×310	背面：石室五百内／江戸御本丸／施主小□	開蓮（花のみ両手で捧げる）	
142		440×390×295	背面：石室□□□（五百内）／□□（江戸）御本丸□（為）／施主□□（施田）	蓋付椀	
143		430×400×210		無	
144		460×455×305	背面：大森下市／石室五百内／□□（金倉）講中	無	
145		410×440×295	背面：石室五百内／宝暦十三未／性□□明信士／□（弐）月八日／施主高津／藤原新蔵	払子	
146		425×460×265	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿内／百三□□（雅内）／梅沢／この女／明和二酉	無	
147		420×385×260	背面：石室五百内／施主／綱屋〈吉□□・[　　]〉	杖	
148		415×330×270	座裏：石城五百内／五（墨書）／施主新屋村／九右衛門／妻	無	
149		440×400×300	背面：石室五百内／□□□□□（江戸御本丸）／□□□（御祈祷）／施主[　]	無	銘風化欠失顕著
150		410×350×265	背面：石室五百[　]／宝永五[　]／海清[　]／施[　]／□[　]／[　　]	無	銘風化欠失顕著
151		445×400×240	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿御内／未□（羊）御男子／明和□□□	？風化	
152		425×390×305	背面：御施主江戸／田安御殿／酉年御男子／明和二夏	有（風化形不明）	
153		445×405×255	背面：石室五百内／施主□（園）城寺村／□清兵□（衛）	無	
154		415×375×265	背面：石室[　]／施主津□村／永田[　]衛門	無	銘風化欠失
155		420×380×270	背面：石室五百□／施主宅野村／文左□□（衛門）	？風化	
156		445×405×290	背面：石室五百□（内）／施主江津／鹽屋嘉平太／母	払子	
157		445×410×280	背面：□□□百内／御[　　]／[　　]子／[　　]夏	未開蓮？	銘風化欠失顕著
158		415×430×290	背面：石室五百内／宝暦十二午／施主／京屋／和平／母	数珠	
159		390×400×310	背面：薦自然玄洞冥福／石城五百内／施主中野三郎兵衛／母	無	左側風化
160		380×440×300	背面：石室五□□（石内）／義□□／施主大石又八□（座）／為二親菩提	無	右肩から下風化
161		410×420×260	背面：石室□□□（五百内）／御施主／田安[　]／[　]／宝暦五□	払子	銘風化欠失顕著
162		425×410×300	背面：石室五百内／故月順正童子／探月了玄信士／施主粕淵村／米屋清兵衛	つる草花	
163		445×415×255		無	
164		440×390×260	背面：石室五百内／施主温谷十左□□（衛門）／銀山□／為浄心□信士／明和二酉（彫り直し痕跡有り）	無	「左」後の一字ケズレ　青色文字前銘のもの
165		420×415×290	背面：石室五百内／施主市山村／湯淺道右門／地主諸精霊	無	
166		460×370×245		数珠（２重）	
167		460×395×230		無	

168		460×400×290		無	両肘から上と腹から上裸
169		440×370×270	背面：石室□□□／武劔〈施主・佐藤〉[　　]	無	動物を前におく
170		420×430×325	背面：□室□百内／□□江津／[　　]□平太／室	数珠	
171		430×430×260	背面：石室五百内／施主／東都蓮受院	払子	
172		370×440×270	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏	香炉	
173		460×400×245		無	
174		435×400×280	背面：石室五百内／宝暦九[　　]／六月[　　]／定心院宝[　　]／宝暦六子／探入院妙禅信□／七月十四□／施主濱原村〈[　　]・十[　　]〉	無	銘風化欠失
175		450×390×245		柄付香炉？（蓋付）	
176		460×385×240		払子	背中央と衿全体（裾まで）彩色なし？
177		415×410×295	座裏：石城五百内／大森講中取次田村屋	？右手にぎり穴貫通	右足「くつ」
178		455×380×270	背面：東都／寄進霊雲寺／為勝住近住／石室五百内	蓋付椀	
179		400×420×270	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御殿／丑年男子／明和二酉	開蓮（大・花のみ両手で受ける）	「石～主」（「御」除く）太字朱入り
180		400×445×275	背面：田安御殿□[　]□□女／明和二酉□	数珠（太玉）	銘衣紋に沿い斜め
181		420×410×300	背面：石室五百内／施主小谷村／□免／為中場五郎左□□ 座裏：庄		
182		430×415×250	背面：石室五百内／施主／大坂御陣屋 座裏：墨書（不読）	未開蓮	
183		415×400×265	背面：石室□□□／[　　]／得□[　　]士／秋月[　　]女	月輪？	銘風化欠失顕著
184		450×370×240	背面：石室五百内／御施主江戸／内藤為助／□□□□	払子	
185		435×365×280	背面：□□□□内／御施主江戸／田安御殿未年御女子／明和□□□	未開蓮と葉２本	
186		420×455×285	背面：石室五百内／大森下市／念佛講中	水瓶	
187		455×410×285	背面：為江戸御本丸／御祈祷／施主無名／石室五百内	巻子	
188		415×395×285	背面：大森下市／石室五百内／念佛講中	無	
189		435×375×290	背面：石室五百内／笹ヶ谷山小林／□□／為釈[　　]□	無	銘風化欠失顕著
190		415×410×240	背面：石室五百内／御施主江戸／□□□内／百三體内／佐保□／をて□／明和二酉	無	
191		420×435×260	背面：施主都茂村／永田多郎左衛□／為〈□嶽幽峯居士・松□壽林比丘□〉 持物：石室五百内 座裏：甚七作	塔婆	
192		445×405×285	背面：石室五百内／〈施主・濃州〉錦見善□[　　]	数珠	
193		400×415×265	背面：石□五□□／為速證覚□□／[　　]・[　　]	宝珠	銘風化欠失顕著
194		460×415×265	背面：石□□□内／施□□□堂村／□左衛門／旭□妙曜／□□妙壽 座裏：甚七作	経箱	
195		430×410×275	背面：石□□□□／為先祖代□□提／□□[　]／□性 座裏：甚七作	？風化	風化顕著
196		405×405×265	背面：石室五百□／御施主江戸／田安御殿／寅年御女子	？欠損	
197		360×455×265	背面：？室補修材付着	無	
198		435×420×240	背面：石室五百内／施主[　　]／[　　]／梶野□□	無	銘風化欠失顕著（体も）
199		425×405×275	背面：田安／□女／□[　　]／□□□酉夏 座裏：石城五百内／施主	索	全体（肩から上除く）風化顕著
200		425×405×275	背面：石室五百内／施主／藤井七良右衛門	払子	
201		405×385×275	背面：施主／□摩郡／久利村／□室五百内／前原左衛門	払子	
202		430×420×245	背面：石□□□□／為[　　]□女／施主下井田／武左衛門 座裏：庄	無	銘風化欠失
203		420×400×275	座裏：（墨書）□六	無	
204		440×385×265	背面：石室五百内／施主江□[　　]□／[　　]	無	人名欠失
205		390×360×285	背面：石室五百内／施主大国村／山形／八重良／宝暦三酉九月十一日／光照院妙觀信女／春窓妙光個女同人妻□□／宝暦七丑正月四日	無	衣左右彩色異
206		430×400×250	無	払子	下衣彩色朱の上に黒

207		430×385×300	背面：石室五百内／十王堂村／施主庄屋孫兵□（衛）／イワ磯八□ 座裏：墨書（不読）	無	
208		410×380×275		経本？	持物背大半彩色なし
209		430×385×265	背面：石室五百内／施主／霊雲寺内／春暁／明和二酉夏	未開蓮	
210		450×385×275		無	
211		450×375×255		杖	
212		420×395×285	背面：石室五百内／施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏	払子	
213		460×400×265		無	
214		430×390×285		無	
215		455×385×230		無	
216		420×365×280		数珠（長）	
217		410×370×285		未開蓮？	
218		430×425×260	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御□（殿）／寅年□□（御女）子／明和二□□（酉夏）	無	
219		430×415×255	背面：石室五百内／紫雲童女／施主湯里□／源□□□（左衛門） 座裏：庄	未開蓮	
220		490×415×275		無	
221		440×380×240		未開蓮	
222		450×395×285		数珠（二重）	
223		450×370×240		無	
224		450×405×225		無	
225		420×385×300	背面：石室五百内／江戸御本丸内／施主と□□（清） 座裏：庄	無	
226		440×415×320	背面：石室五百内／畑ヶ迫國助／宗意信士／為妙秀信女／霊照信女	数珠	
227		460×410×245		無	背大半彩色なし
228		435×415×285	背面：石室五□□（百内）／御施主江□（戸）／田安御殿／寅年御女□（子）／明和二酉夏	経本	
229		450×345×280	背面：石室□□□（五百内）／江戸／御本丸為／御祈祷□□（施主）［　］ 座裏：一八	無	
230		455×390×290	背面：石室五百内／施主市山村／湯淺□□（退右）衛門／通清□□（達著）信士	宝珠	
231		425×375×230	背面：石室五百内／為〈宗意信士・妙秀信女・霊照信女〉／畑廻□□	無	口を大きく丸に開け舌表彫
232		420×405×250	背面：石室五百内／粕渕村／照誉誓光信士／真誉妙誠信女／政右衛□（門）	無	
233		470×415×270	背面：石室五百内／川本道見屋／庄兵衛 座裏：八	経巻？（長）	
234		430×410×255	背面：石室五百内／施主江戸／田安御殿／寅年御女子／明和二酉夏	未開蓮？（先端欠？）	
235		425×405×255	背面：石□　　為（未彫？）	無	
236		390×400×270	座裏：石城五百内／荻村井田氏浄誉蓮清	無	
237		415×390×265	背面：石室五百内／施主川本村／米屋半三良	無	左肩露出
238		415×410×245	背面：石室五百内／御施主江戸／田安御□□（女子）／明和［　］	無	
239		420×450×300	背面：□□□（石室五）百内／［　］□□（元）三左衛門 座裏：庄	無	銘風化欠失
240		425×420×250	背面：石室五百内／御施主江戸田安□□（御殿）／子年御女子／明和二酉夏	鉢	
241		430×400×270	背面：石□□□□／江□［　］／［　］／［　］□□（啓）	無	銘風化欠失顕著
242		445×395×270	背面：□□□□（石室五百）内／［　］／［　］／［　］□（男）子	香炉？	胸・背各下半部風化欠失顕著
243		440×375×245	背面：［　］／□□□（御施主）／［　］□□（御殿）／［　］□□□（御女子）／［　］□□□□（明和二酉夏）	三鈷？	全体風化欠失顕著
244		440×415×265	背面：石室五百内／御施主江戸田安□□（御殿）・寅年御女子／明和二酉夏	長頸壺（耳付）	
245		400×400×285	背面：［　］／［　］／［　］ 持物：□（達）誉清本 座裏：八・（不明）	塔婆？	全体風化欠失顕著
246		425×370×260	背面：石室五百内／江□□（戸御）本丸内／施主〈ふし沢・もよ〉	無	
247		405×390×270	座裏：大森中市／石城五百内／取次／田村屋	無	
248		435×360×235	背面：石室五百□（内）／施主上○藝劦□□／傳三□（良） 座裏：□□（墨書）	無	背大半彩色なし
249		455×405×230	持物：爲〈風珠齢秀童子・幻露童女〉菩提〈石室・五百内〉	塔婆	
250		450×380×250	背面：□□□□□（石室五百内）／□□（施主）江戸／□（寅）年御女子／□□（明和）二酉夏	無	彫り直し痕あり
251		425×420×295	座裏：薦心清童女追福／石城五百内／施主宅野藤間宇兵衛	水瓶（栓・注口付）	
252		450×380×270	背面：石□□□□（室五百内）／江□□□□□（戸御本丸内）／施主［　　］	無	銘風化欠失
253		425×385×265	背面：石室五百内／施主池田村／坂根權吉／坂根治左衛門	無	

Ⅴ－3　石見銀山の石造物等にみる石工名

1．福光の石工

石見銀山遺跡に残る石造物の中には、僅かながらも石工名を刻んだものがある。その代表的な例は福光の石工であり、なかでも明和3（1766）年に完成した大森地区の羅漢寺五百羅漢坐像群がよく知られている。これは福光石工の坪内平七一門の作品群とされ、かつての伊藤菊之輔氏や三谷晃氏の論考、あるいはこのたびの宮本徳昭氏の調査報告により、平七、吉兵衛、庄□、勝四郎、甚七、理兵衛、伝六、喜□らの名を具体的に知ることができる。平七については、銘文には「平七」「石工福光／平七利□」とだけあるが、五百羅漢の完成を祝って落慶法要が営まれた際の造立棟札に「尊像棟梁石工平七利忠」とあり、この時一門の棟梁であったことが明らかである。

現時点で福光の石工の作品と分かる最も古い石造物は、蔵泉寺口付近にある享保4（1719）年造立の題目塔である。銘文に「石工福光村坪□七」とあり、これも平七が関係したものと考えられる。これに次ぐのは翌5（1720）年の温泉津町福光所在・楞厳寺所蔵の大日如来坐像であり、「施主／福光村住／坪内平七／石工同人」とあって、同様に平七の作例と分かる。

江戸時代における福光石工名が分かる石造物には、この他に大森地区勝源寺境内にある地蔵菩薩坐像（福光石工忠兵衛、嘉永2〈1849〉年）や、同寺楼門に安置された釈迦如来坐像（石工理兵衛、年未詳）があり、周辺部の例では温泉津町西田にある「副道夷険碑」（福光住坪内伊平太只氏、文化8〈1811〉年）がある。

また、銀山柵内の豊栄神社境内に残る燈籠・用水桶・狛犬・手水鉢・鳥居などの石造物群は、幕末の慶応3（1867）年に長州軍によって寄進されたことで知られるが、これらもすべて福光石の作品である。これらのうち石工名が確認できるのは狛犬のみであり、「福光石工／棟梁　甚四郎」と刻まれている。

文献史料にみえる福光石工名についても触れておくと、天保11（1840）年の「福光村石工人議定書」（重富家文書）には、坪内姓以外に重田、山中の2姓が記されている。いまのところこの2姓は石造物では確認できないものの、銀山周辺の石見八幡宮の棟札に記載例があり、坪内姓に混じって山中姓の石工名を見ることができる（同社文化15〈1818〉年棟札、山中平兵衛）。

また、寛政12（1800）年の「福光村水役銀受取書」（温泉津町福光・福富家文書）には、福光下村の石工として平七以下、伊平太、□蔵、利兵衛、喜兵衛、嘉兵衛、平十郎、与平、周助、甚七、庄兵衛、多兵衛、小兵衛、藤吉、多三郎、十五郎、磯十郎、常吉、富五郎、栄蔵、喜代蔵、と全部で21名が記されている。この時期の同村における石工集団の具体的な様子がうかがえる貴重な史料である。

また、前述天保11（1840）年の議定書は、福光の下村堂面庄兵衛・春木屋利兵衛・竹井屋儀兵衛・蔵の段力兵衛・増田屋春吉・荻屋半重郎・上假屋浅吉・吉舎屋久平・山根角五郎・樫戈勘兵衛・森脇秀兵衛・中祖政兵衛・中祖善吉・下組やぬい、本領山口□市右衛門・青木屋小兵衛・二郎田忠兵衛・竹や磯平・まつや恒八・中や紋三郎・小坂や惣七・谷口や岡平・鶴吉、林村古やしき多吉・大和や林平・上田や又兵衛とあって、3所26人からなる石工集団が確認できる史料としても貴重である。

2．福光以外の石工

石見銀山遺跡の柵内および大森地区では、僅かながら福光以外の石工名も確認できる。大森地区狼谷入口付近にある屋形入り石造地蔵菩薩像は、嘉永6（1853）年銀山の下級役人層である「御中間中」が施主となって造立されたものである。これには「石工波根東村六四郎」の銘があって、銀山から15kmほど離れたところに位置する波根の石工が残した作例であることが分かる。

また、地元および近隣の石工という点におい

ては、石造物ではないが、文化12（1815）年の大森陣屋門長屋棟札に「石工西田好蔵・福光下村勘兵衛・大森町増平」、あるいは文化11（1814）年の佐毘売山神社本殿外棟札に「石工大森藤右衛門」といった例があることから、温泉津方面や地元大森町の石工がいたことも確認できる。

さらに周辺地域の近世棟札をみると、邇摩郡の神子路（神辺姓）、馬路村、湯里、温泉津（竹内・河波田・奥部姓）にも石工がいたことが確認できる。

大森地区の羅漢寺五百羅漢は、既述のように坪内平七一門の作品群である。しかし、それが安置された石窟は明和３（1766）年の棟札に「石室棟梁和田宗四郎・同石工新七・同石工太兵衛」とあり、和田姓を名乗る石工が施工したものである。この和田姓は、同じ敷地の一角に建つ文政２（1819）年の「無量寿院羅漢寺梗概碑」に記された「石工雲州三刀谷（ママ）住和田源四郎幸常・和田門助幸英」と同族とみられ、隣国の出雲国飯石郡三刀屋住の石工であったことが知られる。

なお、出雲地方の石工は、大森地区を離れると、仁摩町石見八幡宮でも確認できる。同社の文化９（1812）年の棟札に「石匠雲州赤名万兵衛・保兵衛」とあって、同社の鳥居・石垣が出雲国の飯石郡赤名住の石工の手によっていることが分かる。赤名は石見銀山街道の一つである尾道ルートの要衝にあって、石見銀山と無関係とは言えず、石工の活動が当時の銀や物資の輸送ルートと重なっていた可能性もある。また、鳥居や石垣には花崗岩などの硬質の石材が使用される場合があったと想像されるが、こうした石材を加工できる技術者も時としてこの地域で必要ではなかったかと推測される。

花崗岩を石材とする例には、大森地区の城上神社境内の文久２（1862）年の狛犬があり、これには「石工大坂西ほり石屋平兵衛」とみえる。また、銀山を離れると、温泉津町西田の水上神社の享保９（1724）年石鳥居は「大工尾道町山根茂三郎」とあり、同町温泉津の龍御前神社の享保16（1731）年石鳥居には「備前尾道石工畑清三郎」と刻まれている。さらに文政２（1819）年の佐毘売山神社本殿外棟札にも「石工備前清治郎」とみえることから、花崗岩の石造物は瀬戸内や大坂方面からもこの地域に搬入されている実態がうかがえる。（鳥谷芳雄）

参考文献

・伊藤菊之輔『石見の石造美術』1968
・三谷晃「大森五百羅漢像の銘文について」『季刊文化財』第８号（島根県文化財愛護協会）1968
・三谷晃「大森五百羅漢」『石見銀山叢話』（島根県文化財愛護協会）1972
・宮本徳昭「羅漢寺五百羅漢」（本書）
・鳥谷芳雄「羅漢寺五百羅漢の造立棟札」『石見銀山遺跡ノート３』（島根県教育委員会外）2004
・温泉津町誌編纂委員会編『温泉津町誌上巻』1994、327～330頁
・温泉津町誌編纂委員会編『温泉津町誌中巻』1995、384～388頁
・温泉津町誌編纂委員会編『温泉津町誌別巻（資料編）』1996、94～96頁
・島根県教育委員会外編『石見銀山遺跡総合調査報告書平成５年度～平成10年度・第６冊－民俗調査・港湾調査・街道調査編－』1999、「補論　鞆ケ浦地域・沖泊地域の棟札」

Ⅶ　総括と展望—石造物からみた石見銀山—

1．石造物調査の目的と方法、およびその経緯

石見銀山遺跡は、直截的には銀・銅採掘の鉱山遺跡であると同時にその産出に関わる多様な遺跡と遺物、あるいは無形文化財的な遺産等を包括する複合的な遺跡である。この特性は16世紀前半から20世紀前半におよぶ長期の銀・銅生産と関連する諸活動の累積によって付与されている。また、本遺跡は、長期間にわたる遺跡の総体形成に相即する空間的な広がりにおいても傑出した規模を有する比類ない遺跡ということができよう。

こうした特性の解明にどのような角度から迫るのが有効かはさまざま論議の存するところである。ここに示した石造物の調査は、石見銀山遺跡の全地域に数多く分布する石造物を分析対象とすることによって銀山開発に関わった人々とその集団的営為のありようと変遷を具体的に復元し、そこから銀山遺跡の動態と意義を明らかにしようとするものである。

石見銀山遺跡内には①信仰関連石造物（墓石等）、②生産関連石造物（要石、石臼等）、③交通・流通関連石造物（石切り場跡、道標等）の石造物がみられる。本調査はこれら全てを視野に置きつつも①を中心に展開された。その理由は①が遺跡内に広汎かつ大量に存在するということに加えて以下のような資料的特性を有しているからに他ならない。即ち、①の石造物、とりわけ墓石にはその多くに造立年や被葬者に関するいくつかの情報が明示されており、このことと墓石の形状とが相即的に把握できるという点では格好の考古資料とすることができ、さらには大概の墓石は群をなして存在しており、そのことからは単体としての墓石と集合体としての墓石群の相関を考察することも可能となってくるのである。換言すれば、一個人とそれが属する家族や集落、あるいは労働集団構成を解き明かすうえでもきわめて有利な条件を備えているということができるのである。

石造物調査においては如上のような問題意識の下に1999（平成11）年～2003（平成15）年の５ヵ年にわたり銀山柵内地区・大森地区・街道等の関連地区において相当徹底した検分・検出調査を実施した。調査方法は既述のように①分布調査、②悉皆調査、③生産跡発掘調査等と連携した関連調査の三形態に分けて進めてきたが、このことは、島根県教育委員会が行なった1984（昭和59）年～1986（昭和61）年の概括的調査、石見銀山遺跡発掘調査委員会の下で実施された1997（平成９）年、1998（平成10）年の分布調査の経験を総括することによって考案されたところである。①～③について年度毎の取組み状況は次の通りである。

1999（平成11）年度

①龍源寺間歩上墓地、②妙正寺跡墓地、③竹田地区。

2000（平成12）年度

①休谷・清水谷・下河原の各地区、②龍昌寺跡墓地、③羅漢寺所属五百羅漢像石窟。

2001（平成13）年度

①大谷・昆布山谷・出土谷・栃畑谷の各地区、②大龍寺跡墓地・安養寺裏墓地・大安寺跡墓地・妙蓮寺墓地・勝源寺墓地・熊谷家墓地・豊栄神社境内石造物、③城上神社・佐毘売山神社・高砂神社の石造物、羅漢寺所属五百羅漢石窟、赤来町在大光寺跡石造物。

2002（平成14）年度

①本谷地区、②長楽寺跡墓地、西性寺裏墓地（宗岡・河島家墓地）、③羅漢寺所属五百羅漢石窟、銀山街道の石造物。

2003（平成15）年度

①大森地区、②中断、③銀山街道の石造物。

なお、2004（平成16）年度において温泉津町福光地区の石切場調査と銀山街道調査に関わって温泉津・沖泊地区の石造物調査が行われている。

以上の調査によって石見銀山遺跡内に所在する石造物の分布状況とその存在形態、墓地の構

造と変遷の傾向、身分制社会における埋葬のありよう等についての概要といくつかの特徴点が明らかにされたものと考える。以下にその要約を示し、今期（平成11～15年度）石造物調査の成果と課題について述べることにしたい。

2．石造物調査の概要と成果

ｉ）分布調査から　石見銀山遺跡内には総概数14000基に近い信仰関連石造物（墓石等）が存在すると推定される。これを地域別にみると銀山柵内に約6500基（柑子谷等を含む）、大森地区に約6000基（五百羅漢像等を含む）、温泉津・沖泊地区に推定で約1300基以上となっている。これらの信仰関連石造物、とりわけ墓石の造立時期からその営為期間を検証すると、おおよそ中世末から近世を経て一部近代に至ることが知られる。また、墓石の形状からすれば中世墓塔系（宝篋印塔・五輪塔）と近世墓標系の角塔が顕著な存在であり、割合的には後者の角塔が大半を占める。このことは信仰関連石造物から見る限りでは近世期において銀山柵内、大森地区、温泉津・沖泊地区にそれぞれ人口の集中があり、街区が形成されていたことになる。とはいえ、これらの３地区は街機能を各々異にしており、石造物のあり方にもそのことがうかがわれたところである。

《銀山柵内》：銀山柵内は石見銀山遺跡の中核を構成しているが、この地区は採掘から製（精）錬に至る銀・銅の生産を直接的契機として生成・展開しており、そのことが各種石造物の分布と変遷に反映されていると思われる。これまでに分布調査による石造物の所在地は69ヵ所で、その中、５ヵ所は寺院墓地として悉皆的調査を実施した。柵内には往時の集落が谷筋を単位に存在していたことが知られ、仙ノ山・石銀地区にも優勢な集落の営まれていたことが判明している。まずは、こうした旧集落域を基に石造物、就中、墓石分布の概況と特徴を摘記しておきたい。

＊仙ノ山・石銀地区（１～６＝p11～12分布図番号、以下同じ）：ここでは集落域を囲むように墓域が石銀Ⅰ～Ⅴ区とブロック状をなして存在し、とくに街区西側のⅢ・Ⅴ区に集中する。紀年銘からするとⅢ区の1597(慶長２)年がもっとも古い墓石（一石宝篋印塔）である。他区でも17世紀前葉には造墓が開始されたことが知られる。石銀地区全体では墓塔系が圧倒的に高い割合を示し、墓標系の墓石数の少ないことが特徴といえる。Ⅱ区では墓標系墓石は見当たらず、Ⅲ区では90％以上が墓塔系で占められる。比較的墓標系が多いⅤ区で60％であるが、19世紀代の紀年銘をもつ墓石は発見されていない。街区の発掘調査では16世紀後半の遺物が出土していることからこの地区の町並み形成が最古の墓石紀年銘より少し遡ることが予測されるが、最盛期はおよそ17世紀前葉～18世紀前半代にあり、18世紀後半以降は衰退に向かったことことが推定されるところである。関連して、谷筋に存在するいくつかの寺院の伝記に「元、仙ノ山に在り」とされていることが想起されよう。なお、Ⅰ区とⅡ区東群で墳墓とみられるマウンドがかなり発見され、要石が各区から少なからず採集されたことなども石銀地区の特徴といえるのではないだろうか。

＊昆布山谷地区（37・38、44～49）：昆布山谷は南北約500mの狭長な谷で、長福寺跡・虎岸寺・妙本寺・長楽寺の４ヵ寺跡に付属する墓地が５ヵ所確認されている。集落域に近接する妙本寺跡墓地は２箇所で500基を超え、この地区では最大の墓石を擁し、紀年銘による造墓開始年代でも1576（天正４）年を含み、早くから墓地造営が行なわれたことをうかがわせている。これに次ぐ規模の長楽寺跡墓地では1590（天正18）年銘の組合せ宝篋印塔がある。この２寺跡墓地では墓塔系の割合が高く、すでに16世紀後葉から17世紀代に墓地の造営が進んでいたことを示している。逆に、長福寺・虎岸寺跡墓地では墓標系の割合が高く、両者相俟って地区全体としては一定の人口数が保たれていたのではないかと推測される。長楽寺跡墓地では24基の無縫塔が発見され、妙本寺跡墓地でも15基が確認されたし、地蔵の数も目立つことを付記しておこう。

昆布山谷地区の開発は文献上でも16世紀後半代から開始されたことが知られ、新横相間歩等著名な坑道が残されている。墓地の概況もそうした事実と矛盾しない。

＊栃畑谷地区（44～46、50・51）：栃畑谷は大谷から南南西～南方向へ約800m延びる細長い谷で谷口付近に「吹屋」があり、集落跡は谷奥部分に存在したとされる。墓地は集落域より下流にあり、龍源寺間歩上・妙像寺跡・西向寺跡・泉光寺跡の４寺跡５個所の墓地が捉えられた。墓石数の多いのは龍源寺間歩上墓地で約200基が確認されている。最古の紀年銘は妙像寺跡墓地の一墓で1576（天正４）年とあり、龍源寺間歩上墓地の1587（天正15）年がこれに次いでいる。この２墓地は墓塔系が90％以上で墓標系はきわめて少なく、18世紀中頃以降は墓地の急速な衰退が予想される。泉光寺跡墓地にも同様の傾向が看取された。西向寺跡墓地では墓標系の割合がやや高いとはいえ30％強に過ぎない。

文献上、栃畑谷地区も早くから開発が行なわれており、発掘された栃畑谷Ⅱ区下層では15世紀代に溯る遺物が出土している。墓石・墓地にも早期の開発を物語る様相が垣間みえるように思われる。

＊出土谷地区（32～36）：出土谷は、栃畑谷から分かれて仙ノ山・石銀地区に至る幹線道の登り口付近の傾斜の急な谷で、谷口には佐毘売山神社が鎮座している。この地区では字甚光院と西福寺の２寺院跡他２箇所で墓地が見出された。字甚光院跡では500基に近い墓石がカウントされており、分布調査レベルでの確認数としては最大級ということになる。始発に関わる紀年銘としては1597（文禄３）年があり、地区最古の年代を示している。墓塔系は60パーセント近く、墓標系は40％を占める。西福寺跡墓地は墓標系が90％と高い割合を示す。もっとも溯る紀年銘は1774（安永３）年。出土谷33地点も墓標系主体の墓地で1737（元文２）年銘がもっとも古い。これらの状況からは出土谷地区では近世全期を通じて採掘・製（精）錬が行なわれていたとの判断が導かれる。

出土谷は小さい谷ながら、採掘条件に恵まれ、石銀地区との往来筋にも当るところから早期に開発が進行したとみられる。同時に、出土谷Ⅱ区から17世紀初頭の遺物と18世紀後半の「吹屋」跡が検出されたことなどを勘案すれば墓地の変遷状況に相応じた地区の動向が想定されよう。

＊大谷地区（29～31、39～43）：大谷地区は銀山川上流部に当る北東－南西方向の約１kmの谷間で坂根口番所が西限になる。極楽寺跡・順勝寺跡・神宮寺第一寺跡・本経寺跡・徳善寺跡・上徳寺跡の６ヵ寺跡・８ヵ所墓地が川沿いに100m～200m程度の間隔で存在している。極楽寺跡墓地の２ヶ所（29・30）には合わせて650基近い墓石が確認され、順勝寺跡・本経寺跡の２墓地でも200基～300基程の墓石が見出されている。龍源寺間歩等の開発状況と神宮寺横集落の殷賑振りを反映する事実と受け止めたい。最古の紀年銘は徳善寺跡墓地検出の1582（天正10）で、極楽寺跡墓地（30）にも1594（文禄２）年銘の墓石が発見されている。この地区の開発もまた16世紀後半代に溯る可能性があるといえよう。墓地の形成時期からすると極楽寺跡墓地（29・30）や墓塔系主体の徳善寺跡墓地が16世紀後葉から17世紀にかけて先行・継続し、これを追って順勝寺跡墓地が、さらに18世紀中頃より神宮寺第一寺跡・本経寺跡等の墓標系の高い割合を示す墓地が続いている。墓塔系と墓標系が２対３の割合を示し、両者が一地域内で継続的に営造される態には、銀山川ルートが開発当初から銀・銅生産の幹線をなしていたことを裏付けるものといえようか。

＊休谷・清水谷地区（12～18・20～25・27・28）：この地区は柵内東口の蔵泉寺口番所と西口の坂根口番所のほぼ中間に当る。戦国末期の山吹城大手門があり、近世初期には「休役所」が置かれている。また、銀山川沿いには休谷・上市場集落が営まれており、寺院数も少なくない。上市場集落からは清水谷を貫けて仙ノ山に至る幹線道が開かれ、谷内には豪壮な近代製錬所も設営されていて柵内の一拠点地区ということができる。

調査した墓地は龍昌寺跡・安養寺・本法寺跡・清水寺・大龍寺跡・大満寺跡の６ヵ寺・15

ヵ所になる。龍昌寺跡・安養寺・大龍寺跡の各墓地は悉皆調査を実施している。確認した総墓石数は約1400基で一地区としては最大数となる。地区内最古の紀年銘としては龍昌寺跡墓地の組合せ宝篋印塔の1572（元亀３）年があり、大龍寺跡墓地無縫塔の1582（天正10）年がこれに次いでいる。安養寺南墓地・清水寺第Ⅱ寺院墓地にも17世紀前葉の紀年銘をもつ墓石があり、これら墓地では墓塔系が総じて高い割合を示し、早くから造墓活動の行われたことを示している。他方、安養寺北墓地・本法寺跡墓地・大満寺跡墓地等では18世紀中葉の紀年銘が墓地造営開始期を暗示した。同時にこれらでは墓標系80％以上を占めており、近世後半に盛期の存在したことが認められる。このように16世紀後葉期から造墓が行なわれた墓地と18世紀中葉以降に活発な営墓活動がみられる墓地の２者が存在するが、時期的には両者は相互に補完的関係をなしており、当地区が一貫して柵内中枢地域として機能していたことをあらためて確認させる処である。

＊下河原地区（７～11）：この地区は銀山川沿い東端を占める。下流から妙正寺跡・大安寺跡・西本寺墓地・極楽寺跡・極楽寺前の４ヵ寺・１ヵ所の墓地で調査が行われた。中、妙正寺墓地は悉皆調査を行っているが、この墓地の1589（天正17）年銘をもつ一石宝篋印塔が地区内で最古の紀年銘となっている。他地区とほぼ同時期に造墓活動が開始されたとみてよい。大安寺跡墓地・西本寺墓地・極楽寺跡墓地では17世紀前半代の紀年銘墓が見出されているので引き続いて墓地経営が進展していることが知られる。しかし、地区としての特徴は確認墓石総数の85％を墓標系が占めているように17世紀後半から19世紀前半にかけて盛期が形成されていることにあろう。このことが地区の様相とどう関連するのかが問われてくる。政治的・地理的に高い利便性が存したと推測される下河原集落の性格と歴史的動向に関心がもたれよう。

＊本谷地区（55～69）：以上に示した各地区は仙ノ山の山頂付近から北側の銀山川谷筋一帯に存在している。対して南側には本間歩・釜屋間歩・大久保間歩・金生坑等の有力間歩が並ぶ本谷地区があり、墓石群等の石造物が数ヶ所で確認されている。その中、於紅ヶ谷の「天正在銘基壇」(58) は早くから知られた例であるが、他にも16世紀後葉の紀年銘が刻まれた墓塔があり(56)、本間歩付近で1592（天正20）年銘墓塔が、竹田地区では1602（慶長７）年銘墓塔等が見出されている。墓地として捉えられたのは浄国寺跡と称される平坦部一帯で、ここでは５群75基(62～66) がカウントされた。とくに、浄国寺跡３墓地では56基の墓石が集中しており、水落口番所付近にも３ヶ所で墓石群がみられた。本谷一帯の傾向としては墓石100基以上が群集するような大型墓地の存在は認められず、墓塔系が点在するといったことが指摘できよう。ただ、浄国寺跡３墓地（64）や水落口付近３墓地（69）のように墓標系が高い割合を示す例もあるが、規模は小さく、この地区での開発盛期が去った後に形成された墓地と考えられる。

《大森地区（１～14）**》**：銀山川に沿う町並み（「伝建地区」）の背後には多数の墓石が存在する。その多くは寺院に付属する墓地内に収まる。上流から左岸部で蔵泉寺墓地・栄泉寺墓地・正寿寺跡墓地・妙蓮寺墓地・西性寺墓地・勝源寺墓地があり、右岸部には大音寺墓地・観世音寺墓地がある。地区南西端の羅漢寺や狼谷入口等にも墓地が形成されている。確認された墓石総数は約5500基で、中、左岸部にその70％強が分布している。墓石数が多いのは西性寺墓地で1750基を数えるが、これらには近・現代の墓石も含まれる。造墓始発期を示す紀年銘墓は正寿寺跡墓地在の1621（元和７）年銘をもつ一石宝篋印塔で、ここには墓塔系墓石（約20％）が集中している。栄泉寺墓地の1626（寛永３）年銘墓も最古級に属する。しかし、全体の90％は墓標系墓石で占められ、墓地経営の開始期が18世紀中葉以降となる例が圧倒的に多く、さらに造墓活動は近・現代にまで続いている。大森地区の町並み形成と展開状況を反映する現象といえようか。代官墓や銀山役人等の一族墓地が少なからず存在するのもこの地区の特徴と考えられる。

《沖泊・温泉津地区》：銀山街道の起・終点地区

となる沖泊・温泉津地区にも多数の石造物（墓石・地蔵・鳥居等）がみられる。沖泊では総数650基の墓石があり、これらは主として集落背後の丘陵状にいくつかのブロックをなして存在している。墓標系が圧倒的に多く、紀年銘の示す処に従えば、18世紀から19世紀にかけて造立され、一部は近・現代に及ぶ墓地群であることが判明する。墓塔系もわずかながら存在し、1662（寛文２）年の銘が刻まれた墓塔もみられた。

温泉津地区内には西念寺墓地・西楽寺墓地・恵珖寺墓地等に近世墓群が残されている。いずれも墓標系主体の墓地で近・現代の墓石が少なからず含まれているが、墓塔系墓石もいくつか混在する。西念寺墓地には「享保」の銘字をもつ墓塔があり、恵珖寺墓地には墓塔系墓石が集積されていた。また、瀧御前神社の鳥居には1731（享保16）年の銘字が刻まれている。その他、沖泊－温泉津間の街道沿い墓塔・墓標・地蔵等からなる大規模な墓地があり、中、１基の一石五輪塔には1574（天正２）年の紀年銘がみられた。主体は墓標系で約80％を占め、終焉期は近代に置かれるようである。

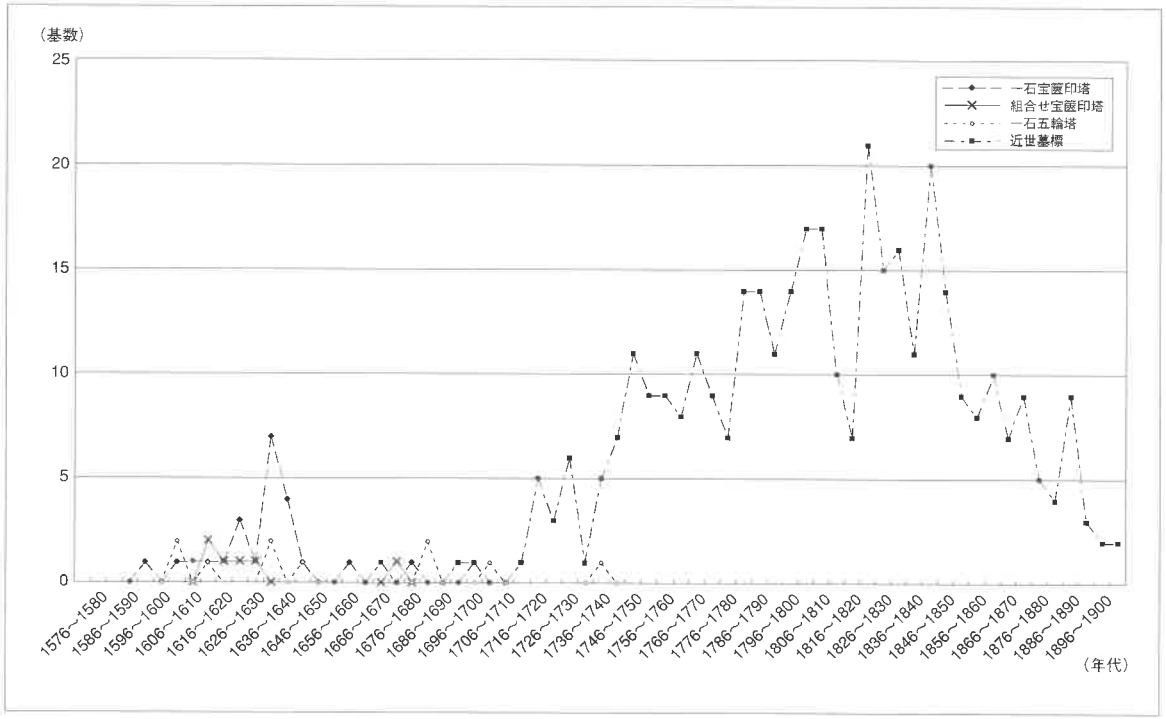
沖泊・温泉津地区の墓石を中心とした石造物のありようは基本的には銀山柵内や大森地区と大同小異の様相を示していると考えて大過ないであろうが、現代との繋がりという点では大森地区により近い傾向を有しているように思われる。

ⅱ）悉皆調査から　柵内に現存または所在した６箇所の寺跡墓地、豊栄神社の石造物について調査を実施した。これら寺院付き墓地については墓地の変遷と宗派による特色が存在するか否か等を主たる視座に置き進めてきている。以下に各寺院跡墓地の特徴的な様相を摘記して後論に備えることとする。

《妙正寺跡墓地》：日蓮宗・妙正寺は1514（永正11）年の創建とされ、元は「銀山清水谷」にあったという。1943（昭和18）年まで現在地に存続していた。確認された石造物の総数は559基。中、墓石は549基を数える。

＊墓地の形状：標高差約20m、巾約60mの斜面空間に５～６段からなる雛壇状の平坦部があり、ここに等高線に沿って列状に並ぶ墓石群が15のブロックをなして存在している。

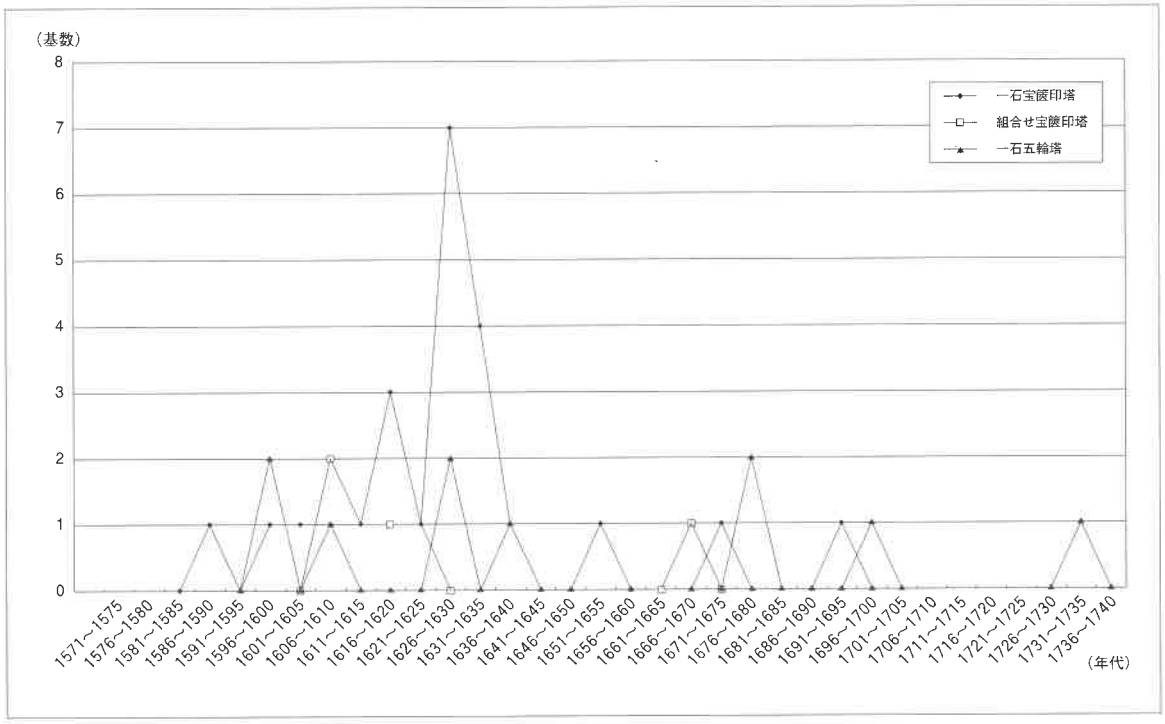
＊墓石の種類：墓塔系（一石宝篋印塔・五輪塔、組合せ宝篋印塔・五輪塔、無縫塔）、墓標系（円頂方形・円頂方柱・円頂六角柱、尖頭方形・尖頭方柱、平頂方柱、笠付方形・笠付方柱・笠付



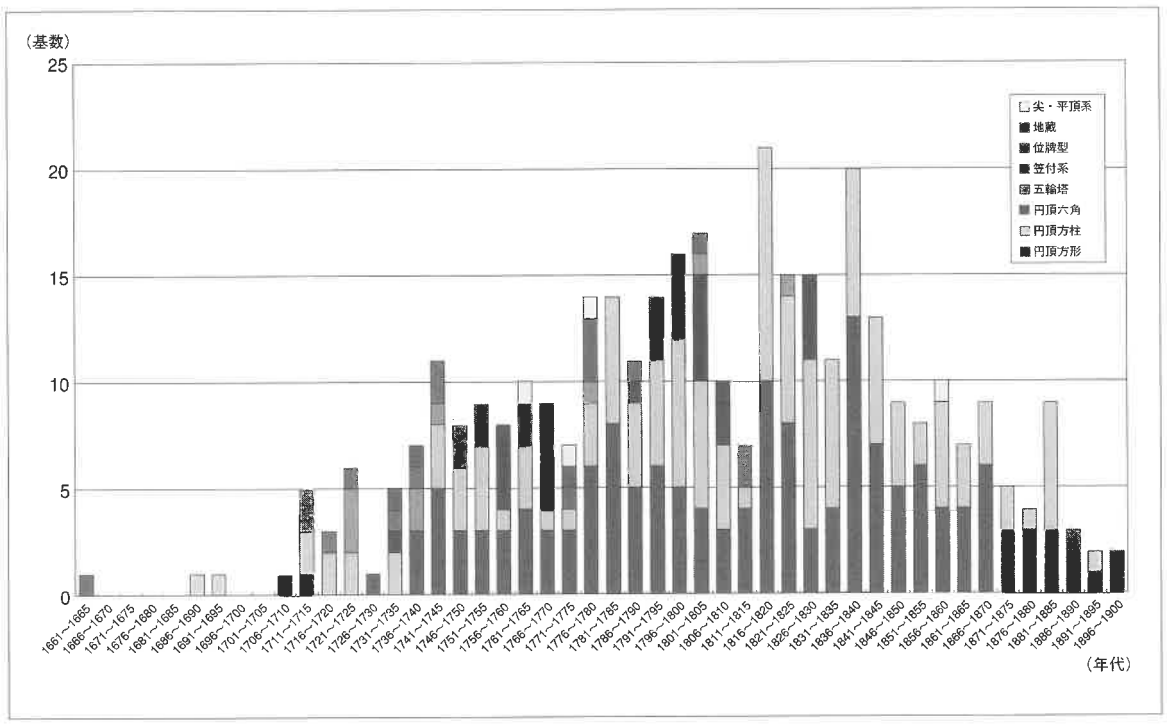
妙正寺跡墓標変遷表

六角柱・笠付刳り込み、位牌型)、その他（地蔵、自然石）等の２系11類18型式の存在が認められた。墓石数の割合からすると、円頂系墓標が52％を占め、中でも円頂方形型は201基、円頂方柱型が143基を数える。墓塔系も17％（95基）と比較的高い割合を示している。また、笠付墓標や地蔵の基数も目立った。総じて、墓標系を中心に多型式の墓石が共存する点は妙正寺跡墓地の一特徴といってよいであろう。なお、要石が墓地内で採集されたが、その意味するところにも関心がもたれる。

＊墓地の変遷：549基の墓石中紀年銘をもつ墓



妙正寺跡五輪塔・宝篋印塔集成表



妙正寺跡型式別墓石集成表

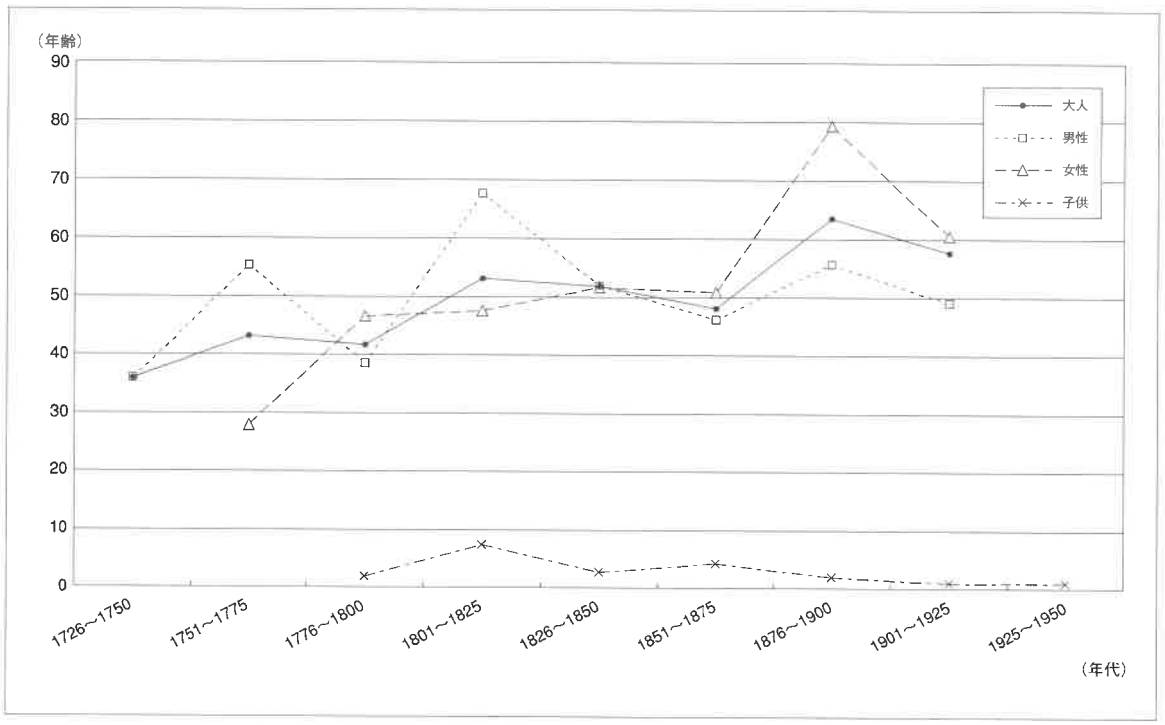
石は433基で総数のほぼ80%に達する。わけても円頂系墓標群では紀年銘の刻まれる例が高い割合を示している。一石宝篋印塔も68%と比較的多くが紀年銘をもっている。これらの紀年が墓地変遷解明の決め手となる。

最古の紀年銘は一石宝篋印塔の1589(天正17)年で最新は円頂方柱型墓標の1911（明治44）年である。このことに端的に示されるように中世墓石の形式を引き摺る墓塔群は16世紀末から17世紀前半代に集中して造立され、一部18世紀前半に及んでいる。円頂等の近世墓標群は18世紀中頃から19世紀に大多数が造営されている。墓塔系から近世墓標系への移行は17世紀後半代にあり、この期を境に墓塔系中心の時期と墓標系中心の時期とに大きく区分することが可能であろう。同時に、18世紀から19世紀の墓標群の変遷にも５期の画期が識別されており、１画期の時間巾が20年～40年になることも指摘されている。およそ一世代間とみられないだろうか。

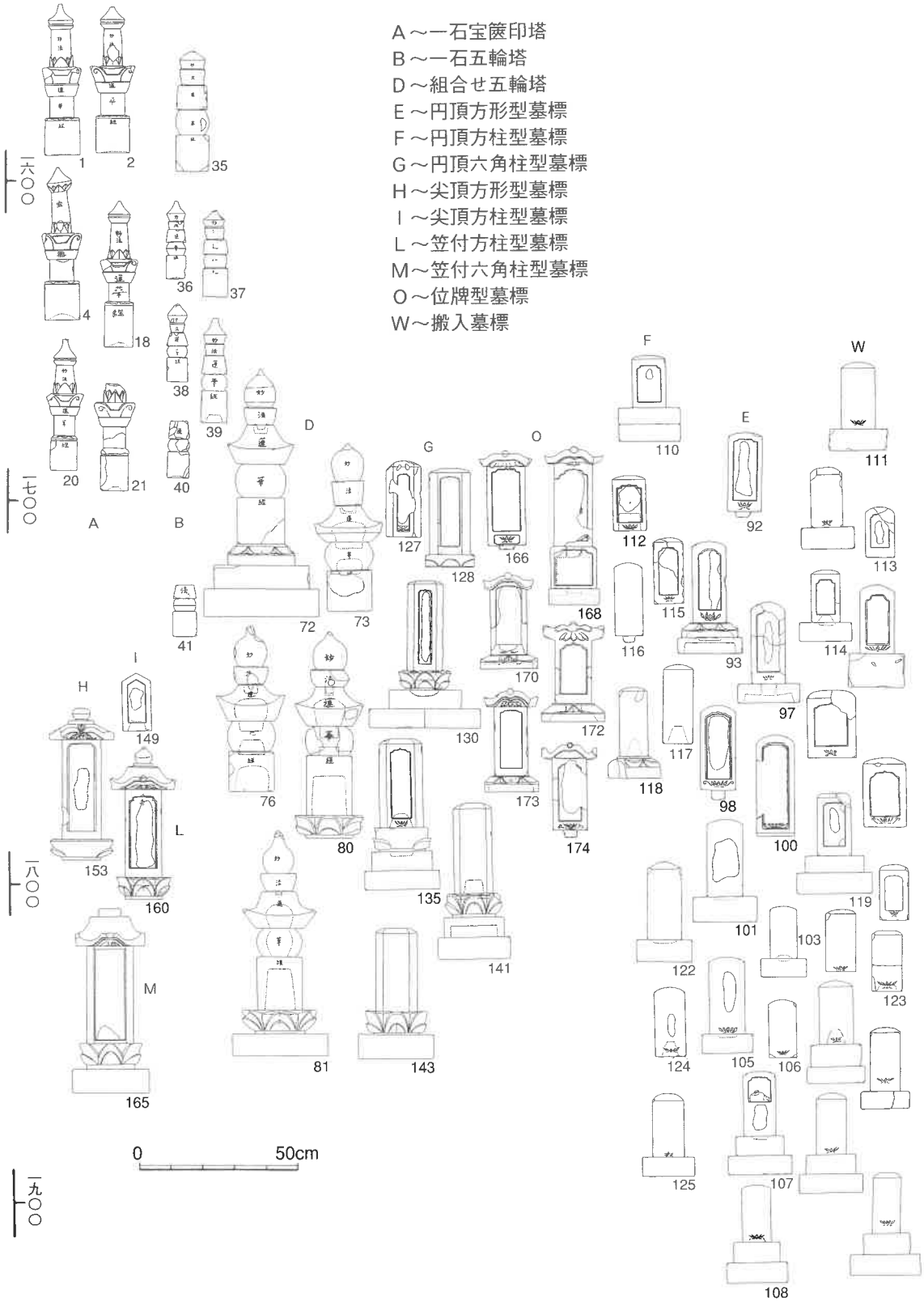
墓石の変遷と併せて検討すべきは15箇所の墓域の消長である。17世紀代には墓塔系が斜面に向かって右手高所（A群）に集中する他墓地全体に散在している。このことは、斜面中位が近世墓標墓域として改変されたために墓塔系の墓石が移動ないし改修されたことを想定させる。18世紀代では最下段を除く墓地全体にブロック状（B群～M群）をなして近世墓標が展開する。19世紀代に入ると斜面中位より下位に分布が移動している。最下段の平坦部のN群は19世紀から20世紀にかかる墓群で他所からの移入墓とされる。

＊集団・階層・信仰：墓塔・墓標の多くに「妙法」の銘字が刻まれていることは、当然ながら、妙正寺墓地が日蓮宗信者の埋葬地として形成・展開したことを教えている。しかし、墓標には浄土真宗派の「釈」・「釋」を戒名の頭に付けた例が少なからずある。とくに向かって左側の高位の墓標群や最下段に並ぶ墓標群（N群）のように移入墓と見られる墓石では顕著な存在となっていた。これが果たして偶発的なものなのか、または信仰集団の弛緩現象とみうるかはにわかに決し難いが、いずれにしても、集団的排他性は認められない。

墓地を構成する15のブロックがどのような性格の集団に対応するかのかといったことも興味深いことといえよう。この点に関してY家の７代150年間（1757年～1893年）にわたる系譜の復元が試みられたのは貴重である。これでみ



妙正寺跡年代別死亡年集成表


A～一石宝篋印塔
B～一石五輪塔
D～組合せ五輪塔
E～円頂方形型墓標
F～円頂方柱型墓標
G～円頂六角柱型墓標
H～尖頂方形型墓標
I～尖頂方柱型墓標
L～笠付方柱型墓標
M～笠付六角柱型墓標
O～位牌型墓標
W～搬入墓標
一六〇〇
一七〇〇
一八〇〇
一九〇〇
0
50cm

妙正寺跡墓標変遷図

ると平均で1世代に3人程度の埋葬が行なわれたことになる。

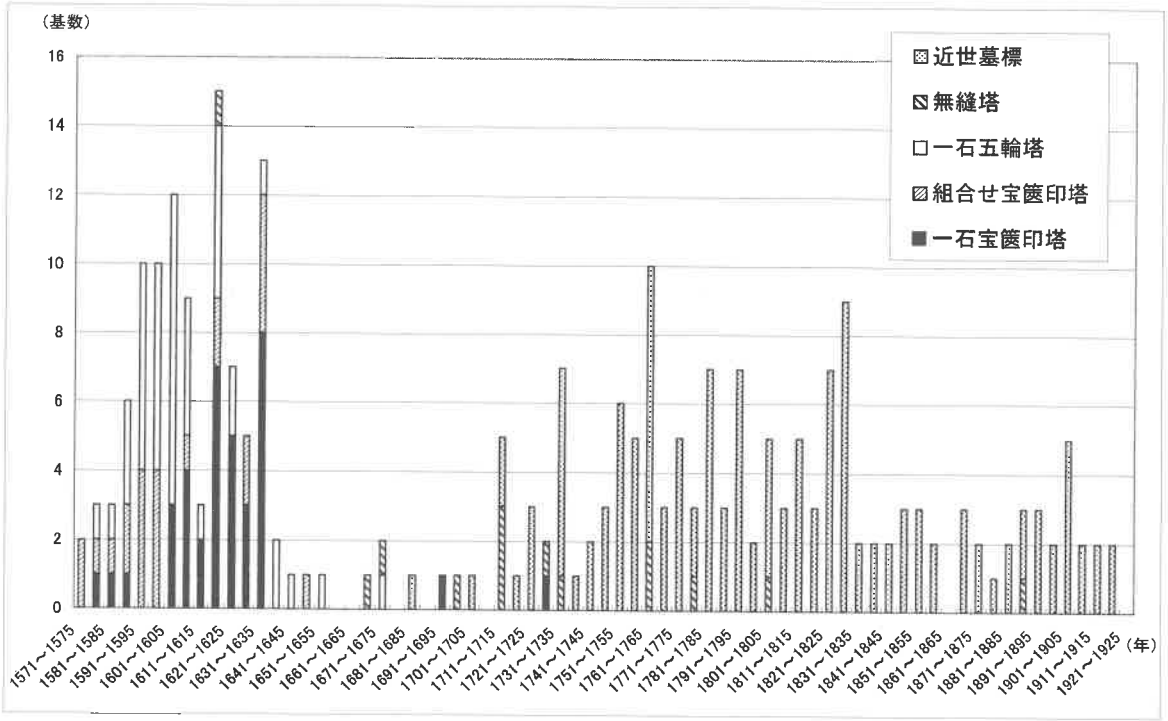
墓標には苗字と屋号の銘字も散見されている。石見銀山内で苗字を有するのは鉱山役人や有力頂町人層とみられ、彼等が宗派墓地に埋葬されたことが知られる。また、屋号を刻む墓標は商人層のものと考えられ、複数の身分層が墓所を共有していたことも推測されるところである。さらに、院号を記した墓塔・墓標が67例確認されたが、墓標型式別にみると円頂方形・方柱型では14%であるのに対して、組合せ五輪塔(多くが18世紀前半代)で25%、円頂六角柱型では32%と高い比率を示している。屋号を記した墓標中では2例のみに院号が付せられていた。こうした事実は院号が限定された有力者(家)に付与されたことをものがたる。また、墓石の型式では組合せ五輪塔や円頂六角柱型が上位階層に採用されたことをうかがわせた。

以上に示したように、妙正寺跡墓地の悉皆的調査はその有効性を確認させただけでなく、以後の調査の指針を定めることができたことでも大きな意義があったと考える。

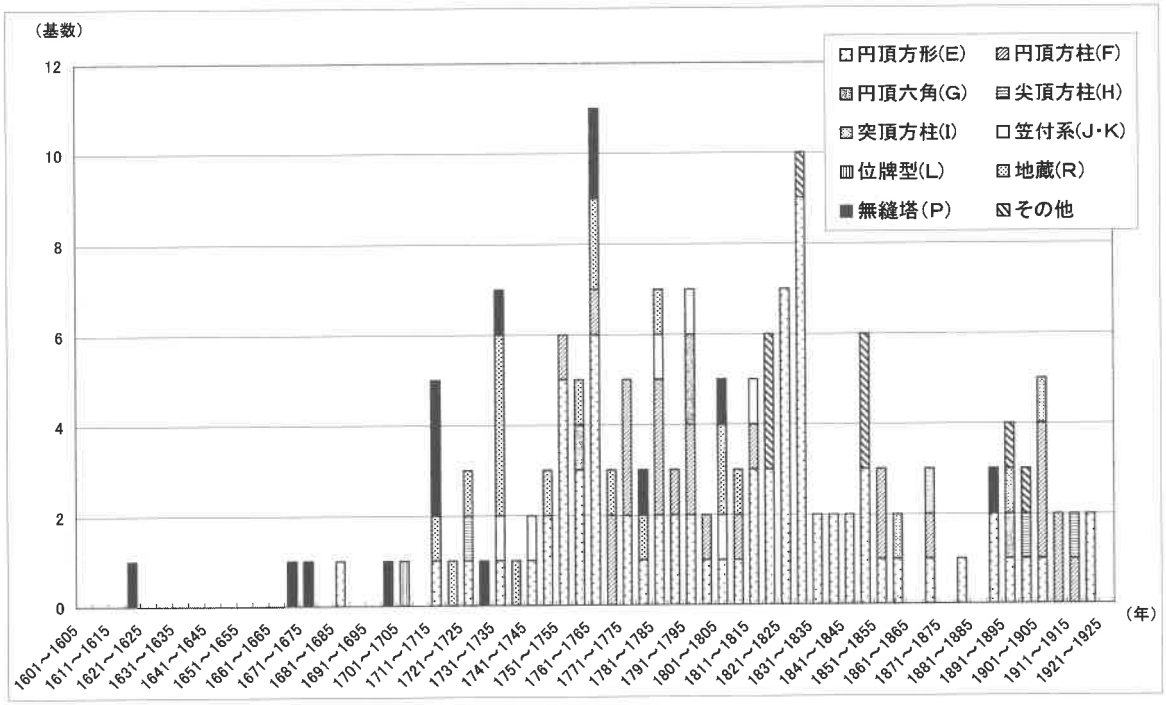
《龍昌寺跡墓地》：曹洞宗・龍昌寺は応永年間(1394年～1427年)に創建され、1604(慶長9)年下河原に諸堂を建て、寺号を「龍昌寺」としたという。明治期にも広大な寺域に本堂他6堂宇を構える豪壮な寺院であったことが知られる。現在は市内久利町所在。調査により確認された墓石等の総数は530基余である。

＊墓地の形状：小谷の奥に寺跡があり、その北側の山丘尾根・斜面・雛壇・回廊状平坦部に墓地が形成されている。墓石群は14群(A群～N群)に分かれ、尾根上から斜面にかけ等高線沿いに造成された雛壇・回廊状の平坦部に営まれるグループ(A群～I群)と最下段の広い半円形平坦面の一群(J群)に大別される。他に本堂跡の前方から参道脇にも墓石群が見出された(K群・L群・M群・N群)。

＊墓石の種類：墓塔系(一石宝篋印塔・五輪塔、組合せ宝篋印塔・五輪塔、無縫塔)、墓標系(円頂方形・円頂方柱・円頂六角柱、尖頭方柱、突頂方柱、笠付方形・笠付方柱、位牌型)、その他(地蔵、自然石)等と2系11類15型式が確認された。これらの割合は墓塔系61%、墓標系30%で墓塔系の高いことが注目される。とくに、一石宝篋印塔106基は傑出した基数であり、地蔵



龍昌寺跡墓標変遷表



龍昌寺跡型式別墓石集成表

58基も一単位の墓域では最大級といえる。墓標系では円頂方形型が円形方柱型をやや上回っている。

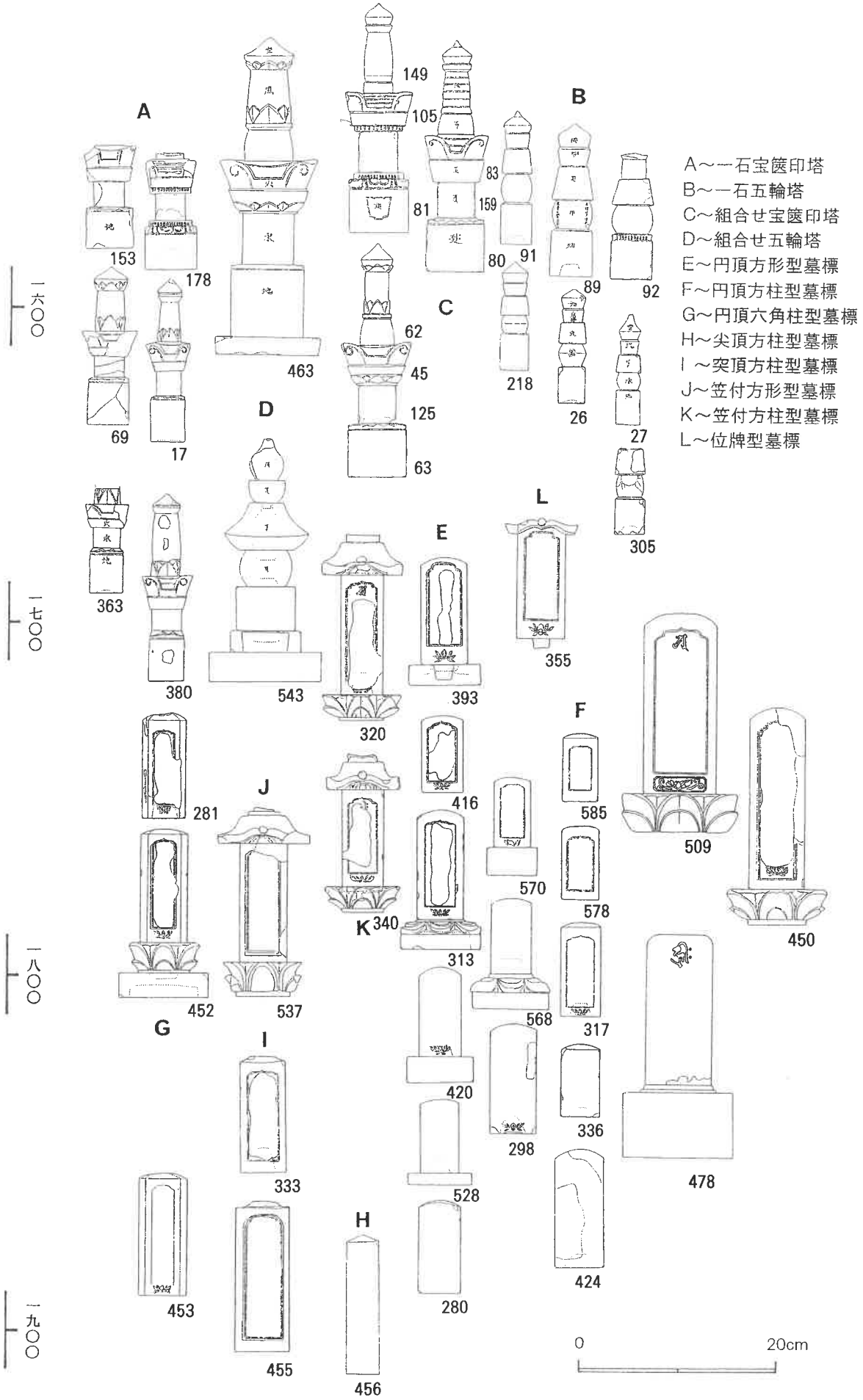
＊墓地の変遷：紀年銘が確認された墓石は247基ある。最古の紀年銘は組合せ宝篋印塔の1572（元亀３）年で現状では石見銀山遺跡中最古の墓石となる。最新の墓石としては1948(昭和23)年の円頂方形型の墓標が存在し、近代の墓標も幾例かみられる。しかし、これらの19世紀後半代墓と前半代墓の推移の間には短い空白期が認められるので、一応、近世墓としては1866（慶応２）年の円頂方柱型墓標等をもって最新例としてよく、その意味から龍昌寺跡墓地は造営期間がもっとも長い墓地の一例ということができよう。

墓塔系は先の元亀３年墓を始発として17世紀の中頃まで造営されている。その主流をなすのは一石類で造営のピークは17世紀の前葉にある。墓標系は円頂方形型が先行し、円頂方柱型が後続している。前者は1712（正徳２）年が初源で以後近世墓の主体部分を占める。後者は1730（享保15）年例がもっとも古く、前者を補完しながら19世紀後半に及ぶ。

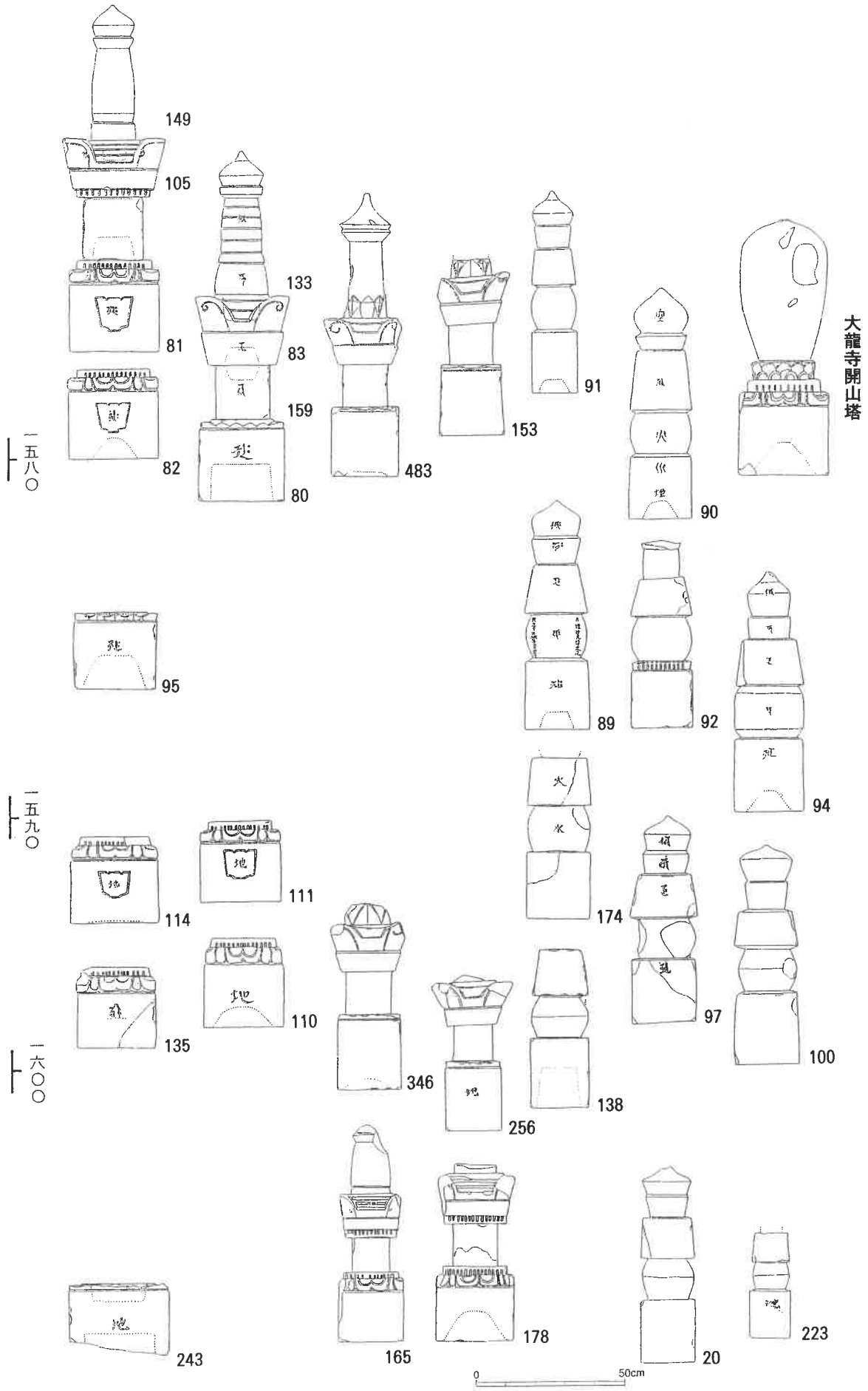
墓塔系と墓標系が分布域を異にしているのも龍昌寺跡墓地の特徴といえる。すなわち、墓塔系は尾根上から斜面の回廊状平坦部に多く、墓標系は最下段に大半が位置している。これを造営年代に置き換えると16世紀後葉から17世紀前半代には斜面（D群～I群）から尾根上（A群～C群）に造墓が行なわれ、18世紀～19世紀前半代は本堂跡斜目背後の平坦部に主要な墓域（J群）が形成されたことになる。龍昌寺は元々J区に建立されていたが、後に下段の平坦部（K群の所在平坦部）に移動・増宇したとされる。敷地跡が墓地となったのはJ区の近世墓標（笠付方形墓）銘文によれば1684（天和４）年以後と考えられる。

本堂跡前方に散在するK群は上からの転落した墓塔群であり、左手には代官川崎平右衛門の豪勢な墓標（円頂方柱型）が存在する。また、参道脇のL群は他宗派寺院からの搬入墓（浄土真宗派等）が主体、M群は地蔵像群、N群も他宗派寺院からの搬入墓標群が高い割合を示しており、本来龍昌寺に直属した墓地ではないと思われる。

＊集団・階層・信仰：本墓地では、妙正寺跡墓地のように整備された雛壇状平坦部はみられず、斜面の回廊状平坦部に多く存した墓塔系墓


A～一石宝篋印塔
B～一石五輪塔
C～組合せ宝篋印塔
D～組合せ五輪塔
E～円頂方形型墓標
F～円頂方柱型墓標
G～円頂六角柱型墓標
H～尖頂方柱型墓標
I～突頂方柱型墓標
J～笠付方形型墓標
K～笠付方柱型墓標
L～位牌型墓標
一六〇〇
一七〇〇
一八〇〇
一九〇〇
0
20cm

龍昌寺跡墓石変遷図



龍昌寺跡・戦国時代墓塔変遷図

石も転落等による原位置からの移動が考えられたので集団単位の捕捉は困難であった。しかし、墓地全体が曹洞宗派集団の奥津城であることは当宗固有の頭書の文字の存在からうかがうことができる。墓塔系には「歸」と「皈」が、墓標系には梵字種子→漢字→梵字種子と変遷しながら刻まれている。

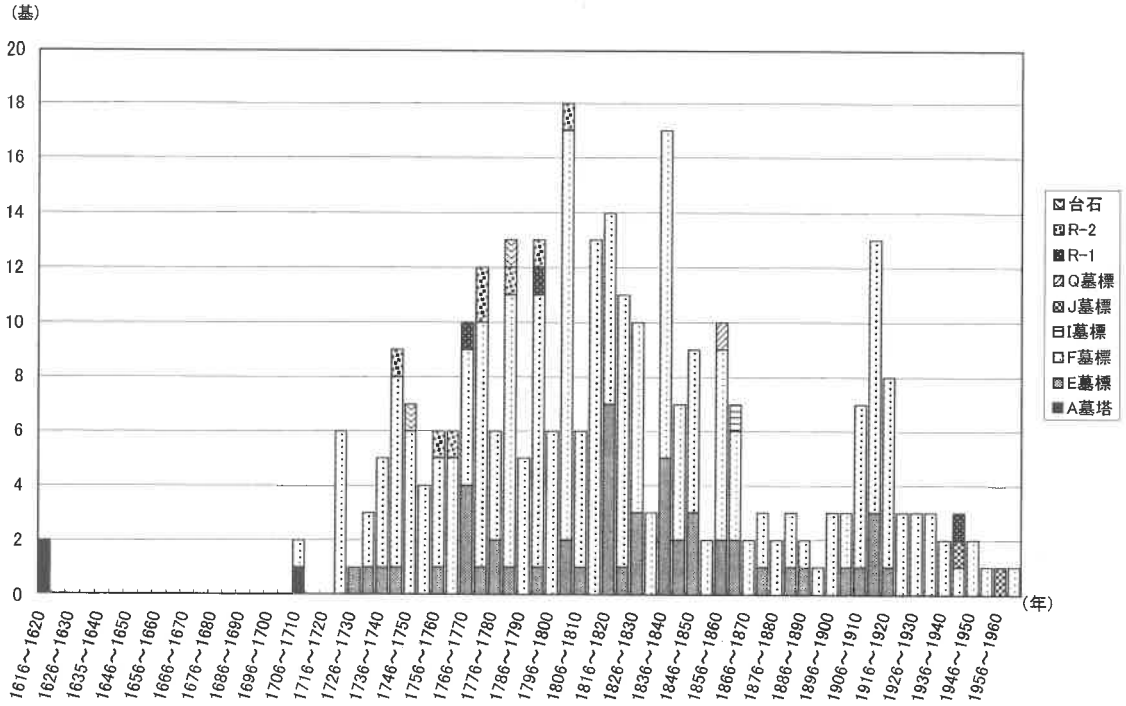
本墓地で階層差を明示するのは代官墓の存在である。K群の川崎平右衛門定孝墓は方形石垣基壇上に2段に切石を平積みし、さら切石4段を重ねて下部構造体を整えその上に連弁をもつ台石を載せ、そこに円頂方柱型の墓標を立てる。周囲には切石造りの玉垣を巡らしている。前面には4基の燈籠が立っているが、うち3基は追供養に際して立てられたことが知られる。J区の代官浅岡彦四郎胤直墓（1757・宝暦7年没）もほぼ同工の造りで切石を数段積み重ねて円頂方柱型墓標を立てる。1855（安政）年の再建墓ではあるが、その造営の仕方は川崎墓に共通する。銀山内最高位支配者の墓の実態が伝わる例である。J区には川崎定孝の夫人墓とみられる大型の円頂方柱型墓がある。円頂方柱型墓標では基壇のみならず標石の大きさにも格式の高さを表示しようとした意図がうかがえよう。同じくJ区には地役人阿部氏累代の墓誌（1830・文政13年建立）がある。前面には院号を付した戒名が併記されていた。J区西外れの岩盤に掘り込まれた石窟には逆修供養塔とみられる2基の組み合わせ宝篋印塔が納まっている。

龍昌寺の門前には「銀山大盛祈願道場」の標石が立っている。古刹で時々の支配層や「山師」等との結びつきが深く、上述のように寺域に存在する墓石を初めとする石造物の様相からも繁栄を誇った有力寺院の姿が彷彿されよう。

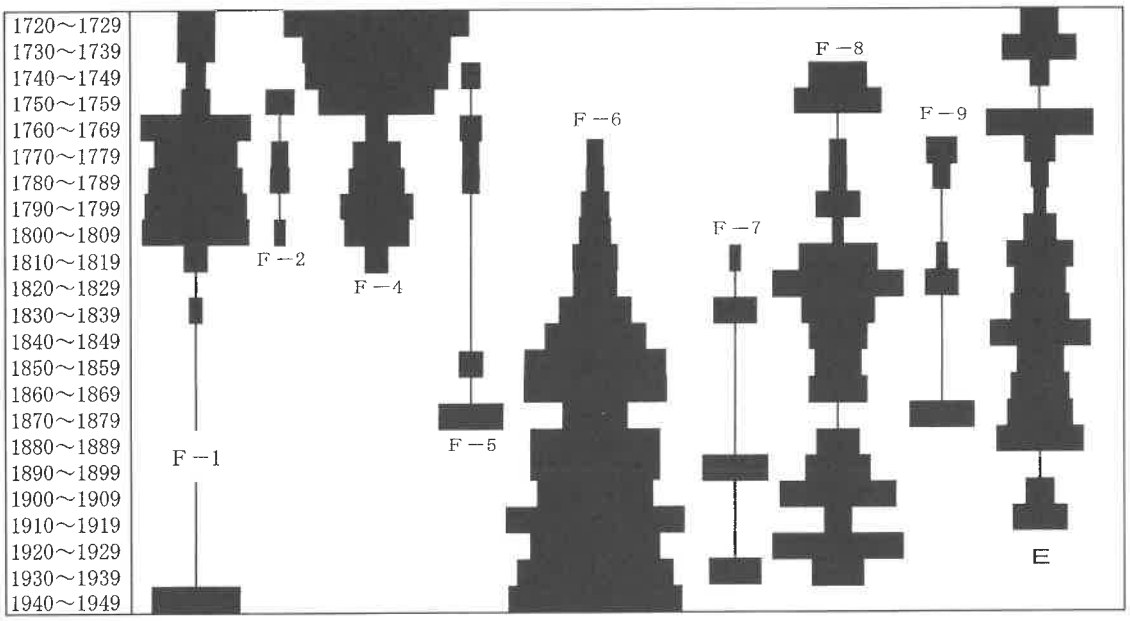
《安養寺墓地》：浄土真宗・安養寺は龍昌寺の西隣、清水谷入口にある。元は仙ノ山に開かれた天台宗の寺院で1523（大永3）年浄土真宗に改宗し、現在に至るという。墓石総数は375基を数える。

＊墓地の形状：本堂裏の小谷に面した山丘尾根上と斜面に8群の墓地が形成されている。谷奥に向かって右側の南尾根上にA群～G群＝南群、左側・北斜面にH群＝北群が分布する。後者は等高線に沿って数段の小ブロックから成っている。

＊墓石の種類：墓塔系（一石宝篋印塔・五輪塔）、墓標系（円頂方形・円頂方柱、平頂方柱平頂方柱、尖頂方柱）、その他（地蔵、自然石）



安養寺墓石造立変遷表



安養寺・主要墓標変遷表

等の２系６類９型式の存在を確認できる。

＊墓地の変遷：紀年銘を有する墓石は340基に上るが、中61基は近・現代墓と判明している。したがって近世墓は310余基となる。最古級の紀年銘は1618（元和４）年と1619（元和５）年の一石宝篋印塔で最新は1868（慶応４）年の円頂方柱型墓標等である。墓塔系と墓標系の割合は１対20で後者が圧倒的に多数を占める。墓塔系も一石類に止まっており、その点でもバランスを欠いているといえよう。いってみれば、安養寺墓地は墓標系主体の近世墓地であり、さらに近・現代にまで継承されていることに特色が存するというべきであろう。あるいは、墓塔系の蔭が薄いのは安養寺が元は仙ノ山に所在したということを暗示するのかも知れない。

A群～H群の消長から墓地の変遷をみると、始発は右尾根先端部のF群にあり、次いでE群が現われている。いずれも一石類墓塔が造立されるが、戒名から浄土真宗派ではないことが判明している。この両群で墓標系が出現するのは18世紀前葉であり、墓塔系の造立期とはおよそ１世紀間の空白がある。18世紀前半代にはB群～G群で営墓が始まり、C群以外は明治期以前終焉している。H群の造墓開始期も18世紀前半代にある。近世墓地としては19世紀後半代に衰退し、その後、20世紀前葉に急増している。何等かの社会現象に起因するのであろうか。ここでは、南・北墓地群が18世紀前半から並存していたことを確認しておこう。

＊集団・階層・信仰：安養寺墓地の特徴は頭書に「釋」を付した戒名が多数見出されたことである。ここに円頂方柱型墓標が浄土真宗特有の墓石型であることを確認するとともに門徒集団の一体性の強さに思いが及ぶところではある。族的集団例としてはK家に属する20基が捉えられた。1773（安永２）年から1869（明治２）年に至る５代96年間の造墓期間がある。１世代間＝約20年＝造墓４基と計算され、各墓はF群からD群に属している。これにしたがえば、１群＝１家族の累代墓域とはなし難いことになるとはいえ、南尾根上には概略７～８家族が歴代の墓地を営んでおり、それらが互いに親縁・地縁で結びついていたと想定することは許されるのではなかろうか。北斜面・H群の近世墓群も２家族程度の累代墓地と考えられ、南群同様に生前の在縁関係を紐帯として墓域を共にしたものと考えられる。

本墓地の主体をなす円頂方柱型墓標そのものには時期を追って造りに微妙な差異がうかがわれている。ただし、そこに階層差の存在を示すような動きは認められていない。院号を有するのはわずか１例で、これは僧侶の墓標とみられ

ている。また、苗字や屋号が刻まれた墓石も少なくなく、「木引き」と職業を特定できる例もみられ、全体として庶民層の墓地といった印象が強い。

《大龍寺墓跡地》：臨済宗・大龍寺は1585（天正13）年の創建と伝えられ、元は大龍寺谷にあり、1894（明治27）年益田市に移転している。総数39基の墓石と石殿部材等を確認した。

＊墓地の形状：小谷の奥に堂跡があり、向かって左側小丘陵先端（28基）と旧境内（11基）に墓石がみられる。それぞれ３基～５基、10基～20基程度の小さなまとまりをもって存在しているが、顕著な群構成として把握することは難しい。

＊墓石の種類：墓塔系（一石宝篋印塔・五輪塔、組合せ宝篋印塔・五輪塔、無縫塔）、墓標系（円頂方柱型）、その他（地蔵）等の２系６類７型式が見出される。墓塔系では組合せ宝篋印塔が15基以上、組合せ五輪塔１基、一石宝篋印塔５基、一石五輪塔６基、無縫塔４基で合計31基以上と割合では約80％になり、きわめて高率を示す。墓標系の円頂方柱型は２基を数えるのみである。地蔵６基、無縫塔４基はいずれも旧境内にあり、墓塔・墓標群とは別群を形成する。これらから大龍寺跡墓地は墓塔系中心の墓地ということができる。

＊墓地の変遷：尾根上の墓塔では組合せ宝篋印塔の1610（慶長15）年銘と1615（元和元）年が最古級で続いて1623（元和９）年、1624（寛永元）年墓の２基が確認されている。一石宝篋印塔では1670（寛文10）年墓、一石五輪塔では1652（承応元）年墓と1664（寛文４）年墓の計３基に紀年銘が認められた。円頂方柱型墓標２基には1748（寛延４）年、1779（安永８）年が刻まれている。前者は銘文から被葬者は他国生まれと判明した。要するに尾根上はほとんど墓塔系で占められる17世紀前葉から中葉の墓地ということになる。

旧境内内の一角にまとまって存在した無縫塔には1582（天正10）年の銘をもつ例がある。入念に細工された台座に太い無縫塔が立っている。銀山地内では最古の無縫塔であるが、銘文から当寺開山墓塔であることが分かる。創建年代に近い年代とも併せて注目されよう。

＊集団・階層・信仰：無縫塔群や尾根上の墓塔群が住持を含めて大龍寺にとくに関係深い人々の墓石等である可能性が高いと思われる。注意されるのは、石殿の部材が６点確認されていることで、これらは墓石を内蔵した施設の一部と考えられ、墓塔の中には石殿をともなう例が存在したことをうかがわせている。けだし、中世的墓石の系譜を引く墓塔系被葬者の階層的位置を解明するうえで参考にすべき資料であろう。

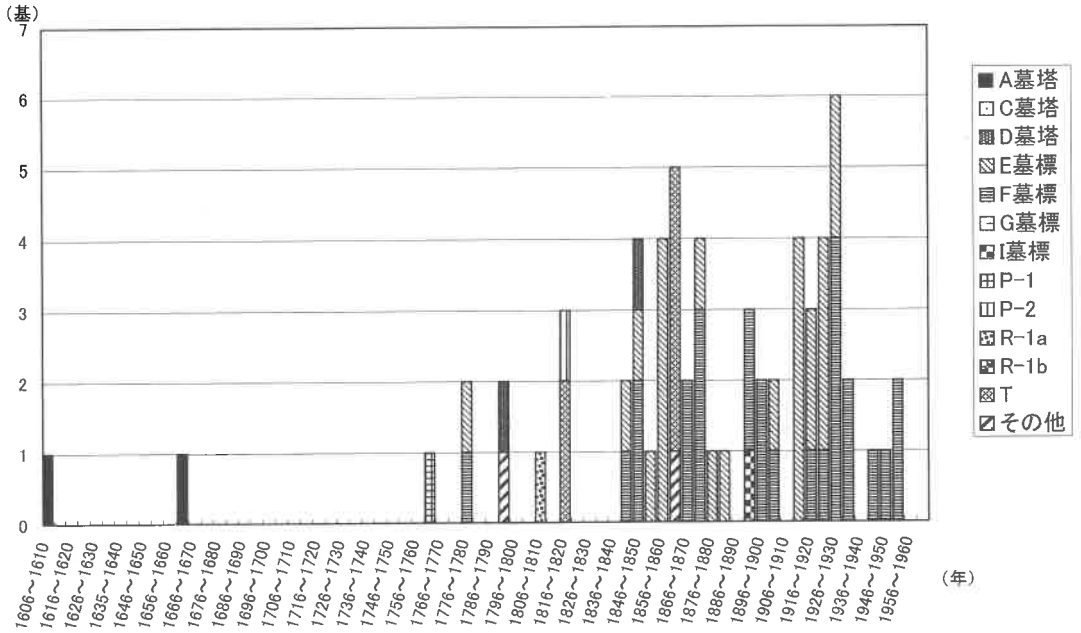
《大安寺跡墓地》：浄土宗・大安寺は、初代代官大久保長安の寄付を受けて1605（慶長10）年に創建され、以後曲折を経て1947（昭和22）年に廃寺となっている。墓域は狭小で確認された墓石は84基を数える。

＊墓地の形状：墓地は旧堂宇跡背後の斜面下方に等高線沿いに拓かれている。中央に大久保長安墓（組合せ五輪塔）と紀功碑が並び立ち、その左右（東西方向）に墓石が分布している。

＊墓石の種類：墓塔系（一石宝篋印塔、組合せ宝篋印塔・五輪塔、無縫塔）、墓標系（円頂方形型・円頂方柱型・六角柱型、尖頭方柱型）、地蔵等で２系５類９型式が認められ、その割合は墓塔系24％、墓標系69％となる。ただし、墓標系が高い比率を占めてはいるが、中、近世墓は20基に満たず、他は近・現代の墓石で、これらの多くは左手端の平坦部に集中している。

＊墓地の変遷：紀年銘で確認できる最古の墓塔は1610（慶長15）年の一石宝篋印塔で最新の近世墓は1867（慶応３）年の円頂方柱型墓標である。墓塔系の主たる展開期は17世紀代とみられるが、組合せ五輪塔は19世紀にも１基造立されている。近世墓は19世紀中頃に盛期があるが、そのピーク時でも１世代（約20年間）５基前後に止まると考えられる。

＊集団・階層・信仰：近世墓は近・現代墓と混在し、本来の墓域は確認し難い。また、墓石数からみても宗門に属する複数の家族墓群とするには大いに躊躇される。むしろ、無縫塔や円頂六角柱型墓標に残された「□□世」、「貯誉」、「照誉」、「真誉」等を含む銘文の存在から歴代住寺



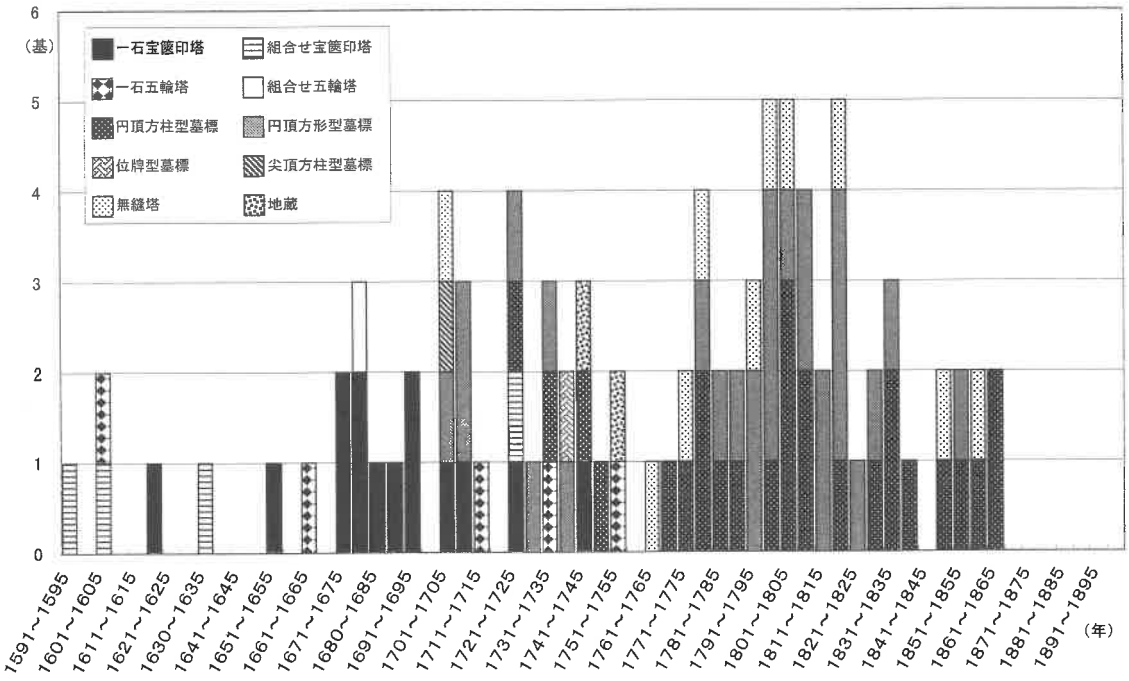
大安寺跡墓石造立変遷表

の墓を主体とした墓地とするのが適切とされる。

本墓地成立の契機が初代代官大久保長安の菩提寺創建にあることは既述した。このことと関わって注目されたのが左手一角で確認された大型の組合せ宝篋印塔である。復元高が2.06mを測る傑出した規模の墓石で長安墓として建立されたことが考えられた。現在の長安墓（墓地中央に立つ組合せ五輪塔）は1794（寛政６）年に再建されたものである。

《長楽寺跡墓地》：真言宗・長楽寺跡は昆布山谷にあり、２箇所に所属墓地が存在する。伝承では16世紀後半のある時期に仙ノ山から昆布山谷に移転したという。1877〔明治10〕年神宮寺と合併した。

＊墓地の形状：昆布山谷左側尾根上にあり、北



長楽寺石造物年代別集成表

端の寺跡周辺から南側に墓石等の分布がみられる。とくに、寺跡北西側と南側尾根上、そこからやや西側の斜面にまとまって存在している。確認された墓石等の総数は212基である。

＊墓石の種類：墓塔系(一石宝篋印塔・五輪塔、組合せ宝篋印塔・五輪塔、無縫塔)、墓標系(円頂方形型・円頂方柱型・尖頭方柱型、位牌型)、地蔵、特殊墓等の３系７類11型式で墓塔系が62％とかなり高い割合を示し、次いで墓標系が32％を占める。特殊墓とされたのは「＋」が刻まれた墓石でキリシタン墓の可能性がある。

＊墓地の変遷：最古の紀年銘墓は1594(文禄３)年の組合せ宝篋印塔である。次には17世紀前葉の紀年銘をもつ一石宝篋印塔・五輪塔が続く。これらの墓塔系は17世紀代を中心に造立され、一部18世紀中葉に及ぶ。無縫塔は1705(宝永２)年を始発とし、最新が1857（安政４）年である。墓標系では元禄10年～16年（1697年～1703年）の造立と考えられる円頂方形型墓標と尖頭方柱型墓標が見出された。円頂方柱型墓標には1723（享保８）年～1865（慶応元）年の紀年銘が確認されている。これら墓標の建立ピークは18世紀末から19世紀前葉にある。なお、本墓地では近・現代墓は存在しない。神宮寺との合併に関係するのであろうか。

16世紀～17世紀代の墓塔群は寺跡北西のやや小高い個所に集中している。墓標系は主として南側尾根上や西側斜面に墓域を形成する。

＊集団・階層・信仰：長楽寺跡墓地の最大の特色は複数の宗派墓が同一墓域に共存するという点にある。宗派としては真言宗・浄土宗・浄土真宗・曹洞宗・日蓮宗が確認されている。各宗派墓は墓地造営の全期間にわたって存在しているが、19世紀になると浄土真宗に属する墓標が増える。「＋」と刻まれた墓石もこの墓域に含まれる。一種の共同墓地ないしは惣墓地的な様相ということができようか。墓塔系を中心とした寺跡北西側の墓域は長楽寺住持の墓で占められる。前者と後者が截然と墓域を分けていることも本墓地の特色とされる。文献史料によると長楽寺は役行者との関係が深く、堂内には山伏が多数起居していたらしい。特異な有力寺院の姿相がうかがわれよう。

ⅲ）その他の墓地の調査　悉皆的方法で墓石等の調査を実施した寺社・武家・町家の墓地がある。以下にその概要と特徴点を述べておく。

《勝源寺墓地》：浄土宗・勝源寺は大森町の代官所西の山麓にある。当寺は２代目奉行竹村丹後守道清の肝煎りで慶長・元和の頃に建立されたという。境内の一角と隣接墓地には当の竹村丹後守の墓所他５人の代官・奉行の墓が営まれている。

＊墓地の形状：山門を入った右山裾に竹村墓所と代官森八左衛門墓所、門前右の斜面と裾には代官関忠太夫墓所・同前澤藤十郎墓所が他の墓石と共に１列に並ぶ。その背後に代官會田伊右衛門墓所が単独で造立されている。寺の後の墓地には多数の墓が存立し、その奥まった処に代官鈴木八右衛門墓所がある。

＊墓石の種類と変遷：竹村墓所は組合せ宝篋印塔（高さ1.25m）を切石組切妻平入り形式の石殿内に納めたものである。銘文から1635（寛永12）年の造立と判明する。殿内に並立された無縫塔は竹村夫人墓とみられる。関墓所・會田墓所・鈴木墓所には円頂方形型墓標が立ち、前澤墓所・森墓所では平頂方柱型墓標が建立されている。森八左衛門墓は1853（嘉永６）年造立。以上からすると、代官・奉行墓も他寺院墓同様に墓塔系から墓標系に移行しており、墓標系では鈴木八右衛門墓（1716・享保元年建）が先行している。

＊集団・階層・信仰：代官墓の特徴は切石を積重ねた基壇にある。標石そのものは一般のそれと大差ないが、基壇を高く設えることによって全高の数値を上げている。さらに、切石造りの玉垣を巡らし、燈籠等を建てることによって豪壮さを醸し出しているのである。　また、戒名においても「□□院殿□□居士」とする例が多い。これも格式の直接的表示といえよう。

代官墓に関しては、妙蓮寺墓地在の阿久澤修理墓所が調査されているが、切石を積み上げた基壇上に平頂方柱型墓標を建てる。玉垣を巡らし、燈籠を付設する雄壮な墓所である。

《地役人の墓地》：銀山役人の上層部を構成した

地役人河島家・宗岡家墓地の墓地も調査したので序にその特徴点を要約して述べておく。

①河島家墓地：河島家墓地は大森町の浄土真宗・西性寺裏山の山頂部にある。頂部縁に86㎡の平坦面を造成し、そこに25基の墓石が佇む。この中、河島家の墓石は21基でほぼ1列に並ぶ。合葬墓や世代墓が含まれているので墓数と被葬者の数は一致しないが、おおよそ17世紀前半の初代から20世紀前葉に至る8代の累代墓地と確認できる。近世墓としては7代の19世紀中葉のものがもっとも新しい。墓標型式としては円頂方形型・円頂方柱型・円頂六角柱型・平頂方柱型があり、後2者は例数の少ないやや格上の墓標型式とみられている。前2者でも基壇を高くして存在感を示す工夫がうかがわれる。山頂の一角に一定の墓地を確保し、そこに格式の高さを偲ばせる墓石が累代的に配置される態に地役人の社会的位置を読み取るべきであろうか。なお、初代と2代目墓には浄土宗系の頭書があり、3代以降では浄土真宗系の頭書が刻まれる。檀那寺を西性寺に変えた際に改宗したことが考えられている。墓地もその時に再編されたのであろう。

②宗岡家墓地：宗岡家墓地は河島家墓地と同様西性寺裏山の山頂部付近斜面にある。65㎡の平坦地に19基の墓石が2列に並ぶ。いずれも円頂方柱型墓標で「釋」の頭書がみられる。これらの墓標は『由緒書』から7代（19世紀前葉）から12代（20世紀前半）に至る6代の世代墓群とみなされている。墓標系墓の最新は9代墓（19世紀中葉）である。7代以前の墓地は上方に造成され12基の墓標（円頂方形型・円頂方柱型・位牌型）が確認されている。墓標系墓21基中7基は高い基壇上に墓標本体を建てており、その全高は1.2mを越える。河島家墓地程ではないが、地役人墓地の風貌が垣間見えるといえようか。

《熊谷家墓地》：熊谷家は地役人を勤めた銀山切っての大商人で、墓地は代官墓のある勝源寺と道路を介して並存している。67基の墓塔系・墓標系墓石が3列に整然と並ぶが、これは道路開削の際墓地を新設した再配置したことによる。墓標の型式と個数は円頂方柱型34基、平頂方柱型25基、円頂六角柱型1基に一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔の基礎2基等となっている。初代の没年は1635（寛永11）年で現存墓石は後世の再建である。本墓地の大きな特徴は、歴代当主（5代～16代＝1736年～1974年、近世墓は12代の1858年まで。1世代間は平均で12年程度）と他の一族、あるいは「奉公人」の墓石の型式と造りに格差が認められことであろう。当主夫妻墓には主として平頂方柱型墓標が採用され、戒名に院号を付けるものが多い。墓標も高く、石材に福光石と花崗岩を併用している。豊かな経済力と政治的地位に裏付けられた家父長制的大家族の実態が色濃く反映された墓地ということができよう。

《羅漢寺五百羅漢坐像》：真言宗羅漢寺の門前岩壁に掘削された石窟には500体余の羅漢坐像が安置されている。以前から、窟の痛みが酷くなり、その保全が緊急の課題となっていた。今次、銀山遺跡を構成する重要な石造物群であるとの認識から窟内外と坐像について悉皆的調査を実施している。窟内については中央石窟に釈迦三尊仏の石像、左・右室合わせて502体の羅漢坐像について配置状況・姿態・銘文等について詳細な記録が作成された。最古の紀年銘は1627（寛永2）年であるが、開設は1757（宝暦7）年とされており、始発年代を示すものとは考えられないという。完成は9年後の1766（明和3）年。この羅漢像造設には羅漢寺初代住職月海浄律を中心に代官関忠大夫や川崎平右衛門、町内有力者等の尽力があったとされる。調査の結果、江戸城を初めとして幕府直轄地、石見・出雲等の遠・近国からの布施を得ていることや造工に関する知見がえられた。近世期に銀山域が全国的な情報ネットを有していたこと、あるいは、当時の信仰のありようを伝える貴重な記念物であることが判明した。

3．石造物調査の到達点

ｉ）分布調査から　石見銀山遺跡内に残る墓石等の石造物の総数は1万5000余基と考えられ

た。その中、銀山柵内では69ヵ所・約6500基が確認されている。集中度が高いのは銀山川上流の昆布山谷・栃畑谷・出土谷・大谷の諸地区を併せた地域で、四つの谷の合計墓数は柵内総数の50%を占めている。同時にこの地域では総じて墓塔系の割合が高く、16世紀後葉の紀年銘をもつ墓石も比較的多い。文献上で早期の開発が確認されていることと符合する事実といえようか。ただし、出土谷地区だけは墓標系の比率がやや高いが、その背景については前節で触れた。また、大谷地区で神宮寺第Ⅰ寺院跡と本経寺跡の2墓地が18世紀後半から活況を呈している。上流地域が盛衰を経ながら一貫して生産拠点地域としての役割を果たしていたことを物語る事象であろう。さらに、銀山守り神の佐毘売山神社が昆布山谷・栃畑谷・山土谷の3谷口付近に早く創建され、大谷・栃畑谷の合流部近くには太鼓堂が設置されたことなどにも地域としての一体性が看取されるところである。

次に、銀山川中流の休谷・清水谷・下河原3地区の総数に対する割合は36%と算出された。併せて墓石のそれでは墓標系が63%を占めることが判明し、上流地域よりやや遅れて盛況期が到来したかの印象を受ける。この地域は、すでに指摘したように、16世紀後葉期の毛利氏支配以来柵内政治的機能の中枢地であり、かつまた、仙ノ山・銀山川上流域の生産拠点に通ずる幹線路の結節地として機能したことが考えられる。墓石・墓地に現れた事象はそうした地域性とも深く関わることが想定される。

仙ノ山の石銀地区の場合はすでに述べたたように墓塔系が圧倒的な高率を示した。このことは本谷地区で墓標系の小規模な墓地以外に有力な墓地がみられないことなどとも合わせて検討が必要と思われる。あえていえば、このような事象は、仙ノ山から本谷一帯の開発が16世紀代(現状では後半期)より17世紀代にかけて進行し、18世紀以降は下火になったことの表れで、同様なことは石銀地区・於紅谷地区・竹田地区の発掘調査の結果からも推定されたところである。

分布調査の成果としていま一つ注意すべきことに単体的に造立された石造物の問題がある。柵内の諸墓地は寺院に付設される例が圧倒的に多く、いわば、菩提所の一機能区として形成されている。寺院跡がやや不明瞭な石銀地区の場合も墓石群に対応する寺院跡らしき平坦地が見出されるとされるから寺院墓地の成立は人が集住して街区が形成されることと連動しているように見受けられた。ところが、これとは別に1体ないし2体の石造物が単独で存在するケースもままあり、本谷地区のそうした例についてはすでに紹介済みである。同類は清水谷谷頭付近で検出されているが、その大多数は墓塔系の墓石で、造立年代は、竹田地区の組合せ宝篋印塔の紀年銘(慶長7年)が示唆するように、17世紀代が中心と思われる。加えて所在場所が間歩や製(精)錬地に近接することなどから事故死者の供養とか間歩開発者の顕彰碑的意味合いから建立されたのではないかと考えられる。

大森地区では柵内に次ぐ墓石数がえられた。墓塔系・墓標系の割合と紀年銘によってたどられる墓地変遷の傾向は下河原地区に似るところがあるが、当地区ではさらに近・現代にまで継承されていることに注意を払う必要があろう。

仲野義文氏の教示によると、「銀山町」の人口は1676(延宝4)年に317戸1564人、同年の「大森町」は120戸452人を数え、1692(元禄5)年には「銀山町」350戸1871人と歴年中のピークを記録している。この年の「大森町」は180戸719人であった。ところが、近世末期の1838(天保9)年には「銀山町」400戸と個数は増加しながらも人口は1242人と減少している。とくに男性数の減っているのが注目された。同年の「大森町」人口は260戸1099人で「銀山町」人口数に接近している。こうした詳細な記録は墓地の様相に一致するところがあるように思われるが、なお、より精密な調査に期待するところ大である。いずれにしても、17世紀末以降「銀山町」と「大森町」合わせて2300人前後の人口を擁していたことに注目しておきたい。

ⅱ)悉皆調査から:この調査の最大の成果は墓塔・墓標の型式が定められ、さらに紀年銘を手掛かりとして型式変化の過程が明らかにされ

たことにある。これによって各寺院墓地の変遷や宗派の意義等について具体的に論じることが可能となった。個々の墓地についてはそれぞれの項において様相と特徴点を摘記したが、以下、今次までの調査の到達状況を確認しておこう。

寺院付設墓地は、その多くが小谷の谷口付近に堂宇を構え、その背後や周囲の山丘尾根上から山腹にかけて等高線に沿って雛壇状の平坦部を設け、そこに列状に墓石を配置している。当然ながら、寺院建立が墓地形成の契機をなし、寺院の趨勢と墓地の展開は相関的に進行したものと考えることができよう。

度々述べたように、これら墓地を構成する墓石には大別して中世墓の伝統を引く墓塔系と近世的特徴を顕示する墓標系の２者が存在した。両者の対応関係は、墓塔系が先行し、これを追って墓標系が造立されるという形をとっている。その移行状況としては、墓地による多少の相違がみられるものの、17世紀後半から18世紀前葉にかけて前者から後者へと転換する相が認められ、墓石のあり方からは16世紀後葉より17世紀代の墓塔系を主体とする時期と18世紀から19世紀中葉に至る墓標系主体の時期に区分することが可能である。なお、墓塔系に一石類と組合せ類の存することも既述のとおりであるが、中、一石五輪塔等は比較的後代まで造立されている。墓標系には多数の型式が定立され、その各々が相互補完をなして一墓地を形成しているのでが、主流は円頂方形型と円頂方柱型で占められる場合が一般的であった。また、墓塔・墓標２系の存在状況は墓地毎に異なることが認識された。すなわち、墓塔系から墓標系への移行が一墓地内で認められる妙正寺跡・龍昌寺跡・安養寺・長楽寺跡の諸墓地、墓塔系がほとんどの大龍寺跡墓地、悉皆的調査によるものではないが、墓標系が大勢をなす西福寺跡・本経寺跡等の墓地が識別された。これらを分布調査の結果も含めて類型的整理すると以下のようになる。

＊Ⅰ類　墓塔・墓標型

a・墓塔系主墓標系従墓地→悉皆＝龍昌寺跡・長楽寺跡。分布＝石銀Ⅳ・妙本寺上と妙本寺跡・字甚光院跡・清水寺第Ⅱ寺院跡。

b・墓標系主墓塔系従墓地→悉皆＝妙正寺跡・大安寺跡・安養寺南。分布＝石銀Ⅴ・本経寺跡・本法寺跡・大満寺跡。

＊Ⅱ類　略墓塔型

悉皆＝大龍寺跡。分布＝石銀Ⅲ・石銀Ⅱ・龍源寺間歩上・大谷極楽寺跡・徳善寺跡。

＊Ⅲ類　略墓標型

悉皆＝安養寺北。分布＝西福寺跡・西本寺跡。

次に、悉皆調査の成果として上げておくべきことに墓地を構成する集団の問題や階層差に関わる知見の獲得といったことがある。まず、墓地全体についていえば、宗派・檀家集団墓とするのが適当であろう。実際、妙正寺跡墓地では戒名頭書に日蓮宗派の「妙法」を、龍昌寺（曹洞宗）跡墓地では「皈」、「歸」等を、安養寺（浄土真宗）跡では「釋」をそれぞれ刻む例が数多く見出された。他方、長楽寺（真言宗）跡墓地では真言宗派の頭書・梵字「ア」と共に浄土宗の「誉」、浄土真宗の「釋」、日蓮宗の「妙法」、曹洞宗の「皈空」に加えて「十」を刻んだ墓石が発見され、本墓地を一種の共同墓地として認識したところである。序にいうと、妙正寺跡墓地、龍昌寺跡墓地では浄土真宗系の墓標群が混在したことも事実で、このことからも一宗門が排他的に墓地を営んでいたとは考え難い。もっとも、安養寺北墓地のように浄土真宗派のみで形成された墓地も存在しており、事情はかなり複雑といわざるをえない。1789（寛政元）年の記録によれば、銀山町には26ヶ寺があり、宗派別では日蓮宗・真言宗・禅宗・浄土宗がそれぞれ５ヶ寺、浄土真宗が６ヶ寺となっている。この26ヶ寺体勢は19世紀中頃まで維持されていて、そこには何等かの政策的なものが介在していたことを予測させる。寛政期以降の作成という野沢氏蔵の絵図には昆布山谷筋に長楽寺他２寺（長福寺・虎岸寺か）、栃畑谷筋に西向寺・妙像寺・龍源寺・妙本寺、出土谷筋に西福寺、大谷筋に徳善寺・本経寺・西善寺・神岩寺・極楽寺他１寺（神宮寺第１寺院か）、休谷・清水谷・下河原地区に宝珠寺・清水寺・大龍寺・本

法寺・安養寺・龍昌寺・安立寺・長安寺・西本坊・長泉寺・大安寺・妙正寺の26寺が印されている。銀山川中流域に半数近くが集中していて注目されるが、ずれにしても、限定された範囲に多くの宗派寺院が共存する状態には天領・鉱山町といった地域性が規定的な影響を及ぼしているとみなさざるをえない。

墓地中の平坦部を単位とした墓石ブロックが何等かの族的集団に対応するか否かについては否とするのが妥当であろう。現状では経年的に被葬者が増加するのに応じて平坦部を逐次造成、その際、先行墓石の整理も行いながら漸次墓地を形成したものと考えられる。妙正寺跡墓地や安養寺墓地などでは家族的集団の累代墓群が復元されたのであるが、そこには1世代間約20年＝4基造立といった傾向が看取された。先の寛政元年の銀山町1戸平均約3.6人（戸数398戸、総人口1447人）と符合するやにみられて興味深い。ただし、雄勢家・熊谷家では1世代の平均年間隔が12年と短い。

各墓地間、あるいは一墓地内で階層的差異が認められたのも石見銀山遺跡の特徴といってよいであろう。勝源寺墓地や熊谷家墓地は最上位階層に位置する武家と町家の墓地であり、龍昌寺跡墓地では代官墓やその家族墓の墓石に顕著な階層表示が認められた。また、大森地区では地役人層が一定の墓域を占有する累代墓地を営んでいた。さらに、妙正寺跡墓地等では墓石の造作や戒名によって存在を誇示するが如き例が認められている。あるいは、大龍寺跡墓地と長楽寺跡墓地の無縫塔群が住持墓と判明したことも記憶に止めておく必要があろうし、各墓地に少なからず見出された地蔵についても墓地構成の一要素として位置づけ、意義付けることが求められよう。併せて、墓地出土の要石に関する分析が残されたことを付記しておきたい。

4．今後に向けて

ここ5年間にわたって実施した石造物調査は、墓地・墓石を主たる対象として進めてきた。墓石に刻まれた紀年銘等の銘文と墓石の型式が一体的に把握できるという資料の特性に導かれて有効な分析と考察を実現でき、当初の目的に大きく接近しえたのではないかと考える。そして、これら諸成果の多くが池上悟教授等の業績に帰するものであり、そのことをあらためて明記しておくべきであろう。

今後は、上記した成果に立ち、さらに所期の目的に向かって調査の精度を高め対象範囲を広めて銀山遺跡の変遷と特質のさらなる解明に進む所存である。当面、考えられる課題としては、当初に調査した仙ノ山・石銀地区の石造物について、いま少し密度の濃い調査を行い、早期に開発された同地区の実態をより鮮明することがある。また、銀山川上流域、大森地区、温泉津地区についても対象墓地を選定して悉皆的に調査し、街区の生成・発展状況を捉えたいと思う。一墓地の構成と変遷に関しては文献上で知られる銀山町の階層状況などとの対応を意識して町の人々の動きが具体的に明らかになるような突っ込んだ調査が求められるところである。

今期調査で確認された石造物の総数は14000基に達した。しかし、石見銀山遺跡の時間的・空間的広がりからすれば、なお、初歩的な到達状況に止まることを自覚しなければならない。今後は生産遺跡の発掘や文献研究との連携をさらに深めて銀山遺跡総体のいっそうの解明に資する必要があると考える。わけても、16世紀代の動向については調査方法の検討を含めて究明の手を積極的に差し伸べたいものである。

（田中義昭）

追記　石造物調査の総括に当っては大国晴雄、遠藤浩巳、中田健一、鳥谷芳雄、仲野義文の各氏から多くの教示と資料の提供を受けた。負うところを明らかにし、感謝申し上げるとともに文責が田中義昭にあることを併せて記す次第である。なお、本文中の図表はすべて各調査年次の報告書から転載したものである。

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざん　いわみぎんざんいせきせきぞうぶつぶんぷちょうさほうこくしょ５
書　　名	石見銀山　　石見銀山遺跡石造物調査報告書５－分布調査と墓石調査の成果－
副書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
巻　　次	５
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
シリーズ番号	５
編執筆者	田中義昭、池上悟、宮本徳昭、長嶺康典、中田健一、守岡正司、鳥谷芳雄
編集機関	島根県教育委員会　大田市教育委員会
所在地	〒690－8502　島根県松江市殿町１番地　TEL0852－22－5649 〒694－0064　島根県大田市大田町大田ロ1111番地　TEL0854－82－1600
発行機関	島根県教育委員会　大田市教育委員会
発行年月	2005年３月
調査原因	石見銀山遺跡総合調査

所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査年月日	調査面積（　）
石見銀山遺跡	大田市大森町 （市町村コード） 32205	35度 ５分 30秒 （仙ノ山）	132度 26分 30秒 （同左）	1997年～2003年	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	石造物	特記事項
石見銀山遺跡	鉱山 寺院 墓地	戦国～近代		一石宝篋印塔 一石五輪塔 組合せ宝篋印塔 組合せ五輪塔 円頂方形型墓標 円頂方柱型墓標 円頂六角柱型墓標 尖頂方柱型墓標 尖頂方柱型墓標 平頂方柱型墓標 笠付刳り込み型墓標 笠付方形型墓標 笠付方柱型墓標 笠付六角柱型墓標 位牌型墓標 その他	

石見銀山遺跡石造物調査報告書 5
石見銀山－分布調査と墓石調査の成果－

平成17（2005）年３月

編　集　島根県教育委員会・大田市教育委員会
松江市殿町１番地　大田市大田町大田ロ1111番地

発　行　島根県教育委員会
松江市殿町１番地
URL　http://www2.pref.shimane.jp/ginzan/

印　刷　株式会社 報　光　社